# 第42回少年の主張全国大会

## ── わたしの主張2020 ──

# 報告書

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

# はじめに

第４２回少年の主張全国大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、令和２年１０月２９日～１１月３０日までの期間、ＷＥＢページに主張発表動画を掲載して開催し、開催の様子は佳子内親王殿下にもご視聴いただきました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和５４（１９７９）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいとの思いも込め、毎年実施されています。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも全国２,６６０校の中学校から、約２５万人の中学生が応募してくれました。

そして、全国大会では、各都道府県大会や今大会に限り設けた「直接エントリー制度」により選抜された４７名の中から、有識者や過年度大会受賞者等で構成される審査委員会により選ばれた１２名の中学生が、それぞれの思いや決意を発表しました。

内閣総理大臣賞を受賞した鹿児島県代表の池島 音羽さんは、「言葉を紡ぐ」と題し、いじめを受けてどうしたらいいか迷っていた時、母親から自分の想いを相手に伝えることが大切だとアドバイスを受け、勇気を持って SNS で自分の想いを言葉にして伝えることで、すれ違いや誤解を解き、いじめを解決したことを主張しました。

文部科学大臣賞を受賞した栃木県代表の荒井 千恵理さんは、「静から動へ」と題し、幼少期から続けてきた書道に加え、中学校から剣道部に入部して新しいことにチャレンジしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で今まで当たり前だった生活が一変し、こういう時こそ静の世界で内観して熟考し、動の世界へ進みたいことを主張しました。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した愛知県代表の戸塚 優羽さんは、「目には見えないもの」と題し、吃音症という聞きなれない障害に不安が募ったが、周囲の支えにより吃音症は個性と捉えられるようになり、ありのままを認められた経験から、障害を前向きに捉え、目には見えない悩みを持つ人に気づき、支えられる自分でありたいことを主張しました。

このほかにも、父の実家であるネパールに行き、ヒマラヤ山脈の壮大な景色とそこに暮らす人々の温かい眼差しが本当の幸せについて考えるきっかけをくれたという主張や、脳性麻痺の自分がイベントに絵を出展したことをきっかけに、自分らしく生きていくために絵を描き続けたいと思うようになったという主張、家族とともに中国から移住し、日本と中国の教育制度の違いに驚愕しながらも、歴史を学びながら２つの国に役立てる人になりたいと決心したという主張など、今大会も多種多様な発表が見られました。

この報告書では、全国大会で発表された１２作品をはじめ、各都道府県及び「直接エントリー制度」による主催者推薦の代表となられた４７作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい溌剌とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募してくださった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、ご後援、ご協力を賜りました内閣府、宮内庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和３年　１月
国立青少年教育振興機構
理事長　　鈴木　みゆき

# もくじ

お祝いの言葉 …… 1
審査委員長挨拶 …… 2
講評 …… 3
少年の主張都道府県大会風景 …… 4
少年の主張全国大会出場者の発表作品 …… 5
　＜内閣総理大臣賞　鹿児島県代表　池島　音羽さん＞ …… 6
　＜文部科学大臣賞　栃木県代表　荒井　千恵理さん＞ …… 7
　＜国立青少年教育振興機構理事長賞　愛知県代表　戸塚　優羽さん＞ …… 8
　＜審査委員会委員長賞　静岡県代表　村松　グルン　良智美さん＞ …… 9
　＜審査委員会委員長賞　島根県代表　武田　はぐみさん＞ …… 10
　＜審査委員会委員長賞　熊本県代表　大田　直人さん＞ …… 11
　＜国立青少年教育振興機構奨励賞＞ …… 12
少年の主張全国大会努力賞受賞作品 …… 18
実施概要 …… 54
審査委員の感想 …… 59
少年の主張全国大会を振り返って＜参考資料＞ …… 65
第 43 回少年の主張全国大会　開催のお知らせ …… 75

# お祝いの言葉

本大会は、国立青少年教育振興機構の主催により、毎年度、全国から選ばれた中学生の皆さんが、学校生活や日常生活の中で考えたことや人に伝えたい思いなどを発表する場として開催されているものです。

例年、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催していましたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、「第４２回少年の主張全国大会 Web 開催特設ページ」で代表の皆さんの動画を公開し、優秀者を決定するという方法となっています。

今回、特設ページで公開された１２名の代表の皆さんの発表は、日常の生活や学校での出来事、家族に関すること、またそれらを踏まえた考えや思いなどを自分なりに表現したものであり、心のこもった素晴らしい内容で、大変感銘を受けました。きっと多くの皆様の胸にも伝わるものと思います。

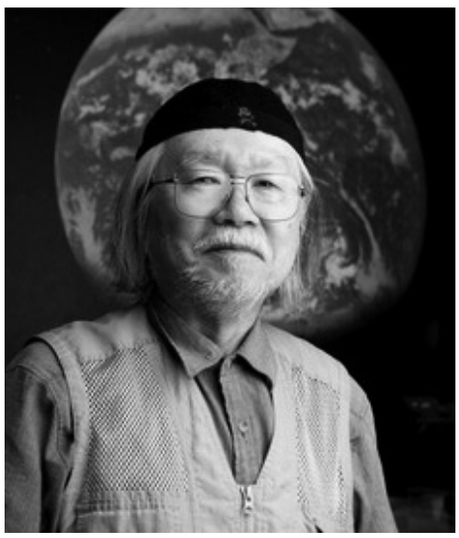
また、惜しくも全国大会の１２名に入らなかった応募者の皆さんの発表も、素晴らしいものがたくさんあったと聞いています。皆さんの今後の御活躍を祈念しています。

応募者の皆さんと、その御指導に当たってくださった教職員の皆様、中学生たちを応援してくださっている御家族の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

この大会が、我が国の子供たちの健やかな成長につながることを願っています。
ぜひ、中学生たちの発表を通じ、彼らの熱い思いに触れてください。

文部科学大臣　萩生田　光一

# 審査委員長挨拶



今年も審査委員長を務めさせていただきました。まずは、全国から約 25 万人の中学生に応募いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

今年の審査は例年以上に難しく、全国大会発表者 12 名の選考、そして全国大会の各賞の決定には非常に時間がかかりました。

努力賞を受賞された皆さんの作品も素晴らしいものばかりでした。惜しくも全国大会で発表することはかないませんでしたが、ぜひ胸を張って欲しいと思います。

今回の審査では、発表された皆さんの溢れんばかりの「若さ」と「気力」を感じ取りました。明るく力強い発表の中には、同世代の若者に訴えかけるものや自身の経験に基づいた説得力のあるもの、未来に向けたメッセージといった新鮮で心打たれるものが数多くあり、大変感動するとともに、未来を担う皆さんが未来に向けて羽ばたく姿を想像することができ、とても嬉しい気分になりました。

私は若い頃から様々なことを体験しながら育ち、痛い思いや苦しい思いもたくさんしてきましたが、それが経験として蓄積されることで困難を乗り越えてきました。今は大変な状況が続いていますが、この困難を乗り越えるためには若い世代の「気力」がとても重要です。中学生の皆さんが「若さ」と「気力」で困難を乗り越え、明るい未来を切り開いてくれることを信じています。

最後になりますが、全国大会に推薦され各賞を受賞した皆さん、そして本大会に応募いただいた皆さん全員の健闘を称えたいと思います。

また、本大会の運営にご尽力をいただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

第 42 回少年の主張全国大会審査委員会
審査委員長　松本　零士
（公益財団法人　日本宇宙少年団　理事長）

# 講評

新型コロナウィルスの世界的パンデミックで、人類はこれまで経験したことのなかったような緊急事態に直面し、中学生の皆さんにとっても思いがけない一斉休校と卒業式や修学旅行等の行事の中止や制限、運動・文化の大会の中止等々、生活が一変してしまったことと思います。ただでさえ様々な悩みを抱える人間形成の大切な時期に、この厳しい環境をどう乗り越えるかという大きな課題を抱えて、今年の主張は一層、時代をえぐり、心の内の葛藤を伝えてくれるものになりました。

大会そのものも、感染防止のため一同に会することができず、動画での審査ですし、県によっては地区大会が開催できなかったため、直接エントリーしていただく形もとりました。ただ、これで明らかになったのは、どんなメディア＝手段をとっても、皆さんはきちんと思いを伝えることができている、ということです。

中学３年生の今は、今しかない。コロナ収束後にやればいいじゃない、というわけにはいかない、という強い思いには心を揺さぶられました。そのために、知恵を絞って工夫をしている姿も眩しく映ります。

凄絶な医療現場を思いやりながら自分たちにできることを模索し、生徒会でマスコット・キャラクターを作ったことや、国境なき医師団のような国際的活動を知ったら、そこで止まらず皆に情報発信してできる参加をしていく、ボランティアで「時間」を提供する、静から動へとつなげていく、など、行動に移す勇気が素晴らしい。その意味では、いじめにあってしまっても心を強く持って、今時らしい SNS を使って自力で解決した体験は私たちの心に深く鋭くささりました。

吃音症や脳性麻痺などは個性である、と肯定的に受け止めて、明るく力強くコミュニケーションを取る姿も感動的です。発表も立派で、言われなければわからないほど自然でした。

ネパールや中国など、global 時代らしい identity にまつわる思いも、大変前向きで明るくこなしているところが心を打ちます。

そして、データでの現状分析に対する違和感。数字の上には一人一人の人生がある、全てに名前がある、という主張は、マスコミにとっても心して聴くべきものでした。

それぞれに深く考え、自らの心を掘り下げ、そして行動にまで移していく素晴らしい人間力を感じさせてくれる発表でした。しかもそれが自然体、というところがまた頼もしい。賞を獲得した方々は勿論ですが、主張を寄せて下さった全ての皆さんに感謝し、コロナ禍に負けず、無限の可能性を開花させていただきたいと心から願っています。

第 42 回少年の主張全国大会審査委員長代理
宮崎　緑（千葉商科大学教授・国際教養学部長）

# 少年の主張都道府県大会風景

岩手県大会

岩手県代表　鈴木　凜さん

岩手県大会　記念撮影の様子

埼玉県大会

埼玉県代表　水谷　卓郎さん

埼玉県大会　記念撮影の様子

石川県大会

石川県代表　緒方　杏菜さん

石川県大会　記念撮影の様子

徳島県大会

徳島県代表　戎田　真梨子さん

徳島県大会　記念撮影の様子

佐賀県大会

佐賀県代表　佐藤　ひかるさん

佐賀県大会　記念撮影の様子

# 少年の主張全国大会出場者の発表作品

■　誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
■　全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

## 内閣総理大臣賞

**【九州ブロック】**

鹿児島県　霧島市立横川中学校　３年
池島　音羽　『言葉を紡ぐ』

## 文部科学大臣賞

**【関東・甲信越静ブロック】**

栃木県　大田原市立金田北中学校　３年
荒井　千恵理　『静から動へ』

## 国立青少年教育振興機構理事長賞

**【中部・近畿ブロック】**

愛知県　豊田市立末野原中学校　３年
戸塚　優羽　『目には見えないもの』

## 審査委員会委員長賞

**【関東・甲信越静ブロック】**

静岡県　浜松市立北浜中学校　３年
村松 グルン 良智美　『人生のかけがえのない財産について』

**【中国・四国ブロック】**

島根県　松江市立宍道中学校　３年
武田　はぐみ　『「らしさ」を輝かせる』

**【九州ブロック】**

熊本県　熊本市立出水南中学校　３年
大田　直人　『你好（ニーハオ）ニッポン』

## 国立青少年教育振興機構奨励賞

**【北海道・東北ブロック】**

福島県　二本松市立安達中学校　３年
菊地　瑠奈　『私たちにできること』

**【関東・甲信越静ブロック】**

長野県　長野市立東部中学校　３年
向　彩音　『被災の地で』

**【中部・近畿ブロック】**

岐阜県　土岐市立土岐津中学校　３年
桑原　萌夏　『希望の架け橋を架けよう』

**【中部・近畿ブロック】**

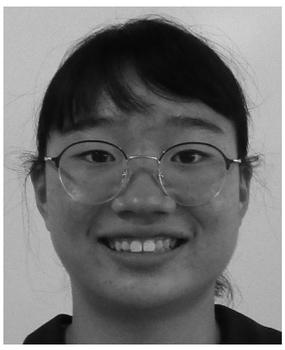
大阪府　泉大津市立誠風中学校　３年
八木　佑理　『UNCOUNTABLE』

**【中国・四国ブロック】**

鳥取県　鳥取市立桜ケ丘中学校　３年
谷口　真緒　『母のお弁当』

**【主催者推薦】**

宮城県　仙台市立上杉山中学校　３年
荻原　花埜音　『「考える」』



内閣総理大臣賞受賞

# 言葉を紡ぐ

鹿児島県　霧島市立横川中学校　3 年

**池島　音羽**

「音羽ってさ、最近調子乗ってるよね。偉そうにさ。まじ、ウザい。」
それは、突然のことだった。冬が、静かに足音を忍ばせながら近づいていたあの日。放課後の教室に冷たい風が吹き抜けた。息ができなかった。ただ、茫然と立ち尽くすしか。心の奥を鋭い刃物でえぐられる。無理に笑おうとすると、頬が引きつった。私、今、どんな顔してるんだろう。真っ白な世界にただ一人取り残された。頭の中に浮かぶのは、疑問だらけ。ついさっきまで、仲良く話してたよね。どうして。どうして私が。私、そんなに調子に乗ってたかな‥何か、悪いことしたかな。

その日からすべてが変わった。ひそひそ話をする友人の姿を見ては、その場から逃げ出した。怖かったから。きっと自分のことをいってるんだろうって思った。そそくさと教室を出る私の背中に浴びせられた言葉。
「ほんと何なのけ。ウザいんだけど。」

誰かに相談したくてもできなかった。相談したら、また何かいわれるんじゃないかとおびえる日々。ベッドに横たわって意味もなく、天井を眺めた。頭の中の何かがプツッと切れた。気づいたら側に母がいて、私はすべてを打ち明けた。瞬きもせずに私の話を聞く大きな瞳に泣きじゃくる私の姿が映っていた。
「今まで辛かったね。あんたはすぐに一人で抱え込む癖があるから、誰にも相談できなかったんでしょ。今、お母さんに言った気持ちをほんの少しでもいいから相手の子に伝えてごらん。何も変わらなかったら、また、お母さんのところに戻ってきなさい。」
夕飯に出されたお味噌汁を一口すすると、心の中に溜まっていた何かがふっと抜けていった。久しぶりに感じたこの暖かさ。でも、どうやって伝えたらいいの。直接、言える勇気なんて私にはない。だったら、どんな形であれ、自分の気持ちを伝えなきゃ。だって、私には帰って来られる場所があるんだから。

その夜、私はスマホを握りしめた。LINE を開き、ずいぶんと更新されていない画面を見つめ、自分の思いをしたためた。何度も何度も文字を打ち直した。私が悪いのなら何がいけなかったのかを教えてほしいということ。陰で言われるのはとても辛いということ・・。送信ボタンを押す手が震え、どれだけの時間が経っただろう。これがきっかけで何かが変わるというんだろうか。

翌朝、既読のサインは付いたが、返信はなかった。学校についてもいつもと変わらない景色がそこにあった。「ごめん。」背中越しに聞こえた言葉。それは突然だった。伝わったんだ。少しずつ、私の世界に色が戻ってきた。「何か、気に入らないことがあったら、教えてね。」途切れ途切れの私の言葉。

スティーブ・ジョブズ氏は「想いを形にして、想いを言葉にして、想いを伝達する。いくら素晴らしいものを作っても伝えなければないのと同じ。」と語る。SNS は諸刃の剣。時に人を傷つけるが、人を救うことだってある。世の中は情報化社会だ。これから先も、私たちは情報の渦の中で生き抜くことになる。何を学び、どんな力を身につけなければならないか。今、文科省が勧める「GIGA スクール構想」この目的は、一人一台のコンピューターと、一人一人の個性に合わせた学習の実現だと言われている。多くの情報を活用する力が私たちに求められているのだ。だが、その基盤にあるものは何だろう。どれだけ、情報化の波が押しよせようとも、人間が人間としてあるためには、想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることではないか。そして、人と人とがつながることで、新しい時代を築けるのではないか。帰宅した私を母が笑顔で迎えた。
「何か食べたいものある。」
私は迷わず答えた。
「お味噌汁。飲みたい。」

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

現在、いじめを受けて苦しんでいる人に届けたいです。SNS は正しい使い方をすれば、様々な問題を解決することができます。どれだけ情報化の波が押し寄せようとも、大切なことは想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることだと思います。人と人がつながることで、新しい時代を築くことができます。私の主張を通してはじめの一歩を踏み出す勇気を与えることができたら嬉しいです。

文部科学大臣賞受賞

# 静から動へ

栃木県　大田原市立金田北中学校　３年
**荒井　千恵理**

緩急のあるなめらかな運筆。白い紙の上に伸び伸びと広がっていく墨の色。
「私もやってみたい！」

私が書道と出会ったのは、三歳の時でした。その日から十一年、私は祖母の教場で一生徒として書を学んできました。百枚以上書いても納得いかず、先生である祖母と意見が合わず、泣きながら次の紙を下敷きにのせたこと。数えきれない失敗と挫折を繰り返して、一つの作品が仕上がったときの達成感。それらの経験は今、私の自信であり、誇りでもあります。

中学生になって、新しいことにチャレンジしようと思った私は、剣道部に入りました。剣道には、長年続けてきた書道と通じるものがあると感じたからです。剣道場の張り詰めた空気。面の中で反響する自分の呼吸と、心臓の鼓動の音。そして、静から動への瞬間的な移動。迷いや恐れを断ち切り、今と決めて踏み出す一歩は、半紙に筆の穂先を落とす瞬間に似ています。どちらも強く、しなやかな心が大切です。そして、剣道との出会いによっても、私はまた一つ成長することができたと思っています。

それまでの私は、自分が思う正解にこだわり、自分が思う美しさや理想から外れたものを受け入れられないところがありました。それは自分が信じ、身につけたやり方こそが真に正しいものであってほしいという願いでもありました。しかし、剣道で、他の流派の先生から教えを受け、様々な個性を持つ選手と大会などで交流するうちに、それぞれの正しさや美しさがあるのだと思うようになったのです。そして、かたくなだった私の心は徐々に変化していきました。
思い返せば書道でも、あきらかに自分とは異なる筆づかいの作品が高い評価を受けていることに、納得がいかないと感じることがありました。自分の今までのやり方が絶対的なものであるという思い込みを捨てること。そういうしなやかさを手に入れることで、私の書道と剣道は、さらに豊かになっていくのだと気がついたのです。

中学校最後の大会に向けて、いよいよ本腰を入れようとしていたときです。全国的な新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、学校は休校になりました。部活動の大会は、春季・総体ともに中止。体育祭も中止となり、修学旅行は日帰りとなりました。休校中は家から出ることすら気が引けて、当たり前と思っていたことが次々と崩れていく日々を、現実感を持てないままに過ごしていました。

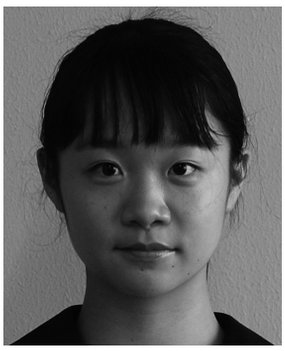
六月になって自粛が解除され、もとの生活が帰ってきたかのように思われたのは束の間で、私たちは今、感染症の第二波のさなかにいます。でも、休校や休業にするのではなく、三密を避けながらの暮らしを送っています。経済が破綻しないように、全面自粛ではなく、それぞれの判断で行動する。言うのは簡単ですが、非常に難しいことです。

私は、今のこの時を、静と動の「静」の時間として過ごすべきだと考えます。それは、ただ静かに禍をやり過ごす時間ではありません。書道でも剣道でも、「静」の時間に、己を見つめます。そして相手を見つめます。そこから、自分にできる最善の手を考え、動き出す準備をするのです。今この状況で、急いでもとの暮らしに戻すことを目標にするのが最善とは思えません。誰も経験したことがない出来事が起きているのですから、国や政治家の提案がうまくいかないことをただ責めるのではなく、失敗や間違いから学んでいかなければなりません。誰かがどうにかしてくれるのを静かに待つだけでなく、持続可能な新しい暮らし方を、私たちも考えなくてはならないのです。学校での過ごし方、家に帰ってからの習慣、それを考え、選び、実際に行動するのは私たち自身だからです。

私は将来、書道の指導者になりたいと考えています。生徒の背中から手に手を添えて、運筆を教えるようなやり方は、これからはもうできないのかもしれません。でも伝えたいことは変わりありません。どこまでも広く自由で、だからこそ厳しく美しい書の道を、どう伝えていくか。やり方は一つではないのです。自分にできることを、自分らしく、考えて実践していきます。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

私は、新型コロナ感染症が流行してから、様々な動きが止まっていた自粛期間の「ただ静かに過ごす」暮らし方に、「本当にこれでいいのだろうか」という疑問をずっともっていました。そして、このことを、私が続けてきた書道と剣道から学んだ「静と動」という考え方に重ねて考えられるのではないかと思いました。与えられるものをただ受け入れるのではなく、自分の考えをもって行動していくことが、今も、これからも大切なのだと伝えたいと考え、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

# 目には見えないもの

愛知県　豊田市立末野原中学校　3年

**戸塚　優羽**

「吃音症」というものを、どれくらいの人が知っているでしょうか。

吃音症とは、言葉がつまったり、なめらかに話せなかったりする発達障害です。わたしは、その吃音症。私が、その言葉を知ったのは小学校六年生のときでした。

六年生の学芸会、人前に出ることが好きな私は、やりたいと思っていた台詞の多い役になりました。頭の中で何度も台詞を繰り返し、イメージもばっちりで練習を迎えました。しかし、ある特定の言葉を発しようとすると、なぜかつっかえてしまい、うまく話せないことに気づきました。「あなた」「永遠」といった言葉の始めにア行がくる言葉が発音しづらいのです。頭では「言え！」と言う信号を出していても、言葉がのどを通らない。つっかえる度に、周りからは白い目で見られる。「言え！」と必死になればなるほど、言葉が出なくなる悪循環。そんな私に、クラスの男子は「記憶喪失」とからかってきました。違うのに。台詞はちゃんと覚えているのに。あなた達よりずっと練習してるのに！そう言いたくても、「あなた」の「あ」の字が邪魔して上手く言えない。悔しさ、情けなさ、そして、学芸会を台無しにしてしまうのではないかという不安でいっぱいになり、家で泣いていました。

そんな私を見て、母が子ども発達センターに連れて行ってくれました。そこで診断された名前が吃音症。聞き慣れない言葉に、より不安が大きくなりました。言語聴覚士の先生が、「吃音も個性」。そう言いました。でもその言葉はそのときの私にはあまり響きませんでした。そんな私の悩みを、先生は根気よく聞いてくれました。少しずつではありますが、吃音に対する不安、辛さが消えていきました。「なんだ、私。このままでもいいんだ。」と思えました。吃音の不安を取り除く説明をしてくれたことはもちろんですが、なにより、私の悩みを根気よく聞いてくれる。そんなことで、こんなに心は軽くなる。この体験で、誰かが悩みを聞いてくれることの大切さを知りました。

学芸会本番、相変わらず私のア行はうまく発音できませんでした。感動的な見せ場のシーンでも、何度もつっかえてしまいました。悔しかった。だけど終わった後に、周りの人から「つまっていても、一生懸命に言っている姿が良かった。」と言ってもらえました。このとき、初めて先生が言った「吃音も個性」の意味がわかった気がしました。

今でも私の吃音症は相変わらずです。ア行の発音は苦手だし、ふとした言葉でもつまってしまう。国語で音読が当たると少し緊張します。しかし、そんな私は今、生徒会長という立場になりました。生徒会長あいさつなどの人前で話す機会も増えました。でも、不思議と不安はありません。いつでも相談できる人が、私の周りにはたくさんいます。何より、「吃音症で上手く話せない生徒会長でもいいじゃない。吃音は個性なんだから。」と、背中を押す私がいます。

吃音症に限らず、人が抱えている悩みは目に見えないのかもしれません。もしかしたら、笑っている様に見えた誰かの心は、辛く、不安でいっぱいなのかもしれません。どんな小さいことでも良い。友達の様子がいつもと違ったら「大丈夫？」と声をかける。そんな些細なことが、相手にしたら大きな支えになるのかもしれない。

悩みは目には見えない。そして、それを支える手も、もしかしたら目には見えないものなのかもしれない。だけど、目には見えなくとも、悩みも支えも、そこにはある。目には見えないものだからこそ、それに気がつける自分でありたい。今まで私を支えてくれた感謝を胸に、吃音症である自分を誇れるように。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

吃音症を知っているか。と尋ね、「はい」と言える人は、まだまだ少ないと思います。なので、特に吃音症を知らない人に届けたいです。話す、ということを上手くできない吃音症は、話すことを当たり前にできる人からしたら、理解が難しいものだと思います。私の経験、思いを聞いて、少しでも多くの人が吃音症への理解を深められたら、とても嬉しく思います。また、自身が吃音症という人にも、ぜひ聞いてほしいです。吃音症の人の中には、「上手く話せないから」「からかわれるから」とふさぎ込んでしまっている人もいるかもしれません。そんな人に、「吃音はかっこわるくなんかないよ。」と勇気を与える作文でありたいです。

審査委員会委員長賞受賞

# 人生のかけがえのない財産について

静岡県　浜松市立北浜中学校　3年

**村松　グルン　良智美**

「もう少し肩の力を抜いていいんだよ。」

ヒマラヤ山脈からこぼれ出る朝日が私に語りかけました。

中3目前の春、家族そろって父の国、ネパールに行くことになりました。しかし、行って何になるのか。正直気が進みませんでした。その頃、私は部活の先生との意見のくい違い、人間関係、将来についてなど様々な悩みを持っていました。何をやっても上手くいかない、人の悪い所ばかりが目につく。そんな自分をとても情けなく思っていたのです。しかし、そんな時母は私にこう言いました。

「リフレッシュも大事。ネパールでの旅は、らっちのかけがえのない財産になるはず。」

「かけがえのない財産」。その言葉は、私にとってとても特別な言葉に聞こえました。するとネパールに行ってみたい、と思うようになりました。

私の父の実家は、ヒマラヤ山脈の標高2000メートルのチャリス村というところにあります。首都カトマンズから車で1日、さらに歩いて2日かかります。途中で宿泊する寝床は石のように硬く、ネズミまで出ました。もちろん、テレビもスマホもゲームもありません。私は、改めて日本の快適さを実感しました。

長い時間山を登り続け、疲れ果てていた私達。村の人達はそんな私達を喜んでむかえてくれました。盛大なおもてなしはとても心温まるものでした。

村のみんなは、とてもおおらかで親切です。何をするにも「ビスタリ、ビスタリ。」（ゆっくり、ゆっくり。）と私に声をかけてくれます。日本で「早くしなさい。」と言われ続けた私にとって、それはとても新鮮なことでした。

村の子供達は、学校のあるとき以外は毎日朝から暗くなるまでバレーボールなどをして遊んでいます。私はそれに加わるのがとても好きになりました。そして、その光景を畑仕事を終えた大人達がいつも優しく見守ってくれていました。そんな毎日の中で、ああ、スマホやゲームがなくても楽しいことっていっぱいあるんだ、と思わずにはいられませんでした。遊び終わるといつも服は泥だらけ。ネパールに行く前の私だったら、

「泥だらけになって遊ぶなんて。」

と言うに違いありません。日本では、家に帰るとまず先にスマホをいじる生活だったからです。しかし、ネパールでの私は泥だらけになっても幸せを感じることができました。

村の人達はいつも一日の楽しみを見つけてきては、夕食でそれは楽しそうに話します。「ロバの赤ちゃんが生まれた。」「今年は豊作だ。」楽しい話は、みんなを笑顔にします。私は日本で夕食の時間、マイナスな話をすることが多くありました。しかし、そんな話をするほど自分の気持ちは落ちこんでいきます。村の人達は人の悪口などは口に出しません。楽しく、笑顔になる話ばかりします。私は幸せの秘けつはきっとそこにあると思います。

夜、ヒマラヤ山脈に広がる満天の星空。本当に来てよかった、と心から思いました。

お別れの日、私は村のおじさん達と握手をしました。ゴツゴツとしたかたい手。そこには心の豊かさと、優しさがあふれていました。みんな泣いてお別れを悲しんでくれ、私の心もギュッとしめつけられました。

ネパールの人達は日本の私達の暮らしと真反対の日々を送っています。しかし、ヒマラヤ山脈の壮大な景色と共に幸せに暮らしていました。

私はネパールに行く前まで、自分のことは棚に上げ、他人のことを否定してばかりいました。今思うと、そこには幸せという感情はなかったのではないかと思います。

広い視野を持って世界をながめること。きっとそこには色々な人生の生き方があるはずです。ネパールの山々が教えてくれました。小さな人間関係にとらわれ、負の感情にさいなまれていたこれまでの自分。しかし、世界には日本の便利な生活では計りきれない事がらがあふれています。

「知らないこと」を知ろうとする姿勢。それが人生のかけがえのない財産になるのだと私は思います。幸せの価値は人それぞれ。幸せの価値を決めるのは自分自身。私達には無限の可能性があります。

人生のかけがえのない財産。「ビスタリ、ビスタリ。」見つけていきます。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

この作品を通して自分の心と向きあっていきたいと思いました。小さな幸せ。すばらしいことに出会えることの喜び。一つ一つかみしめていきたいです。それがいつかかけがえのない財産につながると思います。広い視野をもって色々な物事を多方面からみること。知らないことを知ろうとすること。その大切さを父の故郷ネパールで学びました。「これが私の人生」といえる人生を築きたいです。

審査委員会委員長賞受賞

# 「らしさ」を輝かせる

島根県　松江市立宍道中学校　3年
**武田　はぐみ**

「それ、すごくかわいい。」

そう言って、うれしそうに母が見ているのは私の絵でした。私は自分の絵が好きではありませんでした。脳性麻痺という障がいのため、手足が動かしづらく、頭の中にきれいな完成図があっても、どうしても線がゆがんでしまうのです。学校の授業で絵を描く時も、上手く描ける気がしませんでした。真っ白なままの画用紙と、いつまでも見つめ合っていたのを覚えています。母が眺めている絵は、当時小学六年生だった私が中学校の部活動体験で描いたものでした。私は自分の絵を見て、「また、うまく描けなかったな。」と落ち込んでいました。ところが母は、その絵を見るなり、「すごくかわいい。」と言うのです。それ以上ないほどの笑顔でよく絵を見るのです。私は何だか恥ずかしくなりました。同時にこの絵のどこがいいのだろうと不思議に思いました。それから母は、

「はぐの絵、イベントに出してみない？」

と言うのです。母はものづくりの仕事をしていて、時々イベントに出店しています。そこで、母の作品の隣に私の絵を出してみないかというアイデアでした。私は、思いもよらない提案に驚きました。でも、とてもうれしかったです。その日から私は絵を描き始めました。しかし、どの絵にも自信はありませんでした。いつも、これでいいのだろうかと思ってしまうのです。よく分からない不安でいっぱいでした。そんな胸の内は明かさず、あのうれしそうな母の顔を見ることで、自信のなさをごまかしていたのです。

そして、イベント当日。個性あふれる作品が至る所に並んでいました。他の人の作品を見て、すごいなあと思うばかりの私。でも、気がつけば目の前に、私の絵を幸せそうに見てくれる人や、手に取ってくれる人がいたのです。私はその時、初めて気がつきました。絵を上手に描こうとする必要はない。自分らしく描けばいいんだということに。私はそれまで、絵は上手に描かなければいけないものだと思い込んでいました。でも、私のゆがんだ線や、いびつな形でできた絵にも魅力やよさがあると知りました。それなら、たとえうまく描けなくてもいい。私の描きたい絵を私らしく描こうと思ったのです。

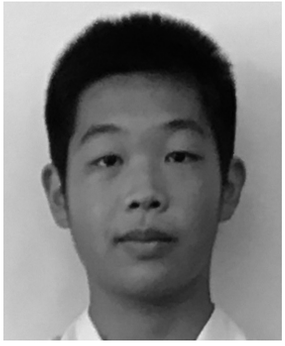
あれから三年、私は絵を描き続けています。それは、絵を描くことが心の底から楽しいと感じるようになったからです。自分のそのままの絵を好きになったからです。最近は、油絵の具を使って人の顔を描くことが多くなりました。楽しくて、私にしかないイメージを表現できる「絵」という世界にわくわくしています。私は、自分の絵が好きではありませんでした。でも、母やお客さんのお陰で、その絵の中に、「私らしさ」があると知りました。自分と誰かを比べて、下を向いているあなたに伝えたい。あなた自身の好きではないところにも、「あなたらしさ」があります。上手にできないと悔やまないで。その「上手にできない。」の中にあるあなたらしさに気づいてほしい。そこにまだ知らない素晴らしいあなたがいるかも知れません。

五月末、黒人男性が白人の警察官に首を絞められ亡くなるという痛ましい事件がありました。個性の尊重と言いながら、結局は優劣にとらわれがちな世の中はいつ変わるのでしょうか。外見や国籍など様々な違いを超えて認め合い、互いに尊重し合える社会を実現する。そのためには未来を担う私たちが変わるべきではないでしょうか。まずは自分で自分を認めることが大切だと思います。そうすれば、自然と周りの人のことも認められるようになると思うのです。

私はこれからも、私らしく生きていくために絵を描きます。自分を嫌いになっていく人生より、好きになっていく人生を紡いでいきたい。そこで見つけた「らしさ」を輝かすことができる人でありたいです。「らしさを輝かせる」これが今の、そしてこれからの私のテーマです。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

「うまくいかない。」そんなふうに感じている人に伝えたいです。私は、好きではなかったはずの自分の絵に、「私らしさ」があると気づいたとき、心がぱっと明るくなりました。そして、自信をもって絵を描けるようになりました。だから、少しずつでも「あなたらしさ」に目を向けてみてください。私は、たくさんの人の心が、ぱっと明るくなることを願っています。



審査委員会委員長賞受賞

# 你好（ニーハオ）ニッポン

熊本県　熊本市立出水南中学校　３年

**大田　直人**

一人の少年が、今持っているものをすべて手放して、遠い国で自分の可能性を探ることを決心しました。その少年は、僕です。

僕は中国人と日本人のハーフで十四年間北京で生活していました。日本語は、月に一度、日中ハーフ子ども交流会「ニッポン塾」で勉強しました。僕は、小さい頃から日本の高校か大学で学びたいと考えていました。そこで、教育制度の問題と将来のことを考え、中学三年生から日本の中学校に通うことになり、二年生の一月から体験入学が始まったのです。

日本へ向かう飛行機の中、僕は不安でいっぱいでした。「もうあと戻りはできない。何があっても乗り越えていくしかない。」そう自分に言い聞かせました。ところが、空港を出ると見えたのは、美しい道路や街並み。「なんてすがすがしいんだ！」僕は、澄んだ空気を思いっきり吸い込みました。

緊張しながら、二年一組での生活が始まりました。クラスメイトに話しかけてもらうととても嬉しいのですが、自分から話しかけることは難しく、ただ笑顔を返すことしかできません。早く日本語を上手に話せるようになりたい、そう思いました。

日本に来て驚いたことは、豊富な学習内容です。中国では、技術家庭科の授業はなかったので、初めての調理実習、メニューは、熊本の郷土料理「だご汁」。もし、北京だったら、「北京ダック」を作っていたのかなあ。そんなことを考えながら、だんごをこねました。初めての「だご汁」は、だしの香りがよく、とてもおいしかったです

体験入学が始まって、一か月目の期末テスト。僕にとっては、難しいテストです。教科書を何度も読み、僕の中にある日本のＤＮＡをすべて使って、解答欄をうめました。結果はともかく、自分のベストを尽くすことはできたと思います。中国では、テストの後、一人一人の順位が公開され、競争しながら勉強する環境が作られています。成績がトップの人には賞状が与えられ、みんなに勉強法を教えるのです。僕もそのおかげで競争心が強くなり、成績が上がりました。一方、日本はテストの成績だけではなく、いろいろな技能や体験も学べて、将来生きていくための学習なのだと感じています。

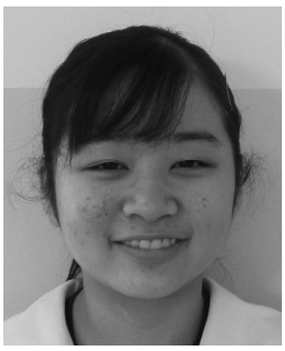
現在は、インターネットの普及で、世界中の人々とつながる時代です。僕は今でも、中国の友達と連絡を取り合い、週末は一緒にオンラインゲームを楽しんでいます。別れの日、涙を浮かべて送り出してくれた彼らとの日々を、僕は生涯忘れることはありません。自分を支えてくれ、強くしてくれる友達という存在を、日本でもたくさん増やしていきたいです。

僕は、小さい頃から日本のアニメが好きで、そこからも日本語を勉強していました。日本の文化は全世界に広がり、中国の友達にも、日本のアニメや映画、音楽が好きな人はたくさんいます。日本と中国は、古くから関わりがとても深く、遣隋使より昔から、多くの学者や僧侶が、医学や文学や仏教などを日本に伝えました。日本と中国は戦争をしてしまった時代もありましたが、今では、さまざまな分野で友好な関係を築いて、協力し合っています。

中国には、『吃得苦中苦（チュウドゥクジョンク）、方為人上人（ファンウェイレンシャンレン）』という古い言葉があります。人より苦労してこそ、人の上に立つことができるという意味です。僕の未来は、光が差す明るい道かもしれない。でこぼこで困難だらけの苦しい道かもしれない。でも、僕が一つだけ心に決めているのは、大好きな日本と中国、二つの国に役立てる人になりたいということです。この二つの国は、ときに微妙な関係になることもあります。でも、二つの国の良さを知っている僕だからこそできることを探し、僕だけの道を胸を張って進んでいきたいです。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

今年１月に１４年間過ごしてきた中国から日本に来て、学校や日々の生活の中でいろいろなことを学びました。そして、日本と中国の文化の違いや教育の違い、それぞれの良さを知ることができました。将来、大好きな２つの国のために何ができるのか、今の自分の素直な気持ちを書いてみたいと思いました。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# 私たちにできること

福島県　二本松市立安達中学校　3年
**菊地　瑠奈**

私は、三歳の時から消化器官出血という原因不明の病気と闘っています。何度経験しても、初めて行う検査は不安でいっぱいになります。そんなとき、優しく声をかけてくれるのが看護師さんです。「辛いよね」と共感してくれたり、「大丈夫、一緒にがんばろう」と検査のときにずっと声をかけ続けてくれたりと、私に力を与えてくれる存在です。

そんな医療現場が今、新型コロナウイルスによって苦しめられています。今もなお猛威は衰えず、対応に追われている医療従事者が偏見や差別に辛い思いをしているというのです。病院に勤務しているだけで、感染しているような扱いを受けているというニュースを見る度に、私は胸が締めつけられる思いがします。未知のウイルスに不安と恐怖でいっぱいになりながらも、頑張る先生や看護師さんの姿が目に浮かぶからです。

そんな中、先日定期的な検査をするために病院に行く機会がありました。短い入院でしたが、私にはコロナ感染の心配がつきまとっていました。しかし、先生や看護師さんがいつもと変わらない笑顔で何度も「大丈夫、一緒に頑張ろうね」と励ましてくれるのです。先生や看護師の方も自分が感染するかも知れないという不安な気持ちと戦いながらも、私たち患者に寄り添い接してくれる姿を目の当たりにして、私はぐっと胸に迫るものがありました。そして、私もみんなの役に立ちたいという気持ちがわき上がってきたのです。

それから数日経った時のことです。生徒会の先生から「学校を元気にしてみない？」と投げかけがあったのです。学校が再開したものの、常に三密回避、授業を進めるための七時間授業。班活動もなく、部活動も時間短縮と、いつしか私たちの学校生活はこなしていくだけのものになっていました。私たち生徒会はすぐに「学校を笑顔にしよう」という目標を立て、キャッチコピーを全校生徒から募りました。「みんな熱中！笑顔で夢中！そんな達中！」校舎内に大きく張り出したキャッチコピーに学校中が元気づくのが分かりました。次は、マスコットキャラクターの制作です。全校生が考えたたくさんの笑顔あふれるイラストの中から、二本松市の鳥「うぐいす」に二本松少年隊の衣装を着せた「あだっちゃん」が誕生しました。「あだっちゃん」のプロフィールを考え、昼の放送では「あだっちゃん」に声を吹き込みコメントを発表すると、前を向いて黙って食べている給食の時間、校舎中に笑い声が響いたのです。やってよかったと思えた瞬間でした。また、来校された方が「あだっちゃん」を見て、

「よく作ったね。元気が出たよ、がんばってね。」

と言ってくれた言葉は、私の心にうれしく響きました。

今世の中は、大変な状況に置かれています。これは、決して他人事ではありません。私は今、こんなときだからこそ、自分事として物事を考え、行動できることが大切なのだと実感しています。私はまだ中学生で大人から見れば頼りない存在ですが、中学生の私だからこそできることを考えて、友達と協力して行動できる自分を誇らしく感じています。私たちの行動が笑顔をつなぎ、友達や地域のみんなの心を元気にしていくと信じて、これからも自分から活動していきたいと思います。そして、いつか「大丈夫、一緒に頑張ろう」と患者に寄り添うお医者さんになる夢を叶え、社会に役立つ人材になりたいと思っています。

今生徒会では、安達中の元気を地域におすそ分けしようと企画を立てています。その中には、もちろん医療従事者の皆さんも含まれています。私たち中学生が「笑顔」を届けることで、みなさんの心が元気になるようにと願っています。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

今年は新型コロナウイルスの影響で、当たり前だった生活を送れない日々が続いています。そして、ウイルスと最前線で戦う医療従事者の皆さんが偏見や差別に辛い思いをしている現実もあります。世の中や学校が暗い雰囲気に包まれている中、私たち安達中生徒会では、自分たちから学校を元気にしようと積極的に活動しています。みんなが笑顔になっていく様子を目の当たりにしたからこそ、私たち中学生にもできることがあるということを皆さんに伝えたいと考え、この作品を書きました。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# 被災の地で

長野県　長野市立東部中学校　3 年

**向　彩音**

昨年十月十二日夜、台風十九号は私たちの住む地域に大きな被害をもたらしました。特に千曲川沿いでは、一夜で風景が全く変わってしまいました。

堤防が決壊！北陸新幹線の車両基地が水につかっている！

家が、店が、畑が、学校が水没して道路も通れない！

小さい頃から「長野は山に囲まれているから台風が直撃しにくい」と聞いていた私は、次々とテレビに映し出される信じられない被害の映像に驚くばかりでした。

一週間ほどして母は「自分にも何かできないか」と千曲川沿いへ復興のボランティアに出かけていきました。「自分には関係ないからと目を背けるのではなく、誰もが同じ目に遭う可能性があるのだから…」とも言いました。それからの母は週に三回ほど、午後は被災地へ出かけていって、家具の運び出しや泥のかき出し作業等をしました。

家に帰ってくると疲れている母の様子を見て、私も困っている人たちのために何かしてあげたいという気持ちから、ボランティアに参加しようと昨年十二月、初めて被災地を訪れました。この日は父と一緒でした。

変わり果てた場所で、私は押し寄せた土砂が固まってしまったのを畑から引き離す作業をしました。やっていると関節が痛くなり、冬なのに上着を脱ぎたくなるような力仕事でした。帰宅した私に母が聞きました。「時間の大切さがわかった？」と。私は、農園の方から「ありがとう」と言われ、こんな私でも人の役に立っているんだという満足感が大きく、その言葉をその時はさして気に留めませんでした。さらに数ヶ月が経って、学校が臨時休校になった五月にも、今度は母と被災地を訪れました。だいぶ復興が進んだ周りの景色に驚きながら、川の氾濫などでりんご農園に流れてきた石拾いをし、被災地の子どもたちと遊びました。学校も公園も被災して遊ぶ場所がなく、大人たちは総出で復旧作業に追われていたためです。

この日、一緒にボランティア活動を行った方々の姿を見ていて、私は思い出しました。
「時間の大切さがわかった？」というかつての母の言葉です。その時、私は気づきました。母の問いに対する答えではありません。ボランティア活動をすることの、私なりの意味についてです。今までの私は大きな思い違いをしていたのではないか、そう気づいたのです。

私たちは被災地で、困っている人たちが、長い時間をかけて元の生活に戻していく作業のお手伝いをしました。確かにそれは被災地の方々の費やす時間を助けることでした。でも同時に、私にとっては自分の時間を人のために役立てられるというかけがえのない過ごし方ができました。大切な体験ができました。だとしたらボランティアとはいったい誰のためになる活動、誰のためにやる時間の費やし方なのでしょう？

今なら私は胸を張って言えます。ボランティア活動は、困っている人たちを助けることとともに、自分自身の心を、自分の人生を豊かにすることができるものだと。それに気づかせてくれたのが母の一言でした。だから私は、これからこんなことを心に置いて取り組んでいこうと思います。

被災された方々を「助けてあげよう」ではなく、「一緒にやっていきましょう」と。

被災された方々に向き合うのではなく、被災された方々とともに同じ方を向いて進んでいこうと…。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

台風 19 号災害で被害を受けた長野市内の被災地へ復興ボランティアに行きました。
二度のボランティア活動を通して私は、「時間の大切さ」というものについて深く考えることができました。今では当たり前になりつつある便利な世の中に感謝しながら、これからもボランティア活動に参加して被災された方々と前進していきたいです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# 希望の架け橋を架けよう

岐阜県　土岐市立土岐津中学校　３年

**桑原　萌夏**

私には大好きな仲間がいます。タピオカを飲んだり、ランチに行ったり。春はみんなでお花見にいくのが毎年恒例です。ただ、このグループはみなさんが想像するであろうものとは少し異なります。なぜなら、仲間の平均年齢は七十五歳。昭和の可憐な名前が飛びかう素敵な集まりなのです。私の両親は共働きで小さい頃から私の遊び場は祖母のやっていた編み物教室。これは、そこでできた仲間です。そんな私達の最近の話題は「介護」。みんな介護をうまくしているようですが、テレビでは老老介護のストレスによる虐待や一家心中といったニュースをよく聞きます。私はみんなの話と世の中の介護に大きなギャップを感じました。そして、介護とは決して単純なものではないことに気付かされたのです。

そもそもなぜ、老老介護という問題が起きるようになったのでしょうか。その根本的な原因は時代と共に家族のサイクルが変化してきたことにあると思います。これまでは、私が誰かの家へ嫁いだ場合、私は姑をみますが、私も年をとれば嫁にみてもらえたはずです。しかし今では、子供は同居を避け、共働きの家庭が増えたため、いざ介護が必要となった時、若い世代が家にいません。そのため、年老いた夫婦のどちらかがもう一方をみる老老介護という問題が発生したのです。

私の祖母は、今までに５人もの身内を介護し、みとってきましたが、当時のことを聞くと、「大変だった事」は思いつかないと言います。しかし一つだけ、祖母には今でも忘れられない事があります。

「もぅー、かまったらかんて。」

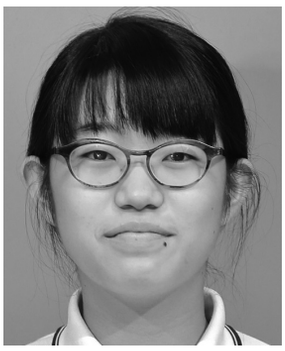
それは排せつに失敗した祖母の母親を祖母が怒ってしまった時のことです。祖母をただただじっと見つめる寂しそうな瞳。その瞳を見て、これまで育ててくれた母親になんてひどいことをしたんだろうと深く後悔したといいます。私なら、いつも笑顔で接し、全力を尽くしていた中でのたった一度の失敗など気にすることないのではないかと思ってしまいます。しかし、介護の思い出は、大変だった事でも、自分は頑張ったという自信でもない。たった一回、されど消えることのない後悔なのです。介護を上手くしていた祖母にさえ後悔があるのに、なかなか上手くできずに悩んでいる人は、どんなに辛いことでしょう。介護には体力的な辛さよりも、自分で自分を責めてしまう辛さがあると思います。

避けては通れない介護の世界。数では支えきれない私達ですが、希望をもたらすとすれば、ＡＩそしてＩＴ技術を大いに活用することであると私は考えます。例えば、認知症の人に音声アシスタントをプレゼントしたところ、何度同じ事を聞いても怒らずに答え続けてくれるので症状が落ち着いたといいます。他にも、写真加工アプリは、私と祖母のマイブームです。祖母は年をとって写真が嫌いになったと言っていましたが、アプリでかわいく写った自分を見て、最近では「写真とって」と嬉しそうに頼んできます。写真がなくても生きていけますが、自分を認められる楽しみがあるのは大事な事なのです。ＡＩやＩＴ技術は介護する人、される人両方の人生を必ず豊かにしてくれます。

私達孫世代は、生まれた時から機械と共に生活してきました。少し調べればどんな介護ロボットがあるかすぐに見つけることができます。しかし、お年寄りにはそもそもそういった技術を知らない人もたくさんいます。中には、機械に頼ることはサボることだと考えている人もいます。そんな時に時代の最先端とお年寄りをつなぐ架け橋となれるのが、私達世代です。様々な技術をつなぎ、肉体的負担の軽減だけでなく、何より、心の余裕をつくらせてあげる義務があります。これから、時代と共に介護の在り方も進歩させていくために、新しい介護協力のカタチを作っていきたい。大丈夫。私達ならきっと素敵な架け橋になれる。ＡＩと共に。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

一番は私の同世代の人達です。これからの私達の役割を知ってほしいです。そして介護と向き合い、今日も頑張っているお年寄りです。この主張を聞いて、AI はよく分からない怖いものではなく、共に戦ってくれる心強い味方になるということに気づいてほしいです。この主張が最初の架け橋となってほしいと思います。最後に AI や IT 技術をつくり出している技術者の方々です。AI が " 脅威 " といわれるのか " 共存 " していけるのかの分かれ道は技術者の方々だけでなく、私達受け取る側にもかかっています。この主張ですばらしい技術をつくる人々にエールを送りたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# UNCOUNTABLE

大阪府　泉大津市立誠風中学校　３年

**八木　佑理**

0 人、118 人、1,343 人、5,109 人。全世界の新型コロナウイルス感染症による一日の死亡者数は、1 月 21 日の 0 人から、月を追うごとに増えていきました。6 月には、全世界の感染者の総数は 800 万人に迫り、死者は累計で 40 万人を超えました。日本でも死者は 900 人を超えています。

医療の現場では、患者さん一人ひとりに向きあい、懸命な治療がなされています。しかし、その先で、感染者や死者の数が報告され、集約され、報道される時、人は数で表されていきます。

もちろん、感染症の広がりを把握し、周知させることは大切です。数字で表されたデータは、このウイルスの脅威の重大さを教えてくれるからです。

けれども、私は連日の報道に、恐ろしい数字にも、慣れてしまいました。著名人は一人と認識されますが、国内外の知らない人は、その数に埋もれてしまったかのようでした。時には、死者数が一桁だと、少なく感じてしまうことさえありました。

5 月 24 日。「ＮＹタイムズ」の朝刊を紹介する記事に驚きました。一面全面をびっしり埋め尽くした活字。その内容は、新型コロナウイルス感染症による死者の一部、1,000 人の氏名と人物紹介でした。「ベーコンとハッシュドポテトが好きだった」「教会の合唱団で 42 年歌った」などとひと言ずつ表現されていました。

連日、10 人、100 人、10 万人、と世界中の死者の人数が報告されていますが、数字に「人」という単位がついた時、それは単なる数字ではなくなります。その数字の表す一人ひとりに人生がありました。私と同じように、顔があり、声があり、朝起きて夜眠り、確かに生きていた人たちです。私は、世界中でたくさんの「人（ひと）」を、「命」を、失ったのだとはじめて気づかされました。

人を数字で表すことが、人を傷つけることもあります。

私の従兄の一人は、6 歳の時に病気で亡くなりました。伯母の心の中では、6 年間の思い出が、20 年以上経った今も、鮮やかによみがえるそうです。そんな苦労を思わせない明るい伯母ですが、何かの折に、「子どもは何人？」と聞かれることは今でも辛いと言います。「男の子二人です。」「男の子が一人います。」伯母にとって、どう答えようと、子どもの数を数えるということは、心の傷に触れることなのです。

また、4 年前に、障がい者施設で利用者が襲われ、45 人もの死傷者が出た痛ましい事件がありました。報道や裁判では被害者の方々の実名が伏せられていましたが、後に二人の方は遺族により名前が公表されました。一人は美帆さんといいます。記事には、「ちゃんと美帆という名前がある」「自慢の娘でした」「一生懸命生きてきた証を残したい」というお母さんの言葉がありました。記号や数字で表せば、美帆さんの命が埋もれてなくなってしまうかのようでした。

人数というのは数字で表せますが、人そのものは、人生は、命は、数では表せません。数えることはできません。その数えられないものを、私は大切にしたいと思います。

将来私は、医療や健康に関係する職業につき、何千人、何万人という人に関わり、貢献したいと思っています。時にはノルマに追われたり、数で成果を出すことに苦しむこともあるかもしれません。それでも、まず目の前の一人、名前も人生も抱えているその誰か一人を、大切にしたいです。そして、数えることのできない「命」というものに、真摯に向きあう生き方をします。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

5 月 24 日、NY タイムズ。一面全面を埋め尽くした、新型コロナウイルス感染症による死者 ( の一部）1000 人の名前と人物紹介…。それを読んだ時、考えました。私は、私たちは、その数字が表すものを本当にわかっているのでしょうか。わかっているつもりになっているだけではないでしょうか。連日この感染症に関する様々な数字が報道され続ける今だからこそ、私たちはその数字が表しているものが何なのかを改めて考える必要があると思うのです。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# 母のお弁当

鳥取県　鳥取市立桜ケ丘中学校　3年

**谷口　真緒**

　私は母のお弁当が楽しみです。母が仕事でいないときは、亡くなった祖母が作ってくれていました。母と祖母のお弁当にはたまごやきが入っていません。なぜなら私は食物アレルギーを持っているからです。アレルゲンは、そう、卵です。
　幼い頃から卵を使った料理が食卓に並ばないのが当たり前の日々を送っていた私にとって、食べられないものがあるということは、苦痛ではありませんでした。むしろ、幼稚園の頃は友達から、
「真緒ちゃんは食べられないものがあるのに、元気ですごいね。」
と言われたり、卵を使わない料理を考える母や祖母の姿から温かい愛を感じたりして、幸せな日々を送っていました。ですが、小学校に入り、頭を抱える日々が始まりました。
　きっかけは、給食時間にたまごやきが私の皿に置かれなかったことです。それを見ていた男子が
「谷口さん、たまごやき食べれんだか。」
と不思議そうにきいてきました。
「うん。そうなんよ。」
と躊躇うことなく答えると、
「なんか、かわいそう。」
顔を歪ませながらその男子は言いました。
　「かわいそう」という言葉は、アレルギーを持っていることも自分のアイデンティティだと思っていた私に、強い衝撃を与えました。自分自身がそう思っていなくても、他人から見た私は、「みじめな子」なのかと思い、その日から給食の卵料理の代わりに持ってくる弁当を、人前で食べることが恥ずかしくなりました。母や祖母が一生懸命作ってくれた弁当を恥ずかしく思いながら食べることは、とてもとても辛いことでした。それからは
「谷口さん、卵が嫌いなだけで、本当は食べられるんだろ。ちゃんと食べろよ。」
など、男子たちの幼稚な言動の度に、焦燥感と悲しみで胸がはりさけそうになりました。
　食物アレルギーの持ち主がアレルゲンを食べた場合の症状に、アナフィラキシーショックというものがあります。最悪の場合、生命に危険をおよぼすものです。私にとって、男子たちの軽はずみな言動は、「死ね」と言われているのと同じようなものでした。
　そんな中で、ある出来事がありました。班の中で私が卵アレルギーだと伝えたとき、
「ケーキも食べれんの。」
と聞かれたのです。久しぶりの質問に、何と言われるか少し不安がありましたが、
「うん。食べれんよ。自分で作ったものは食べれるけどね。」
と正直に言いました。すると
「えっ、自分で作ったりするん。めっちゃすごいな。」
聞こえたのは「すごい」という肯定的な言葉でした。
「お母さんと一緒につくるんよ。」
言いながら、目の前が明るくなったように思いました。
　クリスマスが近づく小学六年生のある日、クリスマスケーキが給食に出ました。今年もみんながおいしそうに食べるのを見るだけなのかと、一人落ち込んでいる中で、仕事で忙しい母が、私の大好きなチーズケーキを作ってくれました。それがとてもうれしくて、給食時間を楽しみにしながら学校に行きました。おかずを食べ終えて、ケーキが入っているお弁当箱のふたを開ける瞬間が来ました。金色のチーズケーキは濃厚で甘くてとてもおいしくて、食べている最中はほほがゆるみっぱなしでした。そんな幸せそうな顔でケーキを食べている私を見て、通りすがりの女の子が
「えっ、何それ、めっちゃおいしそう。」
と声を弾ませながら言いました。そしてその言葉をきっかけに
「クオリティやばくない。」「いいなー。」「お母さん頑張って作ったんだね。」などの言葉が飛び交い、大好きなものが食べられるだけですごくうれしいのに、クラスのみんなからの温かい言葉が重なり、母のチーズケーキの味と混ざり合い、かみしめる度に私は満ち足りた気持ちになりました。
　中学生になった今では、私に渡すお菓子に卵が入っていないか気遣ってくれる友達や、毎日おいしいご飯を作ってくれる母に感謝する日々です。
　私はクラスのみんなの「すごいね」という言葉に救われました。そのきっかけを作ってくれたのは母の料理でした。手作りの料理には、完成するまでに手間がかかります。その手間には、食べる人への思いやりが込められています。私は母の思いやりに救われたのです。
　私は母のお弁当が楽しみです。母のお弁当にはたまごやきが入っていません。入っているのは母の思いやりです。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

　修学旅行に向けて、母が「アレルギー対応食品に変更」という項目にサインをするとき、「みんなと一緒じゃなくてごめんね」と申し訳なさそうに言ったことです。その表情を見て、「私は毎日楽しいよ」「毎日おいしいご飯食べれて幸せだよ」「ありがとう」という思いがこみあげてきて、恥ずかしくて真正面からは言いにくいけど、他の方法でこの思いを形にしたいと思い書きました。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

# 「考える」

宮城県　仙台市立上杉山中学校　３年
**荻原　花埜音**

なにげなく、テレビをつける。すると、貧困に関しての二ュースが流れてきました。中東の紛争の二ュースで痛々しい幼い子供の写真。「可哀想。」私の感想はたった三文字。何か行動を起こそうという気にはなりませんでした。私は心のどこかで「関係ない。」と思っていました。だって、私まだ中学生。経済力もない、働けない、未成年。何ができるの。そう、思っていました。

ところが、ある日、スマホで動画を視聴していると、広告が流れました。その広告は国境なき医師団のものでした。いつもならすぐ飛ばす広告。しかし、その広告に私の目は釘付けになっていました。その広告は国境なき医師団の紹介だけでなく、老若男女を集め、直観でテストに答えてもらうというものでした。例えば、問題は「世界で一番新しい国はどんな国になると思いますか。」です。みなさんはどんな国になると思いますか。その答えは、「たくさんの命が消える国」でした。なぜならその国は南スーダンであり、二〇一三年から内線に突入し多くの人が亡くなっているからです。予想外な答え。自分の無知さ。全てに驚きました。これは、みんなにも知ってほしい。そう、強く思った私は日直の仕事である一分間スピーチで国境なき医師団や貧困について広告と同じ様に伝えようと決めました。

スピーチの下準備をする為、まず国境なき医師団を調べると、驚きの連続でした。まず、百パーセント民間の団体である事。そして、医師という職業なのに月収十六万円という事。さらに一人の医師につき一日、何百人という患者の対応をしなくてはならない事。貧困の人々を手助けする側も大変である事を知り、「私って今まで見て見ぬふりをしていたんだ。」
と気づかされました。そうした私の思いを母に伝えると自分の言葉でしっかりと伝えなさいと励まされ、その日は緊張と共に寝床につきました。

そしていよいよスピーチ。皆、真剣な表情で私の話を聞いてくれました。動画の広告と同じ様に友人にテストし、答え合わせをスピーチ内で行うときょとんとした顔で私と同じ様に驚いていました。その後、友人がスピーチ良かったよと言ってくれ、「ああ、きちんと伝わったんだ。」と安心しました。

それから私は貧困の二ュースをチェックしたり、募金をしたり、発展途上国で作られた商品を公正に正しく取り引きする、フェアトレード商品を購入したり、同じ地球上に暮らす人々について、よく「考える」ようになりました。

清潔できれいな飲み水がある豊かな日本の中学生である私たちができること。それは、一人一人が、事実を知って「考える」ことです。考えるということは、相手を気にかけることであり、気にかけるという行為は、互いに支え合える大きな力になります。一人一人の思いが行動となり、思いやりの輪が世界中に広がっていくはずです。

みんな、同じ地球の仲間です。私には関係ない、ではないのです。教室から数歩、歩いて飲めるきれいな水道水が、どこを探しても無く、生きのびるために濁りきった水を飲む子供がたくさんいるのです。私達ならあのテストの答えをきっと変えられる。一万二千二十九キロ先にいる仲間のために、私は今日も考えます。世界の平和と笑顔のために考えます。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

国際化が進む世界の中で、より広く、より大きく、柔軟な発想で誰かの力になれる様な人生を作り上げていきたいです。視野を広く持って国籍、人種に関係なく多くの人々の力になりたいです。この世界には、富や名声よりも「優しさ」が必要不可欠だと思います。優しさを常に持ち、その優しさが広がるように自分でできる最大限のことをしていきたいと思います。そんな「優しさ」広がる人生を歩んでいきたいです。

## 少年の主張全国大会努力賞受賞作品

**【北海道・東北ブロック】**

青森県　今別町立今別中学校　３年
横岡　奈子　『私の幸せ』

岩手県　盛岡市立下橋中学校　３年
鈴木　凜　『生き続ける』

秋田県　仙北市立神代中学校　３年
尾樽部　こころ　『人は支えられることで強くなれる』

**【関東・甲信越静ブロック】**

茨城県　筑西市立明野中学校　２年
古槝　和未知　『世界平和への第一歩』

埼玉県　八潮市立潮止中学校　３年
水谷　卓郎　『差別という言葉をなくすために』

千葉県　千葉市立幕張本郷中学校　３年
杉久保　栞那　『父の娘として』

東京都　葛飾区立青戸中学校　１年
松本　直汰郎　『普通とは何か』

神奈川県　横浜市立生麦中学校　１年
佐伯　凛　『ともだちのかたち』

新潟県　新潟県立燕中等教育学校　２年
齋藤　花帆南　『家族の時間を大切に』

山梨県　私立山梨学院中学校　３年
丹澤　日南子　『相手を想う時間』

**【中部・近畿ブロック】**

富山県　高岡市立高岡西部中学校　３年
笹島　優杏　『「当たり前を積み重ねる」』

石川県　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校　３年
緒方　杏菜　『本当の日本文化を伝えるために』

福井県　鯖江市中央中学校　３年
松本　実夕　『伝統文化を受け継ぐ』

三重県　鈴鹿市立平田野中学校　３年
松本　未空　『輝ける舞台まで』

京都府　京田辺市立培良中学校　２年
白岩　璃奈　『二つの祖国の間で考える』

兵庫県　賢明女子学院中学校　２年
鈴木　凜　『命』

奈良県　智辯学園奈良カレッジ中学部　３年
三輪　彩結　『さよならする確率』

和歌山県　有田市立箕島中学校　２年
楠瀬　心美　『伝えたいこの文化』

**【中国・四国ブロック】**

岡山県　岡山県立倉敷天城中学校　３年
國府　大晴　『あいさつ』

広島県　広島県立広島中学校　２年
上野　ちひろ　『ほたるの里の絆』

山口県　萩市立萩東中学校　３年
後藤　遙香　『私にだってできたのだから』

徳島県　海陽町立宍喰中学校　２年
戎田　真梨子　『力強く生きる』

香川県　三豊市立三野津中学校　３年
髙橋　華　『地域との繋がり』

愛媛県　高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山中学校　２年
山本　彩羽　『コロナと向き合う』

高知県　中土佐町立久礼中学校　２年
中平　彩心　『すぐ傍にある人権問題』

**【九州ブロック】**

福岡県　福岡県立宗像中学校　１年
ミラー　綺芽　『差別について少し考えてみて下さい』

佐賀県　学校法人東明館学園東明館中学校　３年
佐藤　ひかる　『私の誇りはタコス』

長崎県　雲仙市立瑞穂中学校　３年
本多　満世留　『グローバルな学校を目指して』

大分県　竹田市立直入中学校　３年
小代　あこ　『変える、変えられる』

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　３年
石川　陽葵　『いまをどんな心で生きるか』

沖縄県　糸満市立西崎中学校　３年
嘉数　璃久　『今を生きるために』

**【主催者推薦】**

群馬県　伊勢崎市立第二中学校　３年
西澤　乃彩　『見えない誰かの為に・・・』

滋賀県　滋賀大学教育学部附属中学校　３年
中村　燎　『"バリアフリー" に親近感を！』

徳島県　徳島文理中学校　１年
蓑輪　凛花　『フォトスタンドの笑顔』

滋賀県　長浜市立北中学校　３年
伊藤　帆奈美　『お陰様』

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 私の幸せ

青森県　今別町立今別中学校　３年
**横岡　奈子**

「はあ。またできなかった。」
私は、祖母の入居している施設を出てすぐ、深いため息をついた。

私の祖母は、アルツハイマー型認知症という病気で老人ホームに入居している。祖母は何度も同じ話をするし、わがままもたくさんする。そんな祖母の前で私は、作り笑いをするのが癖になってしまっている。作り笑いをして楽しそうにしていると、祖母の機嫌が悪くなることもなく、場の雰囲気が悪くなることもないからだ。

でも私は、作り笑いをしている自分が大嫌いだ。本当の祖母から目をそらし、都合のいい自分だけを見せているようで罪悪感がある。もし今、急に祖母と話をすることができなくなっても、そんな自分に満足できるのだろうか。こう思うようになったのは、祖父の死が関係している。

私は幼いとき、祖父がとても怖かった。背は高く、いつも険しい顔をしているし、何より無口なところが一番怖かった。何を考えているのか分かりにくく、必要なことだけを津軽弁で簡潔に言うので、余計に怖かった。だから私は、祖父にあまり近づこうとしなかった。

そんなある日、祖父が掃除をしていたとき急にくるっと向きを変えて、電源が入ったままの掃除機を向けてきた。幼かった私は、掃除機の音が苦手だったのもあり、怖い祖父が苦手な掃除機を私に向けてくるのがただ怖くて大泣きしてしまった。祖父はすぐに祖母から叱られ、ふてくされぎみだった。そんな祖父の姿を見ていて、ある疑問が浮かんだ。私に掃除機を向けてきたときの祖父は、とても嬉しそうな顔をしていたからだ。その顔は、人をいじめるときのような「嫌な顔」ではなく「優しい顔」に思えた。
「あの嬉しそうな優しい顔は何だったんだろう。」

そんな祖父は、私が小学校二年生のとき、肺炎で急に亡くなった。思ってもいなかった祖父の死。私にとって初めての身内の死。遺体となって帰ってきた祖父は、あんなに威勢がよくて怖かったのが嘘のように弱々しく見えた。自分にとって大切な人がいなくなってしまうことがこんなにもつらくて寂しいことだと、このとき初めて知った。

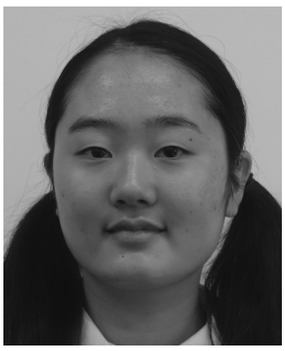
家族や親戚との会話が祖父の思い出話でいっぱいになり、私は、祖父が思っていたよりもずっと優しくて、かわいい人で、すごく不器用だったことを知った。祖父の意外な面を知ったばかりの頃は半信半疑だったが、今ならよく分かる。祖父は何度も私をかわいがってくれていた。掃除機を嬉しそうに向けてきたのだって、私と遊ぼうとしてくれていたんだ。それが祖父なりのかわいがり方だったのだ。
「不器用すぎるよ、じっちゃん。今優しさに気付いても、もうお話しできないんだよ。もう遊ぶことだってできない。」
祖父の真実を知った私は、すごく後悔した。そして、本当の祖父の優しさに気付けなかった自分を愚かだと責めた。

あれから７年がたち、今私は病気の祖母と向き合っている。祖父のときのように、いなくなってから後悔するようなことはしたくない。祖母がわがままを言ったとき、本当は作り笑いをするのではなく、心からの笑顔で最後まで話を聞き、祖母の希望を叶える私でいたい。もしうまくできなくても、最善を尽くしたことを祖母はきっと、喜んでくれるはずだ。祖母が笑っていると私もうれしい。祖母が幸せでいることが私の幸せなのだ。

本当に大切な人を大切にするということはうわべだけの当たり障りのない関係でいることではない。相手のことを知ろうとし、本当の自分をさらけだし、今目の前にいる人を正面から受け止めることなのだ。私は、大切な人を大切にできる人になりたい。相手の幸せを心から願える人になりたい。そう思いながら、祖母と過ごす一日一日を大切に生きている。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

素直な自分で相手と向き合えていない人に届けたいです。私は、素直に接することができない自分が嫌で、「あのとき、こうすればよかった」と後悔したことがあります。だから、相手と向き合うことが怖くて、私と同じようなことをしている人に、素直にならなければ自分も傷つくし、相手も傷つくということを伝えたいです。相手と向き合うことから逃げず、正面から向かい合ってぶつかり合ってほしいという思いをこの作品にこめました。この主張が、相手と向き合おうとしている人の背中を少しでも押すことができたら嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 生き続ける

岩手県　盛岡市立下橋中学校　３年
**鈴木　凜**

恐る恐る抱っこすると、愛くるしい笑顔で私を見つめる。笑っても泣いてもかわいくて愛おしい。結美ちゃんは私のいとこの子供ですが、兄弟のいない私にとって妹のような特別な子です。結美ちゃんの両親はもちろん、みんなが結美ちゃんを可愛がりました。だからこそ、その知らせはあまりに突然でした。

「結美ちゃんが意識不明のまま病院に搬送されたって。」

帰宅した母が言った言葉に、何のことなのか理解できず聞き返したかどうかも覚えていません。結美ちゃんは、まだほんの１か月前に生まれたばかりなのです。

大急ぎで病院に駆け付けると、たくさんの管が結美ちゃんにつながれていました。まるで管がその場所から結美ちゃんが動くことが出来ないように捕まえているようです。それでも、結美ちゃんは小さな体ながらに呼吸をしています。しかし、結美ちゃんが目を開けることはないということでした…。

結美ちゃんには２つの選択肢が残されました。心臓死をもって自然死とするか、脳死判定をするか。さらに、臓器提供という話も出てきました。結美ちゃんはまだ小さく、意識不明の状態にあるため、それを決めるのは家族でした。親族の話し合いで、わたしのいとこ、つまり結美ちゃんの母親は、

「まだ生きようとしている結美の命を奪って臓器を取り出すことを承諾出来るはずがないでしょ。」

と臓器提供に強く反対しました。脳死といっても心臓はまだ動いているのです。

誰も何も言えず、重い空気がしばらく漂いました。そして、重い沈黙を破ったのは結美ちゃんの祖母でした。

「結美の命は生き続ける。たとえ体が全て灰になってもその人の中で生き続けるのよ。」

生き続ける。涙を堪えながら言い放ったこの言葉には力がありました。臓器提供をすれば、誰かの体の中で結美ちゃんは生き続ける。結美ちゃんが生きた証を残すことが出来る。そう感じたのは私だけではないようでした。

その後、結美ちゃんは脳が機能していないとして脳死として判定され、臓器提供が行われました。

あれから１年がたちました。１年たって、結美ちゃんのお母さんはこう言っていました。「本当にこれでよかったのかと何度も悩んだことがあったけれど、今は後悔していない。あのときの選択は正しかったと信じている」と。

そのことを聞いて、私は母に尋ねました。私がある日突然脳死となったら、母はどうするだろう…。

「凜の意思が分かっているのなら、意思を尊重してあげたいと思う。でも、自分の子どもだから生きていてくれることが第一。本当にそうなったらとても悩むと思う。」

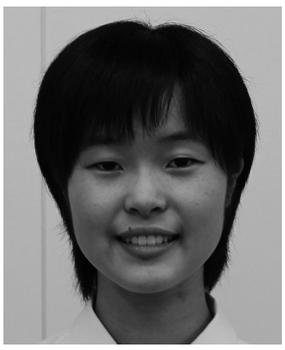
私は、この体験を通し、そして、子を持つ親の言葉を聞いて、自分の命は他の人にとってもかけがえのないものであることを実感しました。命は自分だけのものではない、命にはその人の歴史があり、未来への希望があり、そして、多くの人の思いも背景にあります。だから、死んでも命は誰かの中で生き続けていくのです。

あなたの命も、誰かの中で生きています。これからも、生き続けていくのです。だからこそ、多くのみなさんにも、今、生きていることを大切にしてほしいと強く願います。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

私はこの主張を老若男女問わず、多くの人に届けたいです。私はこの主張を通して、自分の命は自分だけのものではなく、他の人にとってもかけがえのないものであり、強い影響を与えているということを実感しました。だからこそ、自分自身が心に留めるだけでなく、多くの人にも意識しながら生きてほしいと思いました。

私の発表が、聞いてくださった方々にとって、自分の生き方をみつめるきっかけになれば、とても嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 人は支えられることで強くなれる

秋田県　仙北市立神代中学校　3 年

**尾樽部　こころ**

「劇団わらび座」。私の生まれ育った、秋田県仙北市にある劇団です。地域に根差した温かみのある演目、全国の郷土芸能を取り入れた舞台が特徴的な劇団であり、日々、舞台を通して地域の人々に笑顔と感動を与えています。しかし、いまだに感染者が後を絶たない新型コロナウイルスの影響により、わらび座は 20 公演以上の中止、それに伴う約 2 億円の損失という窮地に追い込まれました。わらび座が経営しているホテル、温泉、レストランも臨時休館し、経済的に苦しい日々が続いています。もちろん、この春に公演を控えていた劇団員達や、全国公演で各地を巡るはずだった役者、スタッフ達の心の中は、衝撃と悔しさでいっぱいでした。劇団員である私の母も、その一人です。

母は、今年 3 月に、実に 3 年間も公演してきた舞台の千秋楽を迎える予定でした。しかし、大千秋楽を迎えるはずだった月の予定はすべてキャンセル、十分に思いを込めた舞台ができぬまま、この公演は終わってしまったのです。その時、母はどんなに悔しかっただろうかと考えるたび、胸が痛みました。

でも、私は驚きました。この大変な時期の中で希望をもって前に進み続ける母や、劇団員たちの姿を見たのです。

彼らは、十分な仕事ができず、不満もある中で、「自分たちに今できること」を見つけ出し、活発に行動し始めたのです。

主に、地元の農業の手伝いをし、地域に貢献しています。こんな時だからこそ、いつも応援してくださる地元の方々に恩返しをしたい、そんな劇団員たちの姿勢に、私は強く感銘を受けました。いつもは、舞台を通して地域の方々に元気を与える、でも今は、農作業という労働を共にすることで、役者と地元の方々が密接につながっている。なんて素敵なんだろうと思いました。

「役者は舞台を降りれば無力。」これは、わらび座専属の、脚本家の言葉です。舞台の上では、お客様に笑顔と感動を与えられる役者達。でも、このような時期、舞台ができなくなった時の役者達は、無力。逆に支えられている立場にあるのだということです。

その言葉の通り、苦しい中にあったわらび座には、全国からたくさんの支援金、応援の言葉が綴られた手紙がたくさん寄せられました。母は、この手紙や、お客様からの心遣いに「とても元気をもらったのよ。」と話してくれました。

長年、地域に元気を与える努力を続けてきたわらび座が、今、たくさんの方達から支えられ、元気を与えられているのだということに、私は、人と人とのつながりの大切さを痛感せずにはいられませんでした。

今、わらび座の活動は、再開しつつあります。劇場での公演も、700 席を 100 席にし、ソーシャルディスタンスを保つなど、規模を縮小しての再開となりました。一時は倒産寸前だったわらび座が、再び舞台ができる状況まで戻ってきたのです。でもこれは、全国のファンの方々、地域の方々、家族、そして、人と人とのつながりや絆があって、実現できたことなのです。

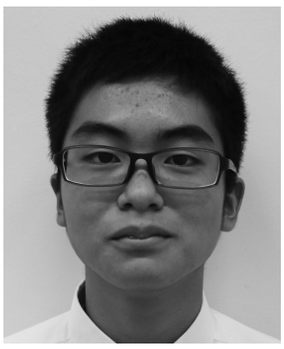
もうだめだと思うような危機があっても、きっと大丈夫。人は一人で生きているのではないのだから。お互いが支え合い、手を差しのべ合うことで、どんなときも人は強くなれる。乗り越えられる。今回の出来事は、私にこのことを強く感じさせてくれました。

応援してくださる方々がいる。そして、それに応えようとする役者達がいる。こんなつながりが、いつまでもずっと続いていってほしいと願っています。

「人と人とのつながり」これは、日々過ごしていく中で私が最も大切にしたいことです。その中で私自身、誰かのためになる強い力を身に付けていけるはずです。ふるさとの小さな劇団が、この春、私に教えてくれました。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

コロナの影響で、小さい頃から育ってきた劇団が、とても大変な現状になっているということを、少しでも多くの人に知ってもらいたい、そこから私が考えた " 人と人とのつながり " について聞いてほしい。そう思ってこの作文を書きました。わらび座について知ってほしいという気持ちもありましたが、何より、このような時期に、私の作文を通して少しでも人の温かさや優しさについて考えてもらえたなら、という気持ちが大きかったです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 世界平和への第一歩

茨城県　筑西市立明野中学校　２年
古橋（ふるはし）　和未知（かずみち）

「フィリピン語を話してみてよ。」

僕が小学校に入学したときに、友達から何度も投げかけられた言葉です。

僕は日本人とフィリピン人のハーフとしてフィリピンで生まれましたが、一歳で日本に引っ越し、ずっと日本で暮らしています。

幼い頃から日本に住んでいて、周りの友達と同じように日本語を話しているのに、フィリピンについての質問ばかりされること、時には面白おかしくからかわれることに違和感を感じ、嫌な気持ちになったこともありました。フィリピンについて聞かれる度にフィリピンのことが嫌になり、母に対して、

「どうして僕はフィリピンで生まれたの。」

と行き場のない怒りをぶつけることさえありました。

そんな時でした。仲の良い友達に、

「フィリピンってバナナ以外に有名なものって何があるの。」

と聞かれ、僕はその質問に答えることができませんでした。その時僕は、自分が生まれた国について何も知らないということに気付かされました。当時の僕はフィリピンについて知っていたことと言えば、僕に質問をした友達と同じように、暑い国だということやバナナが有名だということくらいだったのです。一歳で日本に引っ越してきてから一度もフィリピンに行ったことがなかったので、自分の生まれたフィリピンがどんな国なのか知りたくなり、フィリピンについて書かれた本を初めて読みました。その本には、キリスト教のカトリックが広く信仰されていることや、バナナだけではなくマンゴーやパイナップルが有名だということが書かれていました。さらに、僕はフィリピンと言えば自然豊かな田園風景を想像していましたが、高層ビルの建ち並ぶ写真を目にして、イメージとの違いに驚くばかりでした。

このことがきっかけで、僕はフィリピンについてもっと知りたい、実際にフィリピンに行って景色を見たい、食べ物を食べてみたい、フィリピンの人達と関わってみたい、と強く願うようになりました。ちょうどその頃、夏休みにフィリピンに行こう、と母から提案されていたので、僕はフィリピンに行くのが楽しみで仕方ありませんでした。

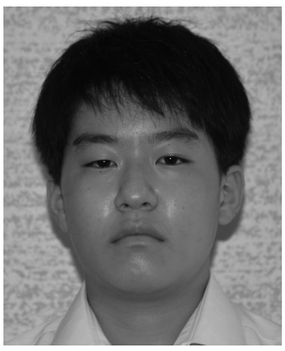
待ちに待った夏休み。僕は緊張しながらも十一年ぶりにフィリピンに足を踏み入れました。空港から出るとき、フィリピンが自分を温かく迎えてくれているような不思議な気持ちになりました。親戚の人に会ったり、マニラに観光に行ったりして、フィリピンの魅力を直接感じることができました。そしてフィリピンがどんな国なのかを知り、僕が生まれた国だということを心から受け入れることができた気がしました。

以前の僕は、フィリピンについて何も知らないのに、自分の生まれた国、母の生まれ育った国を否定的に捉えていました。今ではフィリピンで生まれたことを誇りに思っているし、友達にもその魅力をもっと知ってもらいたいです。暑さやバナナだけがフィリピンを表すものではなく、それ以外にもたくさんの魅力があるということを話したいです。数年前、僕の生まれた国を面白おかしくからかった友達に、他の国を馬鹿にするのは間違っている、どの国にも誇るべき魅力があるということを今の僕であれば伝えることができます。

僕はフィリピンも日本も大好きで、誇りを持っています。国際化が進み、違う国の人々と関わる機会が多くなりますが、お互いに尊重し合い、お互いを知ろうとすることが世界平和につながると思います。一人一人が自分の国に誇りと自信をもつことが世界平和への第一歩です。皆さんは日本についてどれくらい知っていますか。日本の良いところはどんなところだと思いますか。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

将来は教師になりたいと考えています。自分と同じような境遇で悩んでいる生徒に寄り添い、支えたいです。また、すべての生徒に、自分の国に自信と誇りをもつことの大切さと、お互いの国について理解し、尊重し合うことの大切さを伝えたいです。これからますます国際化が進み、他の国の人々と関わる機会が増えていくので、世界平和のために自分ができることとして、自分の経験や思いを伝え続けていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 差別という言葉をなくすために

埼玉県　八潮市立潮止中学校　３年

**水谷　卓郎**

新元号の始まりに沸いた昨年のＧＷ、家族でロンドンへ行きました。毎日のスケジュールは全て私が決めたもので、見たいものを目にし、食べたいものを口にする。五感で感じる全てが刺激的でした。宿のオーナーは英国人のお婆ちゃん。英国にとても親近感の沸く毎日でもありました。

あるショップでの事です。初の「ポンド」を使った買い物にワクワクしながらレジに向かうと、そこにいたのは白人のおじさんでした。バーコードを読み終えると、おじさんは言いました。「20 ポンド。」それは小さく怒ったような声で聞き取れませんでした。「ワンモアプリーズ。」勇気を出して言いました。しかしおじさんの口は接着剤でつけたかの様に動きません。むっとした顔で目も合わせてくれません。仕方なく、自分で計算し必死の思いでお金を渡しました。「おじさん、体調が悪かったのかな」旅の高揚感もあり、その時は深く考えませんでした。しかし、次の白人男性に対する態度は一変。「ハロー。ハーワイユー。」親しげに声をかけると、最後は、「ハヴァナイスデー。」笑顔を絶やさないではありませんか。私は驚き、悲しくなりました。しかし、何故態度が違うのか、いまいち理解出来ませんでした。列の後方に並んでいた母の会計も同じおじさんでしたが、不機嫌な顔に戻っていて、更に不思議に思いました。

会計を終えた母に、「おじさん、怖かったね。」と言うと、母は「恐らく」と前置きして「肌の色かな」と一言。私は意味がよく理解出来ませんでした。両親に聞いて自分で調べた事を簡単に紹介します。諸説あると思いますが、私達日本人の肌は黄色く、この様に肌に色を有している人達を「有色人種」と言いその対となる言葉は「白色人種」で、主に欧米人を差します。この言葉は 19 世紀から 20 世紀中頃まで言われていました。何故この言葉が生まれたのか。欧米の植民地支配があった時代、その拡大や奴隷制を正当化するため、外見で区別し易い部分を利用し人種を区別した、ということなのです。今でもこの名残りがゼロではないのです。

自分の肌に色が付いているという事実に、とにかく驚きました。考えたこともありませんでした。そして、今まで感じたことのない苦しみが私を襲いました。店を出ると、何だか街が今までより暗く見えるようでした。今まで気づかなかったけれど、きつい・汚い・危険、言わゆる３Ｋと呼ばれる仕事の多くは黒人さんが担っている現実が浮き彫りに見えたのです。

これはロンドンに限りません。日本でもヘイトスピーチが社会問題であるように世界のどこにでも偏見はあるでしょう。体育祭のチーム分けや性別等、分かりやすい区別が必要な場面はあります。しかし、そこに差をつけるのは間違いだと私は言いたい。差別とは区別したものに差をつける事で、受けた側の誰もが苦しむ問題なのだと言う事に気づきました。

どうしたら解決するでしょう。私には世界を動かす力はありません。身近な所から見つめ直す事が必要です。掃除が嫌だと周りに押しつけていないか。国籍の違う友達が困っている時、見て見ぬふりをしていないか。誰もが過ごし易い学校を作る事なら、すぐ始められるのではないか。私は生徒会役員として活動しています。周囲に問題を提起し、一人一人が自分の事として受け取って貰える様行動していく必要があると感じました。差別がどんなに悲しい事か、経験したからこそ出来る事がきっとあるはずです。衝撃的でしたが新たな発見が出来たのだから、とても貴重な経験だったのかも知れません。

今回、航空券等を手配してくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです。いつも自分を支えてくれている人がいることを忘れず、この気持ちを糧として活動したいです。新元号の始まりと共に私も新たな一歩を踏み出します。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

家族との海外旅行をきっかけに、今まで自分と無関係だと思っていた差別と向き合うようになりました。きっと日本でも、差別に苦しんでいる人はまだ大勢いらっしゃるはずです。そういう方が、笑顔で、胸をはって日常生活を送れるよう、またそのきっかけとなるようにしたいです。また、題名のとおり、差別という言葉そのものがなくなるような社会を自分たち若者が責任もってつくり上げていきたいです。

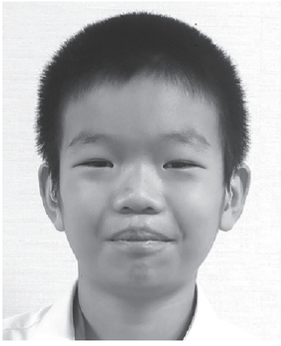
国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 父の娘として

千葉県　千葉市立幕張本郷中学校　３年
**杉久保　栞那**

「お誕生日おめでとう。」
今まで生きてきて、一番悲しくて、嬉しい誕生日になった。
私の父は、自衛官だ。周りの友達は、自衛官と聞くと、
「カッコイイ」
「スゴーイ」
などと言っている。しかし、そのようなカッコイイものではない。食事中に大きな地震があると、すぐに、携帯電話を手に取り、出動するべきなのか、しなくても良いのか、確認する。家族に対して「大丈夫？」の言葉も無いまま出動することもあった。そんな父を、私は「カッコイイ」なんて思うことはできなかった。それにいつも家族の安全より、仕事を優先している父を、差別するような目で見ることもあった。
平成二十六年、九月二十七日。私の誕生日の前日だった。御嶽山噴火。その日は、いきなり訪れた。どの番組を見ても噴火のニュースばかり。今までなら、前日から、当日は何を食べるか、ケーキはどうするのか、などを決めている。でも、その年だけは違っていた。もしかしたら、私の誕生日を祝ってくれないのではないかと、とても不安になった。
次の日、私は心の中で賭けていた。災害派遣に行くのか、それとも、家族の誕生日を祝うために行かないのか。その賭けは、大きな不安と、小さな希望をもった私にとって、とても長く感じられた。ちょうど母が、昼食の準備をしている頃だった。父は、電話で確認を取ったあと、
「行くことになった。」
と言って、家を出て行った。家で誕生日を祝ってくれる可能性は、低いと分かっていたのだが、やはり悲しかった。覚悟が足りなかったのだろうか。心の中の一本の棒が、「ポキッ」と折れたような気がした。それから二時間程、私は、石にされてしまったかのように動くことができなかった。
九月二十八日。
私の誕生日。しかし、嬉しくなんかなかった。母と姉からの「おめでとう。」その言葉は心にただただ突き刺さるだけだった。今日はつらくて悲しい一日だと思っていた、そのときだった。「プルルルル」電話が鳴り、受話器から、聞き慣れた声が聞こえてきた。
「お誕生日おめでとう。ちょうど十一時四十七分だね。」
父だった。思いもしなかった。まぶたからは大きくてきらきらと光った涙が落ちた。私は勘違いをしていた。父は、家族のことを思っていてくれたのだ。災害派遣に行った先で、わざわざ時間まで合わせてくれたのだ。私は、父を見送れなかったことを後悔した。なぜなら、私が生きてきた中で、何もかもが、一番だったからだ。ほかに、比べものにならないくらいうれしくて、誰にも負けないくらい、愛されていると、実感した。
「お父さん、ありがとう。」
私は、心から感謝の気持ちを伝えた。
授業参観では、忘れずに来てくれたり、運動会当日は、朝早くから場所取りに行ってくれるが、仕事となると鬼と化す父が、仕事先から祝ってくれたと考えると、涙が止まらなくなった。
後日、あるニュース番組のニュースに、父が出ているのを発見した。見出しは、「自衛隊による人命救助」その二ュースには、父が人を助けているところが映っていた。家に帰ってきたとき、父は、
「困っている人が、目の前にいるんだから、その人たちのために、自分は今何ができるか、考えて、考えを行動に移すことが大事だ、と改めて思ったよ。」
と私達家族に、話してくれた。
又、伊豆大島に大きな被害が出た台風では、新聞記事に、大きく父の名前が記載されていた。そこには、普段家では見ることのできない、父の姿があった。そして、国のために働く父の娘であることを、誇りに思った。
私は、小学校五年生から剣道を始めた。試合に負けては、人のせいや、体調のせいにして、自分の負けを認めることができなかった。又、去年、先輩と代替わりをして、部長になった私は、プレッシャーや責任から逃げてきた。しかし、去年、全国の内閣総理大臣杯で、ベスト十六になった。入賞は、できなかったが、逃げずに戦えた。すがすがしい気分だった。そのとき、私は決めた。いつか、父が私を、「自慢の娘だ。」と胸を張って言えるようにすること。
私は誓う。何があっても逃げ出さないこと。なぜなら、まだ父に、感謝を伝えていないから。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**
父が自衛官で、災害派遣に行ったりしていることは、知っていたけど、まさか自分の誕生日の前日に災害派遣に行くなんて思っていなかったので、そのときの悲しさや、苦しさ、葛藤などを文にして、表そうと思ったのが、きっかけです。そしてまだ幼かった私は、自分のことだけしか考えていなくて、仕事先から祝ってくれた父に感謝を十分に伝えられていなかったので、剣道の試合、大会を通して決めた逃げない気持ちと共に伝えられたらいいなと思って書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 普通とは何か

東京都　葛飾区立青戸中学校　１年

**松本　直汰郎**

普通とは、何でしょう。
異常がないこと。
良くも悪くもないこと。
平凡であること。

普通とは、とても難しい言葉だと思います。なぜ、僕がこんなに考える必要があるのか。それは僕が「耳が聞こえにくい」障害者であり、自分を普通ではない人間と考えていたからです。僕は、自分が他人と違う人間だということを、幼い頃から薄々分かっていました。

しかしながら、最近は、補聴器をつける自分がひどく格好悪く思えてきました。それはきっと、補聴器の見た目が関係していると思います。補聴器の性能は優秀で、性能面では何も文句はありません。しかし、その形は、耳に合わせてカーブした、珍妙な形です。初めて補聴器を見た人が興味を持ち、首をかしげたり、耳をちらちらと見たりするのも納得できます。

僕は、補聴器をつけることにコンプレックスを感じ始めていました。しかし、「見た目が悪い」という理由で外してしまうわけにはいきません。補聴器は僕にとって必要な物だからです。僕は、自分が普通ではないことを実感するとともに、そんな自分が情けなく思えてきました。

そんな時、ふと頭に思い浮かんだのは、
「みんなちがってみんないい。」
金子みすゞさんの詩の言葉です。「私と小鳥と鈴と」の詩は、それぞれの個性を認め合う素晴らしさがうたわれています。これです。この時の僕には、この詩の言葉がスッと心に入ってくるように感じました。自分を他人と比較してしまう自分にも、大きな原因があると気付いたのです。「人と人は、それぞれに良さがあって、欠点もある。それぞれの個性を大切にするべきだ。」こんなに簡単な、こんなに当たり前のことさえも、僕は忘れていたのです。

金子みすゞさんの言葉で、僕は大切なことを思い出し、その考えを改めることができました。そして僕がこだわっていた「普通」の恐ろしさについて考えるようになりました。

「あの人は普通じゃない」
「普通ならもっとできるはず」
「君って普通だね」
この三つの言葉を、あなたならどう受け止めますか。仲の良い友人、信頼していた親から突然こんなことを言われたら…。もちろん、人によって感じ方は違うと思いますが、これらの言葉をうれしいと受け止める人はいないでしょう。これらの言葉は全て、人を傷つける可能性があると僕は思うのです。言葉というものは恐ろしいものです。人を優しく包み込むこともあれば、たとえわざとじゃなかったとしても、絶望させてしまうこともあります。大げさかもしれませんが、さりげなく放ったその一言で、相手は計り知れないダメージを受けるかもしれないのです。

こんな事例を耳にしたこともあります。
「あの子は普通じゃなかったから、興味本位でちょっとからかってみた。」いじめはどれも悪ですが、人の個性を踏みにじるようないじめは絶対にしてはいけません。こんないじめが早く無くなることを願うばかりです。

普通という言葉を辞書で引くと、「他と比べて、特に変わっていないこと」と記してあります。しかし、今の僕が「普通」について解釈するとしたら、こうでしょう。
「普通とは、人によって基準が異なるため、どれが正当であると言い切ることはできない。人によって普通が違うということは、すなわち個性があるということ。」

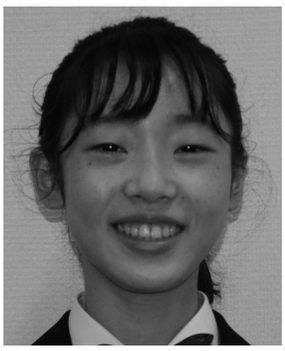
僕がこだわっていた普通について、一つの結論が出たような気がします。僕は自分と、僕にとっての普通を大切にして生きていきたいです。

補聴器は、眼鏡や上着と同じです。寒い時に上着を着るように、聞こえにくいから、補聴器を使う。見えにくいときに眼鏡をかけるように、聞き取りにくいから、補聴器をつける。補聴器を使うことは、決しておかしいことではないのだと、やっと分かりました。

僕には僕の、普通があります。そして、あなたには、あなたの普通がある。一人一人を大切にするとは、互いを尊重し合うとは、その普通を認め合うことだと思います。誰もが互いを認め合える世の中を、これから僕たちが築いていかなければならないのです。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

いつからかは忘れてしまいましたが、自分の補聴器の外観にコンプレックスを感じるようになりました。「自分は、なぜこんなものをつけなければいけないの？」「もっと耳がよくなったらなぁ」などと思うことが多々ありました。クラスで眼鏡をかけている子がいても、誰も不自然には思いません。つまり、補聴器も普通なんだと実感したのです。この作文は、僕と同じようにコンプレックスを感じている人に届けたいという思いがあって書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# ともだちのかたち

神奈川県　横浜市立生麦中学校　１年

**佐伯　凛**

今年の夏、私の心に一人の大切な友達への思いがありました。遠くに引っ越したため毎年夏休みにだけ会えるのですが、今年はコロナの影響でそれも叶わなくなったからです。

今から三年前の夏、友達が引っ越してから待ちに待った夏休み、会えるのが楽しみで仕方なかった私に、母から話がありました。聞くと、その友達が自分で髪の毛を抜いてしまう病気だということでした。その子のお母さんが、凛ちゃんになら何か話してくれるかもしれないと言っていたとのことでした。当時の私は、母たちからそのように言われても、届く手紙の中のその子は、新しい場所での生活がとても楽しそうで何の事なのかよくわかりませんでした。そして一年ぶりに会えた友達は母から聞いていた通り髪の毛が少なく帽子を被っていました。でもそんなこと関係無く私たちは抱き合いました。夢のような時間はあっという間に過ぎ、その間私は友達の髪の毛のことはほとんど忘れていました。最後の夜、たくさん話をしました。私がウトウトしたころ友達が、

「私ね、知らない間に自分の毛を抜いちゃうんだ…。」

と言いました。私は、何と言ったらよいかわからず

「うん…。」

とだけ言いました。その子も

「うん…。」

と言いました。翌日別れる時私は、

「次の夏休みも、また絶対会おうね。」

と約束しました、その後、

「ずっと友達だよ。」

と言いました。そんなこと、当たり前のことなのに言いたくなりました。当時小学生だった私が友達の髪の毛の事について、伝えられる限りの言葉でした。友達は笑いながら泣いていました。翌年の夏、

「凛ちゃん！」

という声に顔を上げると、東京駅の改札の向こうで友達が変わらない優しい笑顔で手を振っていました。私は急いで駆け寄り抱き合いました。嬉し涙で少し歪んで私の目に映った友達は、眉毛とまつげがなく、つけ毛とターバンをしていました。でもそんな事関係なく、私たちは離れていた時間なんてなかったみたいに仲良く過ごしました。少し前と違ったのはプールに遊びに行った時、

「ちょっと待っていてね。」

と、友達が私の見えない所へ、スイミングキャップを被りに行ったことでした。私はそれを見て、友達が今抱えている病気を理解したいと思いました。調べると、現時点では効果的な薬も治療法もないとありました。私はその友達のために何ができるのかをずっと考えるようになりました。そして、答えが出ぬまま迎えた今年の夏、私が友達に宛てた手紙は楽しいものではありませんでした。私は合唱の伴奏のオーディションに落選し、やり場のない悲しい気持ちをその子にだけ聞いてほしかったからです。すると友達から、私は凛ちゃんのピアノが好きだよ。それでやめたりしないでね。と返事をもらいました。私はドキッとしました。実はそれ以来ピアノから遠ざかっていたからです。そして、友達は音楽が大好きでピアノを習いたいけど習えなくてよく私の家で一緒に弾いていたことを思い出しました。私は今またピアノに向かっています。

友達の病気を意識するようになり、私は自分のほうが友達に何かしてあげなければという思いに偏り過ぎていたように思います。私も元気をもらっていることがたくさんあるのです。助け合う時も友達だし、そこにいてくれるだけでも友達で、友達になれたことが嬉しい。友達にとって私もそうでありたい。

友達と聞いて誰かの心に浮かぶ顔の数だけ友達のかたちがあるのです。私は心から心配してくれた友達に返事を書きます。

「おかげで元気がでたよ。ありがとう。またピアノ一緒に弾こうね。離れていても会えなくても、ずっとずっと友達だよ。」

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

三年前、毎日一緒に遊んでいた大切な友達が遠くに引っ越しました。それ以来、私たちは年に一度夏休みにだけ会えるのですが、今年の夏はコロナの影響でそれも叶いませんでした。その会えない間に、胸の中にあった友達への思い、友達からもらったたくさんの元気、自分の気づき、そして友達とのこれからを、心を込めて一つの作品にしたかったからです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 家族の時間を大切に

新潟県　新潟県立燕中等教育学校　２年

**齋藤　花帆南**

あなたは今朝、「おはよう」と家族の顔を見て、大きな声で挨拶をしてきましたか。「面倒だ」「ちょっと恥ずかしい」、私もそんな気持ちになります。しかし、朝「おはよう」と言った家族に、夜「おやすみ」と永遠に言えなくなることもあると、私は知りました。

私の家族は四人。近所でも有名な仲良し家族で、とってもアウトドア派の家庭でした。スキーに、野球に、ゴルフに、マラソン。小さい頃から、たっぷりと愛情をもらって育った私は、わがままで、超負けず嫌いで、そして、感謝の気持ちを伝えることが苦手でした。家族に「ありがとう」と言おうとしても、なんだか照れくさくて、伝えられないということがよくありました。

去年の秋、家族の突然の死を経験しました。「おはよう」と言い合って、家を出たはずなのに、その日の九時に、父はもう、二度と目を開けることはありませんでした。

「心からの感謝、伝えたことなかったな。」

そう思った時、初めて「死」というものを理解しました。どんなに伝えたい言葉があったとしても、それを届けられないこともあるということを知ったのです。

一週間後、欠席が続いていた私を心配してくれた友達に、

「ごめん、風邪ひいてて…。でも大丈夫！」

私は明るく振舞い続けました。周りから心配な目で見られることが嫌だったからです。それに、母は泣いてばかりだったので、自分がしっかりしないといけないと思ったからです。しかし、表向きは明るくしていても、心の中は枯れ果てたようでした。あんなに大好きだったご飯も、おいしく感じられない日々を送っていました。

四十九日の法要でのこと。大人たちが、私と弟の今後のことについて話している声が聞こえてきました。聞いているうちに、悲しい気持ちが募っていきます。もともとマイナス思考だったのに、ますます悪い方に向かっていきそうでした。

そんな時に、言葉をかけてくれたのが、私が小さい頃から大好きだった叔母でした。

「あなたが無理していることがとても伝わってくる。死んだ人を思い続けることも必要だと思うけど、今生きている、あなたのお母さんや自分自身を、もっと大切に想って、これから幸せになってほしい。人生はもっといいものだから、前を向いてほしい。」

たしかにそうだ。失われた命は戻ってこない。だからこそ、この先も暗い気持ちで生き続けるより、今あるものを大切にして、明るく前向きに生きる方がいい。ｅｎｊｏｙ！

叔母の口癖は、「いつか天国に行ったら、『兄ちゃん早過ぎるよー』って言ってやる！それまでみんな、強く生き抜こうね！」というものでした。私は、そんな力強い言葉に励まされると同時に、叔母のような人になりたいと思うようになりました。身近にいる人の心の支えになりたい。勇気をもって一歩踏み出せる、原動力を与えられる人になりたい。私は、前を向くと決めました。今ある家族と一緒に幸せになるために。

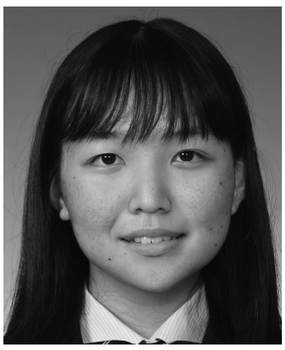
私の家では、夕食の時、必ずテレビを消して、会話を楽しみながらご飯を食べています。一日の出来事を伝え合うことで、それぞれが過ごした時間を共有できたようで、うれしい気持ちになります。近年、子どもたちは「メディアの時間」が増えたことで、「家族との時間」が減っていると聞いたことがあります。実際、私もメディアに限らず、勉強が忙しく家族との時間が減っています。そんな中でも、家族と笑い合いながら、「ほっとする時間」を大切に過ごしています。それから、相変わらず得意ではありませんが、ちょっとだけ頑張って、「ありがとう」と伝えるようにしています。

「人生は、もっといいものだから。」

そう思える家族との物語を、これからも、その先もずっと、紡いでいきたいと思います。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

以前の私のように、家族の存在を「めんどくさい」などと感じたり「お父さんきらい、話したくない」と言って家族と距離をおいている全国の中学生に届けたいです。家族は一番身近にいる存在だからこそ、その過ごしている時間が貴重なものだと気付く事ができないし、失うはずがないと思っている人が多いと思います。しかし、突然なくなることもあります。だから私は、もっと家族と過ごす日常を大切に過ごしてほしい。家族に「おはよう」「おやすみ」「ありがとう」と言ってほしい。この主張を聞いていただけた方々が、少しでも「家族の時間」を大切にしていきたい、と感じてほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 相手を想う時間

山梨県　私立山梨学院中学校　３年
**丹澤　日南子**

気が付けば、辺りの景色はすっかり青々と色付き、私たちを包んでいた太陽のやさしい光も、肌を焦がすような力強い日差しへと変わっていた、そんな今年のゴールデンウィーク。私は家族みんなで新潟県へ旅行に行く予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、楽しみにしていた旅行には行けず、宿泊するはずだった旅館も予約をキャンセルすることになってしまいました。せっかくの連休をずっと家で過ごすこととなり、気分が沈んでいたある日、家のポストをのぞくと一通の封筒が届いていました。さっそく中を確かめると、そこには素敵な入浴剤と手書きのお手紙が入っていました。送り主はなんと泊まりにいくはずだった旅館の女将さん。入っていた入浴剤はその旅館の温泉のもので、家にいながら少しでも温泉気分を味わって欲しいという女将さんのお心遣いだったのでしょう。その粋な計らいに、心が温かくなりました。しかし、それ以上に温かさを感じたのは、一緒に入っていたお手紙でした。柔らかな手触りのきれいな和紙に、毛筆で書かれた私たちの健康を願う励ましの言葉。今年の連休は温泉で温まることはできなかったけれど、時間をかけて手書きのお手紙を書いてくださった女将さんのお心遣いに、家族みんなの心がほっこり温かくなりました。

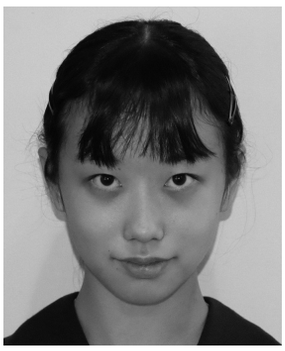
私は、普段なかなか会えない幼い頃からの友人と手紙の交換を続けています。学校であったこと、最近見ているドラマ、テストの結果、そんなたわいもない近況報告も多いのですが、時には、なかなか他の人には切り出せない悩みや本音をこぼしたり、励まし合ったりする友人との手紙の交換は、私にとって楽しみの一つであり、大切な心の支えでもあります。また、手紙の内容だけでなく、友人の書く文字にも心を動かされる瞬間があります。友人の文字がちょっと大人っぽく見えたとき、時の流れにどことなく寂しさを覚えたり、逆にお互いの成長が感じられてうれしくなったりします。手書きの手紙だからこそ、友人の生き生きとした姿が伝わってきて、より繊細なものを感じ取ることができるのです。なんとなく心のどこかが寂しくなったとき、温かな文字を通して友人を身近に感じ、心が落ちつきます。

近年、モバイル端末の普及によって、いつでも、どこでも、誰とでも様々な形でメッセージの交換ができるようになりました。すぐに情報を共有することができ、私も毎日利用しています。ただ、便利になったが故に、私たちが忘れかけている大切なものがあるような気がするのです。それは「相手のことを想う時間の温かさ」です。私が女将さんや友人の手紙から感じた温かさ。それは内容からだけでなく、「手書き」という形で私たちのことを想ってくださったからこそ感じられたものでもあるように思います。もちろん、手紙を手書きするということは、とても手間のかかるものです。でもその手間は、相手のことを時間をかけて想った証。きっと相手に伝わるものはより色濃く、繊細なものになっていきます。そして、生き生きとした人間的な姿を、温かさを伝えることに繋がるのです。

あの夏目漱石も大切にしていた「手紙」という文化。受け取る相手に想いを馳せた時間は、人々の心と心を繋ぐ架け橋となります。ただ、手紙の他にも誰かと繋がる方法はたくさんあります。例えば普段よく使うＳＮＳ。たとえ短いやりとりだとしても、はっと思いついてすぐに送信するのではなく、時間をかけ、相手を想って言葉を届ける。そんなことを、あなたも心がけてみませんか。きっと、あなたのその想いと温かさは、太陽の光のように、どこまでも伝わってゆくから。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

今年５月に新型コロナウイルスの影響で宿泊をキャンセルした旅館の女将さんから届いた手紙、また幼い頃から続けている友人との手紙のやりとりを通して、改めて感じた「相手を想う時間の温かさ」。SNS などですぐにメッセージのやりとりができる現代だからこそ、今一度相手のことを時間をかけて想うことの大切さや、そうやって温かな言葉を届ける大切さをたくさんの人たちに伝えたいと思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 「当たり前を積み重ねる」

富山県　高岡市立高岡西部中学校　３年
**笹島　優杏**

「あぁ、やっぱりか」とつぶやいた。

五月十日、スマートフォンに届いたネットニュースの通知を見て、私は急いで全日本吹奏楽連盟のホームページを開いた。

そこには『全日本吹奏楽コンクール中止』の文字。今年の大会は特別だったのに…。

私は、部活が大好きだ。先生や友達、先輩、後輩と心をひとつにして取り組む吹奏楽が大好きだった。部活が私にとって「青春」だった。三年生になる今年、当たり前のように新入生を迎え、当たり前のように最後のコンクールを迎えると思っていた。

三月に、顧問の先生が二人とも異動となった。今年こそ全国に先生を連れて行くと決意していた私にはショックな出来事だった。

異動が発表された翌日、急遽開かれたミーティングのあと、先生は私を呼び止め、長年使っていた指揮棒をプレゼントしてくださった。「また、合奏で使って」と。

その先生は吹奏楽が本当に大好きで、音楽と私たちに真剣に向き合っておられた。出来ていないところは厳しく指導してくださった。生徒のことを一番に考え、笑顔にしてくださるかけがえのない先生だった。

私はこの一年最高の西中サウンドを目指して頑張ってきた。「卒業式には先生の指揮で、後輩たちの成長を感じる演奏で巣立ちたかったのに」と悲しく、部活もできないまま、こんなお別れになるのが悔しかった。

毎日、家で「どうして私たちばかりこんな目に遭うのだろうか？」とばかり考えていた。暗闇に包まれた気分だった。ふと、壁に飾ってある去年の吹奏楽コンクールの写真が目に入った。

それを見て、先生が最後にプレゼントしてくださった指揮棒のことを思い出した。指揮棒が悲しんでいるように感じた。贈ってくださった意味が分かった気がした。

先生から沢山のことを学んだ。その一つが「当たり前を積み重ねると特別になる」という言葉だ。

そういえば、私はこの言葉を励みに日々練習してきたのだった。難しい旋律やリズムにも諦めず取り組んできた。「特別」な演奏をして、目標を達成するために。

忘れかけていた、夢中になって練習したあの日々の思いがどんどん頭に浮かんできた。先生はあの指揮棒に「自分はもう見られないけど、教えたことを忘れず進化していってほしい」という思いを込めていたのだろう。

「いつまでもくよくよしてちゃだめだ。先生もそんなことは望んでない」と思えた。当たり前をまた手に入れられたときのために、今できることに精一杯取り組むことにした。部活が再開したときに全力で活動できるように、楽器の基礎練習はもちろん、体力トレーニングもした。夏には部活に打ち込めるように受験勉強を頑張った。

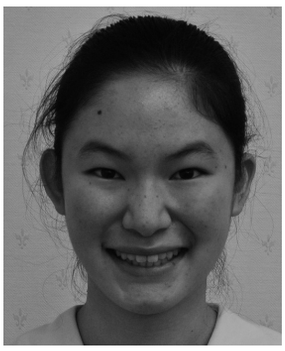
先生は「聴いている人たちに一生懸命な姿を見せるだけで、みんな元気が出るから」といつも言っておられた。「私たちにできることは、音楽で人々を癒し、勇気づけること」当たり前が当たり前ではなくなって分かる特別さ。それに、私は気づくことができた。

いま、世界は大きなピンチを迎えている。いろんなことをあきらめかけている人たちも多くいるはずだ。私はそんな人たちに声を大にして伝えたい。『当たり前を大事にすることで、日常を変えることができる。だから、前を向いていこう』と。

私も、この時期を三年生として過ごした私たちだけの『西中サウンド』を響かせたい。そして、支えてくださる全員と感動と感謝を共有できる、そんな特別な日が来ることを信じて、当たり前を積み重ねていきたい。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

コロナウイルスでしたいこともできなくなり、心身ともに疲れを感じていていろいろなことをあきらめている人たちに、私の主張を通して元気になってもらえたり、考え方を変えてもらえたりしたらいいと思っています。また、私に関わってくださった方々にも届いたらうれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 本当の日本文化を伝えるために

石川県　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校　３年
**緒方　杏菜**

私のいとこは、フランスと日本のハーフです。日本語を流暢に話すことができますが、日本で暮らしたことはありません。「母の祖国についてもっと詳しくなりたい。」という彼女の希望から一ヶ月間日本で一緒に過ごす機会がありました。いろいろなところに出かけ、たくさんの経験をしました。私は一人っ子なため、お姉ちゃんができたようでとても嬉しかったです。空港で彼女と別れる直前までは。

私は名残惜しくてこんな冗談を言いました。「ねえねえ、日本で働いたらどう。みなみちゃん日本語話せるじゃん。」すると彼女はいつになく真剣な顔でこう言いました。

「いい考えだね。だけど、お辞儀をしたくないから日本では働けないよ。意味もなく頭を下げるなんて私は嫌だよ。」

衝撃的でした。「意味もなく？　お辞儀が？」私は、自分自身の耳を疑い彼女の顔をじっと見ました。彼女は本気でした。

その日から、彼女の言葉が頭から離れませんでした。私たちは本当に意味も無く頭を下げているのでしょうか…

考え抜いた末、彼女は日本語を話すことができるにもかかわらず、日本文化の本質を理解していなかったのではという思いに至りました。だから「意味もなく頭を下げるお辞儀」と言ったのかもしれません。すれ違いざまの会釈、電話越しの見えない相手へのお辞儀、卒業式での恩師への最敬礼。これらには、親しみや敬意などの意味が込められています。私たちは、無意識のうちにそれらを感じたり、身近な大人に教えてもらってきました。しかし、日本文化に詳しくない人にとって自分自身で気づき、理解するということは困難でしょう。だからこそ、私たちは日本文化の本質、奥深いところ、それに加えて私たちが当たり前と感じていることをより一層発信する必要があると思います。

今の私にできることはなんだろう。その答えをみつけるため身近な人に相談したり、ネットを中心に様々な情報を探してみました。そして、今三つのことに取り組んでいます。

一つ目は、他の言語を話せるようになること。日本文化に興味がある人の全員が日本語を話すことができるとは限りません。そこで、私は英語とスペイン語の学習に力を入れています。語学の勉強は大変で投げ出したくなることも多々ありますが、そんな時は「日本文化の奥深さを世界中の人に知ってもらうんだ。」とゴールを思い出しモチベーションを上げています。努力を重ね今年の三月に英検一級に合格しました。

二つ目は、自分自身が金沢、石川について学校での取り組みを通して詳しくなること。私の通う金沢大学附属中学校では、石川の伝統文化について調べています。八月には、調べた内容、そして石川県をより良くするための提言を発表しました。この活動を通して、地元石川の文化について自信を持って説明ができるようになりました。

三つ目は、実際に日本文化を発信すること。私の家族はこれまでに何名かホームステイの学生を受け入れてきました。今年は石川県が主催するオンラインランゲージテーブルに参加しました。これは、日本語を学んでいる大学生とオンラインで交流するというプログラムです。中学生の私にホストとして活動するというチャンスをくださったことにとても感謝しています。その責任の重みを実感し、日本文化の本質を正しく積極的に伝えることを心がけました。

この三つの活動は、今後ももちろん続けていきます。世界中の人に私の大好きな金沢、石川、そして日本の文化の奥深さ、本質を正しく理解してもらうために。そして次にいとこに会ったとき、「意味も無く頭を下げるお辞儀」なんて言わせません。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

私は、この主張を全ての人に届けたいです。現在、インターネットの普及などにより、「国際交流」が盛んになっています。そこで、最も大切なことは、その文化の本質を伝える・知ることだと思います。本質を理解することで、互いの文化を尊重できるようになり、平和な世界をつくれるはずです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 伝統文化を受け継ぐ

福井県　鯖江市中央中学校　３年
**松本　実夕**

「人の思いを無駄にしない」これは、私が伝統文化から教わったことです。私は小学四年生の頃から人形浄瑠璃をやっています。そして今現在も地区の人形浄瑠璃の一つの座に所属しています。人形浄瑠璃では、三人で一体の人形を動かします。三人の息があわなければ、人が動いているようには見えません。

私が人形浄瑠璃を始めるきっかけとなったのは、近松座という人形浄瑠璃の座の方が小学校にその話をしに来てくださったことです。約五年間伝統文化の一つである人形浄瑠璃にふれ、たくさん感じたことがあります。その中で、私の中にいつでもあるのが「人の思いを無駄にしない」という言葉です。

人形浄瑠璃にある人の思いとはどのようなものでしょうか。それは、「出来るだけたくさんの人に人形浄瑠璃を知ってもらい、新しい時代に残していく」これが人形浄瑠璃の中にある人の思いだと考えます。私は、人形浄瑠璃をやっている方とたくさん話をするようにしています。ほとんどの方が高齢者というのが今の現状です。ですが、みなさん口をあわせておっしゃいます。

「できれば若い人たちにも興味をもってもらいたい。」

と。この言葉の意味を考えてみると「若い人」という言葉からは、若い人たちに今後末永く人形浄瑠璃を受け継いでほしいという期待。「興味」という言葉からは、少しでも人形浄瑠璃に興味をもち、いろんな人に話をしたりネットで広げたりといった、自分たちにできないことをしてもらえないだろうか、という思いがあると思います。私は人形浄瑠璃を受け継いでこられた方のこのような期待を無駄には出来ません。だからこそ、出来るだけたくさんの人に人形浄瑠璃を知ってもらい、新しい時代に残していく、というのが、人形浄瑠璃の中にある人の思いだと考えます。しかし簡単に誰しもが「自分が受け継ぐ。」という言葉を口にすることはできません。だからこそ、その言葉を実現するために私は行動します。私は、中学二年生の秋に大人の人形浄瑠璃グループである近松座に入ることができました。子ども文楽では、演目も二つしかなく、自分の役も決まっていたため、多くを学ぶことはできませんでした。そのためこれから、様々な演目を見て勉強します。いろいろな経験をして、自分の経験値を高めます。たくさんの人に人形浄瑠璃の話をします。どんなに馬鹿にされることがあっても諦めません。今言ったことを達成することで、本当に一人前であると認めてもらえるかどうかは、分かりません。でも、私は諦めません。

今、大人の人形浄瑠璃には、私以外子どもはいません。しかし、必ず人を増やし、安心して次の世代に交代できるようにすることが、今まで人形浄瑠璃を大切に守ってこられた方々の思いを無駄にしない方法であり、受け継ぐことにつながっていくと考えます。一回ミスをしたら大切な物が失われてしまう、そんな瞬間を私たちが行動出来るかどうかによって、人形浄瑠璃の未来は変わります。私は、あの時自分が行動していれば良かった、と後悔したくはありません。だから、今この瞬間から動き出します。

伝統文化を受け継ぐにあたって必要なことは、気持ちと行動力です。たくさんの方から受け取った思いを絶対に無駄にしないという強い気持ち。人に馬鹿にされても、最後までやりぬくまっすぐな気持ち。自分が良いと思うことをしっかり考え、すぐに行動にうつす力。簡単なことではないけれど、これをすることで人形浄瑠璃を後世へと受け継ぐことができるようになります。

初めは「楽しそうだな。人形を動かしてみたいな。」そんな気持ちではじめた人形浄瑠璃。しかし、今私の思いは大きく変わりました。これから、人形浄瑠璃を受け継いでいくために、さらに精進していきます。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

少子高齢化の影響で伝統文化の継承者が減っているため、できるだけたくさんの人に伝統文化の一つである人形浄瑠璃について知ってほしい！という思いからこの作文を書きました。自分の伝統文化に対する思いや決意を作文に書くことで、これから自分のするべきことを改めて考えることができ、今、自分にできることや必要なことが明確になりました。今回、代表に選ばれたことで、より一層自分の思いが強くなりました。これから、日々精進していきます。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 輝ける舞台まで

三重県　鈴鹿市立平田野中学校　３年

**松本　未空**

この春、新型コロナウイルスの感染のため学校が休校になり、私たちは授業も部活動もできなくなりました。学校が休みになると分かったのは、二年生もあと少しで終わるという時でした。テレビで「全国の学校が休校になる」と流れた瞬間、たくさんの友だちから連絡が来ました。誰もが動揺しているんだと感じました。私ももちろん驚いたし、嫌だなと思いました。私にとって正直、学校が休みになったことよりも、部活動がなくなってしまったことがとてもショックでした。

私の大きな夢は「だれからも応援される、日本を背負う陸上競技者になること」です。その大きな夢の一歩として、今年の夏、地元三重で行われる中体連の全国大会での優勝をめざしていました。しかし、すでに、この冬から部活動、遠征などが徐々に縮少されていきました。「それでも」と全国優勝を目指していました。昨年は八百メートルで全国四位になることができました。「二年生ながらよく頑張った」と多くの方から称讃のお声をいただき、とても嬉しかったのを覚えています。たくさんの人の声援で全国四位という、言葉では伝えきれないほど素敵で高い所に立つことができ、たくさんのことを学びました。だからこそ地元三重で全国優勝することを、全力で追いかけていました。

しかし、その夢、その時の私にとってとてつもなく大きな夢を叶えることができなくなりました。「全国大会中止」という報道が流れていました。信じられない報道、信じたくない報道、全国を目指している人達はみんな思ったことと思います。

そんな私たちを見て、「コロナだからしょうがない。」「高校があるんだからいいじゃないか。」などの言葉をかける人もいます。だけど「しょうがない」その言葉だけではおさえられません。中三での三重での全国大会は私にとって一生に一度だったのです。今年の夏はもう自分が思い描いていた夏にはならないんだと悟りました。その日から練習をしていても「何のために走っているんだろう。」と何回も何回も考えました。心の底では「次の舞台で輝くために。」と思っていても、すぐに立ち上がることは難しかったです。

そんな時に、私とあまり関わりのなかった先輩から一通のメールが来ました。その内容はとっても濃いものでした。「みくちゃんの走りを見ると自分も頑張れる、何度も何度もみくちゃんに助けられた。」など私にとってとても嬉しくて、心が救われるような内容でした。他にも、私を支えてくれ、勇気づけてくれるメールがたくさん届きました。本当に嬉しかったですし、もっと自分が頑張らないと、と改めて思いました。

この一年はこれからまだどうなっていくか想像も予想もできません。大切な人が急にいなくなるかもしれない、自分の挑戦する場が全てなくなるかもしれない。そんな中、前向きにただひたすら進むことはとても難しいです。しかし、今、戦ってくださっている医療関係の方々、星野源さんのように音楽で世界の人を元気づけようとしてくれている人たち。自分も苦しい中で、他の人のことを考え行動できることの素敵さに気づかされました。

私は、この期間であるからこそできること、学べることがあると信じ、前向きに自分なりに心と体を成長させていきたいと思いました。そして、この経験は「だれからも応援される日本を背負う陸上競技者になる」という私の大きな夢を叶えるために、きっと役立つ日が来ると思います。この休校を全国大会中止という事実を、少しでもプラスに変えられるように、私はこれからも努力し続けていきます。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

スポーツをしている子たちや大人たちに伝えたいです。この世代に生まれたからこそ失ったこと、また、得られたことが多くあるということを、今スポーツに打ち込んでいる子たちに伝えたいです。そして、私たち子どもだけが感じる苦痛、我慢、それに勝る頑張りというものを大人たちに伝えたいです。決して特別ではない私が、私の声で全力で届け、気づいてもらいたいと思います。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 二つの祖国の間で考える

京都府　京田辺市立培良中学校　２年

**白岩　璃奈**

大家好、我叫白岩璃奈。我的兴趣是美术、我很喜欢动漫。

皆さん、こんにちは。私の趣味は絵を描くことで、漫画とアニメが大好きな中学二年生です。

私は、日本人の父と中国人の母を両親に、この世に生を受けました。家庭では、中国語で会話をし、学校では日本語を話し、今日まで過ごしてきました。母の母国である中国と現在生活している日本の両方の文化に触れながら、豊かな子ども時代を過ごしているのです。

これが、私にとっては当たり前の毎日で、友人から、「これ中国語で何て言うの。」と尋ねられたり、母の手料理の餃子のおいしさを熱く語ったりしています。

しかし、最近、私の目に触れるニュースは、中国についての悪口という、私にとっては気分の良くない文字の羅列です。

想像や印象によって中国人全体が貶められることはいけないと感じ、腹立たしさで胸が張り裂けそうになります。私に正しいことを教えてくれ、優しく慈しんでくれる母と、母を産み育ててくれた中国を傷つけられたような気がしています。二つの祖国の間で、両国のすばらしさを実感しながら十三年間を生きてきた私にとって、最近のぎくしゃくした雰囲気は、心の片隅でずしりと重いしこりとして、少しずつ重みを増しています。

しかし、私は特別に中国が好きだという訳でもありません。その理由は、どちらの国にも、そこにしか分からない課題があり、様々な人達がそれに基く思いを抱えているからです。また、両国の祖先達が築いてきた歴史の中で、未解決のわだかまりがあることも事実だからです。しかし、自分の国を顧りみることなく、他国の批判をするのは、正しいやり方だとは思えません。二つの国を祖国とし、その間で今を生きている私だからこそ、どちらの側に寄ることなく、正しいと思うことを正々堂々と言いたいのです。

皆さん、一つの事象を取り上げてその国の人全てが悪いというのは間違っていると思います。間違いを見つけたら、そのままにせずに、正しい道に導くための手を差し伸べる優しさを持ってください。

理想を述べているなあと解っています。何かを口にするときには、理性よりも感情が先行してしまうこともよく理解しています。だからこそ、よい関係を築くための第一歩として、お互いの国の文化に理解を示すことが大切です。今まで知らなかったことを、質問して解決していくような努力をするうちに、互いの国の本当の姿が見えてくるはずです。

そんな風に考えると、歩み寄る第一歩は、とても簡単、身近な人とのコミュニケーションを大切にすることではないでしょうか。国と国という大きなもの同士の関係だけでなく、誰にでもできる私と誰かの小さなコミュニケーションで良いのです。

重大にとらえずに、明るく軽やかに身近なものとしてとらえてみるのです。例えば、中学校に入学した二つの小学校の生徒同士が、興味を持ちあい、仲良くなり、学校生活で切磋琢磨する。クラスが団結して行事に取り組み、同じ方向性を持って将来を夢見る。三年後、道は違っても、未来を見据えながら一緒に一歩を踏み出す。

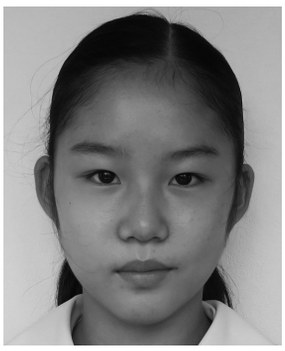
どうですか、皆さん。こんなことを想像しながら過ごすことは楽しいと思いませんか。私一人では力不足ですが、皆さんが少しでも共感し行動してくださったら、必ず実現します。

私達が大人になった頃には、世界中の誰もが、スムーズにコミュニケーションを取れるようになることを夢見ています。

ありがとうございました。謝謝。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

私は、この主張作文を一人でも多くの人に届けたいという思いで書き上げました。この世に生を受けたものはみんな、自分が望んだ環境の下で生まれたわけではありません。私は、二つの祖国を持ち、両国の文化に触れながら育ち、偏りのない公平なものの見方をする大切さを、今、身に染みて感じています。この主張作文を発表するために「どう表現すれば聴いてくれる方々の心にしっかりと届けられるか。」を考えながら練習しました。そうするうちに、単なる思いで終わらせるのではなく、「この思いを実現させたい。」そのために私という存在があるのだという確信に変わっていきました。社会人になったその日には、世界中の人と関わることのできるような仕事に就き、積極的に世界平和を訴えていきたいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 命

兵庫県　賢明女子学院中学校　２年
**鈴木　凜**

私が十一歳の時に弟が生まれ、そして十二歳で父を亡くしました。
一年間で命の誕生と命の終わりを目の当たりにし、命の重さについて色々と考えさせられました。
弟が生まれた時の事を今でも鮮明に覚えています。とても小さな体で、一生懸命泣いていました。
私はかわいくてずっと抱っこをしたり、オムツを替えてあげたり、ミルクを飲ませたり、とにかく弟のそばを離れませんでした。
人が誕生する事は奇跡なんだという事が書かれた本を少し読んだ事があります。
元気に生まれてくる赤ちゃんばかりではありません。お母さんのお腹の中で亡くなってしまう赤ちゃん、無事に生まれても大きな病気を持って生まれる赤ちゃんなどいます。
なので私も弟が生まれ、顔を見るまでは心配でした。
弟が生まれると、父は本当に嬉しそうでした。おじいちゃんやおばあちゃん、そして周りの人達が大喜びをしてくれました。
私が生まれた時も同じだったと聞きました。
みんなに大切に大切にされている命を大事にしようと思います。
弟の成長をみんなで見守り、小さな事でも出来るようになると、家族みんなで大喜びで弟の周りは幸せでいっぱいでした。
幸せいっぱいの毎日を送り、一年が経った頃、父が突然亡くなってしまいました。
その日は、いつも通り「いってきます。」と言って会社へ行き、いつも通り帰ってくるものだと思っていました。
突然の事で、私の頭の中は真っ白です。
とても悲しくて寂しくて、夢なのか現実なのか、心の中がグシャグシャでした。
そんな中、弟はいつも通りずっとニコニコ笑って、遊んだり悪さをしたりしていました。けれどお世話をしていると、気がまぎれました。
当たり前にすぐ会える、一緒にご飯が食べられる、お出掛けできると思っていた私は、当たり前に過ごせる日々がどれだけ幸せなのかを知りました。
そして父の気持ちを考えた時、弟の歩く姿を見たかっただろうな。弟の歯が生えた口を見たかっただろうな。もっと沢山抱っこをしてあげたかっただろうな。と、父も悔しかったと思います。
世の中には、自分で命を終わらせてしまう人達がいます。
生きたくても生きられない人がいることを忘れないでほしいです。
きっと、とても辛い事があったのでしょう。
けれど、まず誰かに話をしてみると、分かってくれる人が必ずいます。そして、嫌な場所から逃げてもいいのです。
一番大切なのは命です。
みんな生まれた事に意味があります。いらない命なんて一つもありません。
知らないうちに、人を傷付けてしまっている事もあります。
自分は冗談でも相手は嫌だったり、最近はネット上で会った事もなく、顔も知らない人に誹謗中傷を書き込み、相手を死に追いやるといったニュースもありました。
まず、「その言動は、自分の大切な人にも出来ますか？」と問いただす必要があります。
赤ちゃんやお年寄り、肌の白い人や黒い人、世界中の人々の命は平等です。
今、命について深い理解がない人も、生きていることに感謝ができるようになってもらいたいです。私もこれからの未来、尊い自分の命を大切にし、一度しかない人生を後悔なく歩んでいきます。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

コロナ禍の今、想像もしていなかった大変な時代を私たちは生きています。やりたい事も出来ない、会いたい人に会えないなど、思い通りに動けなくなりました。家にひきこもり、色々と考える時間が増え、人生を自分で終わらせる選択をしてしまう人が増えています。今を生きづらいと思っている人に私のメッセージを届けたいです。「とりあえず生きてみよう。」そう思ってもらえますように。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# さよならする確率

奈良県　智辯学園奈良カレッジ中学部　３年
**三輪　彩結**

人の命は重いって言うけど、私にはまだよく分かっていない。だって身近な人は普通に元気だし、物心つく前にしかお葬式に行ったことが無いし、ゲームではすぐにリスポーンしてくれるし。もしかしたらの話だけど、自分は高性能に作られているロボットなのかもしれない。いつか死んでしまうって言うのは、人生を有効に使わせるための嘘なのかもしれない。秘密にしているだけで、本当はゲームみたいに生き返ることが出来るのかもしれない。私は死んだことが無いし、死んだ後の世界とか、本当に人は死ぬのかとかが分からない。だから、人の命とかその重さとかを考えても全然分からない。

でも最近コロナのせいで、毎日暗いニュースばかり流れてくるから、もし仲の良い友達や大事な家族がいなくなっちゃったらと思うとゾッとする。最近見たネットニュースで得た情報だと、コロナにかかってしまう確率は三千分の一らしい。コロナにかかった人の中でも、帰らぬ人となる確率が三十分の一以上。三十人に一人が死亡していることになる。だけど世界の話ってだけで、日本だけにしたらもっと少ないはずだし、やっぱり命の重さとかはまだ、あんまり分からない。

なので、私はコロナ以外にも三つの確率について調べてみた。まず最初に交通事故で亡くなってしまう確率は、三万分の一。飛行機事故の場合だと、一億二千五百万分の一。事故にあったら怖いけど、確率はそこまで高い訳ではないので、恐怖心は全くない。次に自殺で死ぬ確率。日本は他の国と比べて自殺が多い方らしく、確率は五十分の一。五十人の内の一人。こう考えると、想像していたよりも多く、少し驚いてしまった。最後に隕石に当たって亡くなってしまう確率。調べてみたら百六十万分の一だった。こうみると全然低いじゃんって思っていたら、まさかの宝くじに当たる確率よりも高いと書いてあり、人は宝くじに当たるよりも隕石に当たる方がよりありえる話なんだと、ちょっと怖いなって思ってしまった。

私は他にも調べてみようと思い、色々な記事を見てみた。そして、ある記事を見てスクロールしていた指が止まってしまった。「突然ですが、人間の死ぬ確率は何パーセントでしょう？」「その答えは一〇〇パーセントです。」それを見た瞬間、私の心臓は他の人に聞こえるんじゃないかってくらいバクバクと鳴り出し、しばらく止まらなかった。

冷静になると、普通に当たり前な話で、こんなこと思いたくないけど、人は遅かれ早かれいずれは死んでしまう。ロボットな訳ないし、ゲームの世界って訳でもない。そんな事普通に考えてありえない。人は一〇〇パーセント死んでしまう。そりゃそうなんだけど、分かってはいたんだけど、何故だか悲しい気持ちになってしまい、人の命は尊い物なんだと実感した。命の重さって言うのも、少し理解出来た気がする。

生きているものにとって一分一秒が本当に大事なもので、有難く思うべきことなんだって色々なことを調べることによって分かった。今近くにいる人に出会えなかったかもしれない。もしかしたら自分は存在していなかったかもしれない。だからもっと一日一日を大事にして、「せっかく貰った命なんだから絶対に無駄にしたくない。」「後悔なんてしたくない。」そう思って生きていきたい。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

コロナが流行っている中で、休校になってしまったり、感染者の人数が日に日に多くなったりしていて、もし家族がコロナにかかってしまったらどうしようと思ったことがきっかけでした。それから、私はコロナにかかってしまう確率などいくつかのことを調べました。その中で、心に響き、頭に残った内容があり、この事を作文を通して、伝えたいと思ったので、この作文を書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 伝えたいこの文化

和歌山県　有田市立箕島中学校　２年
**楠瀬　心美**

初めて見た日本画、それは、私が通う絵画教室の先生の作品だった。そこに使われていた「青」色の深さに、私は魅了されたー。

私は幼い頃から絵を描くことが好きで、小学４年生の時に母の勧めで絵を習い始めた。水彩絵の具やクレパスで人物や風景などを描いていたが中学生になり、先生の勧めで日本画を教わることになった。

日本画とは、紙や絹に墨、岩絵の具などの天然絵の具を用い、膠を接着剤として描く技法が用いられた日本の伝統的な絵画である。有名な作品として、葛飾北斎の「富嶽三十六景」、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」などがあり、どれも私達が一度は目にしたことのある作品だ。私が日本画を始める前に、先生は私に自分の作品を見せてくださった。それは、舞妓さんが描かれていて青の美しい着物を身にまとい、たたずんでいた。その作品の色使いはシンプルだが、一つ一つの色に深みがあり、細やかな筆使いにより、舞妓さんの奥ゆかしさがよく表現されているように思えた。洋画や水彩画とはまた違う魅力に私は、心を奪われてしまったのだ。

そして、いよいよ私も初めての日本画に挑戦するのだった。すぐにデッサンに入らず、紙を作る作業から始まった。うすい和紙を何枚も重ね、貼り合わせていった。紙作りが終われば下書きに入る。消しゴムを使うと和紙が毛羽立つので、描き間違いは出来ない。だからとても慎重に描いていった。そして色をつけていく作業にうつる。岩絵の具を砕き、膠を混ぜ、一つ一つの色を作っていき、色をつけていった。私がとても苦労したところは、細い筆で一本一本ていねいに髪の毛を描いていくところや、指の関節の曲がり具合を正しく描いていくところだった。私は先生に教わりながら、何度も何度も色を重ね、深みを出し、４カ月後にようやく作品を仕上げることが出来た。私が初めて描いた日本画は、自分では満足のいく作品だったが、まだまだ未熟で拙いものだった。でも、私は嬉しかった。先生に教わりながらも、初めて自分で描き終えた喜びに満ち溢れていた。

今回、日本画にふれて、なんてこんなにも日本の文化は素晴らしいのだろうと気付き、もっと日本画を学びたいと思った。あの葛飾北斎の絵は、海外でも人気が高い。なぜ、こんなにも多くの人々から愛されているのか、私は考えた。彼が作る色の濃淡や線の動きは、大胆であるが、静けさを感じとれる。それは彼が育ったこの日本の風土から生み出されたものを描いたのだ。そういったものに多くの人々が引きつけられるのではないだろうか。

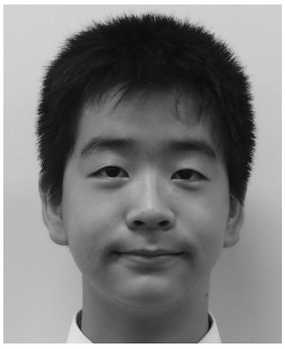
日本画だけではない。日本文化には、沢山の後世に残していきたい伝統文化がある。しかし、それを伝えていく人材が少なくなってきていることで、受け継がれていくことが難しくなってきている文化もある。

私の夢は、日本画家、あるいは絵に関連する仕事に携わることだ。私は、世界の人々にもっとこの日本の文化を知ってもらいたい。

それと同時に私達若者にも日本の伝統文化が浸透していくことで、興味を持つ人が増え、受け継いでいく人が増えていってほしい。私達に出来ることは、まず「知る」ことから。その文化にどのような歴史があり、どのように現代に受け継がれ、変遷していったのかを知ること。そして「学ぶ」こと。学ぶことにより、理解が深まり自分自身が日本の文化を守る後継者になると私は考える。デジタル化が進む現代、失われつつある日本人の神髄を見つけてほしい。今こそー。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

私の夢は、絵に関する仕事に携わることです。たとえば、画家や、イラストレーターなどです。まだ具体的には決めていませんが、幼い頃からずっと変わらず持ち続けていた夢です。まず、自分の夢に向かって何が必要かを考え、それに向けて行動していきます。そして、日本人としてのほこりを持って世界の人々と絵を通して繋がることができればと思います。これから沢山の日本の絵や世界の絵を見て自分が描きたいを絵を見つけていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# あいさつ

岡山県　岡山県立倉敷天城中学校　３年
**國府　大晴**

ある日、僕がネットのニュースを見ていると、「知らない人にあいさつをするのは危険だからやめるべきだ」という内容の記事が出てきました。しかし、僕は知らない人にでもあいさつをすることは大切だと思います。僕は、通りすがりにあいさつをしただけでおそってくる人はまずいないと思います。それに知らない人にあいさつをすることで学ぶこともたくさんあると思うからです。

僕にはいくつかの体験があります。まず一つ目は、僕が近所の川に釣りに行ったときのことです。僕が糸を垂らして魚を待っていると横を知らないおじさんが通ったのであいさつをしました。すると、そのおじさんはあいさつを返してくれた後、子供の頃の自分の話を熱心に語ってくださいました。その話は僕にとってとても楽しく興味深い内容でした。これは、発端であるあいさつがなければ聞くことのできなかった、とても貴重な話です。自分の体験したことのない出来事を、体験した本人が本人の口で話してくれること、これほどに人に伝わりやすい会話はないと思います。「あいさつ」という小さなきっかけは、昔のことを今に伝えることにもつながっていくのです。

二つ目は、県内の公園に野鳥の写真を撮りに行ったときのことです。野鳥をさがして散歩していると、向こうから歩いてくるおじいさんが見えました。よく見ると手にはカメラを持っていました。

「こんにちは、何か撮れましたか。」

と、僕が聞くと、そのおじいさんはカメラの画面を僕に見せてくれました。そこには、僕が今まで見たことのない鳥が写っていました。ほほのあたりが濃い桃色でとてもきれいでした。

「これは、ウソという小鳥だよ。今日はまだこれしか撮れていないんだよ。」

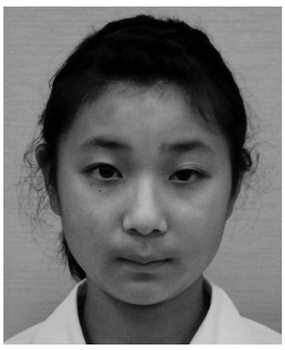
と、おじいさんは丁寧に教えてくれました。その後も、僕はそのおじいさんとその公園で見られるめずらしい鳥のことや、いつも散歩しているのかなど、十分ほど立ち話をしました。この出来事も、僕がたった一言のあいさつをしなければできなかった貴重な体験です。僕はこの「ウソ」という名前の鳥を忘れることはないでしょう。

最後は、日々の登下校のあいさつです。みなさんは、近所の方々から「お帰り」と声をかけられたことはないでしょうか。そのときに僕は「ただいま」と返します。「今日は暑いね。」と声をかけられれば、「そうですね。」などといった言葉を返します。これらのコミュニケーションは一瞬です。しかし、その一瞬のつみ重ねこそが、地域の方々との関係を確かにしていくのです。もし、何かに困って助けを呼びたいとき、何年もあいさつをしたり返したりする仲だと、頼りやすさも全く違うと思います。そして何より、周りに気軽に話せる人がいる環境こそが日々のあいさつが作り出す最大の利点であると思うのです。

このようにたった一言のあいさつで得られるものは大きいです。ほんのわずかなリスクは何にでもついていると思います。しかし、そんなものをいちいち気にしていれば、たった一度きりの人生で得られるものは、どれだけ減ってしまうのでしょうか。たくさんの人の考え方や体験を直に感じることができたり、近所の方々との関係を築けたり、そんなことを一言でできてしまうあいさつのパワーは計り知れないものがあります。この機に、今まであいさつをしていなかった人は、まず周りの人からあいさつをしてみてはどうでしょうか。そうすれば、新たな発見があるかもしれません。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

僕は、この主張をあいさつというものを軽視している人、もしくは、はずかしくてできない人に届けたいです。僕が通っていた小学校では、毎朝あいさつ運動というものがありました。その場では元気な様々なあいさつがとび交います。その集団の中では、ふだん大人しい子も元気いっぱいであいさつをします。あいさつによって、人との距離はぐっと縮まります。よいことがたくさんあるあいさつについて、多くの人に考えてほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# ほたるの里の絆

広島県　広島県立広島中学校　２年
**上野　ちひろ**

私の住む「竹原市仁賀町」という小さな町は、ホタルが夏のおとずれを教え、秋には町一面が黄金色の稲につつまれる。そんな町です。誰かが困っていると、この町の人は必ず「大丈夫？」
と声をかけてくれます。それはきっと、皆が人と人との関わりを大切にしなければできないことだと私は思います。

この町の学校では毎年たくさんの行事が行われます。普通なら学校の行事の主役は児童…なのですが、この町はちがいます。運動会や学習発表会、神明ばやしやもちつきなどは、いつも地域のおじいさんやおばあさんも一緒で、町のみんなが主役です。だから子供たちは皆地域の人ととっても仲が良いです。地域の人達も、私たちに会うと、
「この前の学芸会よかったよ。」
と元気が出る言葉をかけてくれます。

お正月になると、おばあさんたちは年賀状を送ってくれます。そこには「あなたたちの太鼓を聴いて涙が出ました。日本一の和太鼓です」と書かれていました。まるで本当の祖父母みたいに接してくれて、私たちの太鼓でこんなにも喜んでくれて、嬉しくて、嬉しくて、思わず頬が緩みました。

私が６年生の年の夏、この町も西日本豪雨災害の被害にあった町の一つでした。山のいたるところがくずれ落ち、茶色い地面がむき出しに。私の家も水につかり泥だらけです。毎日シャベルを手に泥のかき出し作業に明け暮れていた頃、
「来たよー。」
という声がしました。

誰だろうと思いつつ声のする方に行くと、そこにはシャベル片手に作業着姿の近所の人達が立っていました。
「大変なときこそ協力しなきゃ。」
と言って、皆で泥のかき出し作業を手伝ってくれました。きっと皆だって大変なはずです。でも、手伝ってくれた友達のお母さんは、父や母がお礼を言うと、
「困ったときはお互い様よ。」
と笑顔で返してくれました。しばらくすると、おばあさんが
「差し入れ持ってきたよ。」
と両手いっぱいにご飯を届けてくれました。私は胸が熱くなりました。困ったときはお互いに助け合う。よく聞くことだけど、意外と難しいことで、自分を優先させることだってできるのに、それでも助け合うことが自然とできて、この町の人にとってはそれがあたりまえになっている。みんなの優しさと温かさで、私の胸はいっぱいになりました。

この町は、とても小さいし、決して便利がいいわけではありません。でも、だからこそ町の人との関わりを大切にし、お互いに助け合うことができるんだと思います。しかし、この町では今、過疎化が進み、仕事などの関係でこの町から出て行く人も少なくありません。それだけでなく、少子高齢化が急進し、小学校の児童は全員で 17 人。そのうちの半分は、通学区域に関係なく、市町村内のどこからでも入学を認めるという「特認校制度」で別の町から来ている。というのが町の現状です。このままだと、私が大人になった時、地域全体で運動会や発表会ができないかもしれません。それは本当にさみしいです。

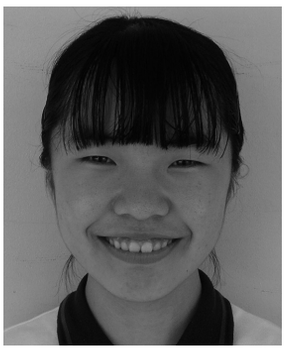
この町には昔から歌われている歌があります。「心をあわせて ほら手をつなぎ 人の心のやさしさや 愛を伝える ほたるの里をぼくらみんなで守っていこうよ」日本では今、「ほたるの里」と呼ばれているような町が少なくなっていると言われています。

昔から変わることのない人の温かさと、活気にあふれるこの町。だからこそ、次世代を担う私たちが、この町の誇りと未来を守っていかなければならないと思うのです。

50 年先も 100 年先も「この町のいい所は町の人みんなが温かいところ」と自信をもって言えるように。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

私の住む町は、少子高齢化や過疎化が進み、今では「限界集落」と呼ばれる町の一つとなっています。小さくて、不便も多いこの町。でも、その分、町の人みんなが温かくて、一緒にいるとやさしい気持ちになれる。自然と笑顔が生まれることがこの町の何よりの魅力だと思います。私が大好きなこの町、日本にはこのような町がまだまだ多く存在していることを一人でも多くの人に知ってほしくてこの作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 私にだってできたのだから

山口県　萩市立萩東中学校　3 年
**後藤　遙香**

あなたには、こんなことはありませんか。悩んでいて、一歩も動けない。辛くて、怖くて、どこからも光が差し込んでこない。暗闇に一人でうずくまっているようなこと。

私の小学校は少人数で、何をするにも、そばには友達がいて、やってみたいことを素直に言える環境で過ごしてきました。しかし、中学校生活は、そう簡単にはいきませんでした。三つの小学校から集まった、大きな集団。そんな中で起こった出来事。それは、私が私であることを許さない、数々の冷たい行為でした。小学校の時のようにやりたいことに挑戦していた私は、不意に腕をつねられたり、陰口を言われたりするようになったのです。

皆さんは、考えたことがありますか。同じ学年、同じクラスの中で、立場の違いを感じる苦しみを。同じ学年の中で、目立っても何も言われない人がいます。彼らは「陽キャ」と呼ばれ、学年の主役のような存在です。運動ができ、見た目も良く、言いたいことも臆することなく言うことができます。その反対に、「陰キャ」と呼ばれる人は、いつも脇役で、目立つことが許されない雰囲気でした。

私が所属していた部活にも、同学年なのに気を使わなければいけない空気が生まれていました。「陽キャ」となった友達の態度は次第に変わり、私も変わっていきました。

「もし逆らったら、どうなるんだろう。」

そんなことばかりが頭をよぎり、してはいけないことをしたり、嫌ないじられ方をしても笑って過ごしたりするようになりました。そんなときのことです。

「転部すればいいじゃん。」

友達からのなにげない一言が、前を向くのを諦めていた私の心を動かしたのです。

「このままの私でいたくない。」

先生の助言により私は再出発を決意しました。

次の一歩は、生徒会執行部としての活動でした。そんな私に、相変わらず「陰キャ」としての冷たい扱いや陰口があり、何もしない方が楽かと思う時もありました。けれども、何度も落ち込みそうになる私の目の前には、学校を変えるために、学年や性別を超え、なりふり構わず一生懸命に行動する先輩たちがいました。全校の難しい課題にもひるむことなく、前向きに活動する先輩たちがいたのです。先輩たちと行動を共にするうちに、私は気が付きました。私自身が「陽キャ」や「陰キャ」といった「作られた枠組み」に縛られ、動けなくなっていたということに。

「私にもできることがあるかもしれない。」

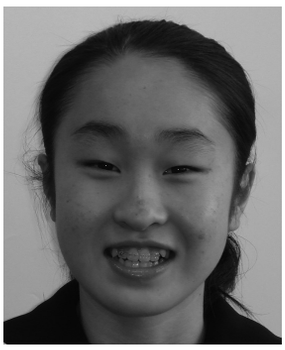
私の世界は大きく変わり始めました。

今年度の生徒会のテーマは、挨拶の向上です。挨拶のあふれる学校にしたい。これが今年度の私たちの挑戦です。執行部でアイデアを出し合って考えたのが、「止まって挨拶する止まペコ、座っていても立ち上がって挨拶する立ちペコ、人前を横切る時に黙礼する前ペコ」です。これを広めるため、生徒集会での劇を企画しました。ところが、新型コロナウィルスの感染拡大予防のため、全校での集会はできません。そこで、学年を分け、3 回にわたって同じ劇を繰り返しました。私たちの思いを受け、今では挨拶を進んで行う、挨拶マスターも現れるようになりました。「3 ペコ」が私たちの合言葉です。私たちはきっと挨拶革命を起こしてみせます。

応援してくれる人がいるから。悩んでいる人がいるから。私は立ち止まるわけにはいきません。「作られた枠組み」で苦しんでいる人に。想いを殺し、動けなくなっている人に。この思いを届け、その心に温かいともしびが生まれることを願います。人と人の間を隔てる「枠組み」など、もともとありはしないのです。一人ひとりの人間がいて、一人ひとりに揺れ動く心があるのです。諦めなければ、きっとできる。私にだってできたのだから。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

私は、「陽キャ」や「陰キャ」といった「作られた枠組み」に縛られる苦しさを経験しました。しかし、先生や友達など、たくさんの人の支えがあり、今では、生徒会副会長として、よりよい学校生活を目指しています。当時の私のように、今も悩みを抱え、苦しんでいる人や動けなくなっている人がいると思います。苦しさや辛さを経験した私だからこそできることもあると思うので、悩んでいる人に寄り添い、明るい学校をつくっていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 力強く生きる

徳島県　海陽町立宍喰中学校　２年

**戎田　真梨子**

「私の首のように茎が簡単に折れてしまった。しかし菜の花はそこから芽を出し、花を咲かせた。私もこの花と同じ水を飲んでいる。同じ光を受けている。強い茎になろう」。道徳の時間、私はこの１編の詩と出会いました。『新編　風の旅』の中に掲載されている折れた菜の花という詩です。特に最後の「強い茎になろう」の言葉に感動しました。詩を書いた作者が星野富弘さんであることも私はこの時初めて知りました。星野さんの生い立ちを聞き、この詩を改めて読み返した時、星野さんは自分を菜の花に重ね、困難なことがあっても自分の花を、自分にしか咲かすことのできない花を咲かせようと思ったのだと感じました。なんて強い人なのだろう、なんて優しく温かい言葉や絵を描く人なのだろう。同時に私は、強く生きている身近な人を思い浮かべていました。私の父です。

父は船員で、仕事のため家を留守にすることがほとんどでした。家族のために一生懸命働いていました。幼い頃、父と遊んだ記憶があまりなく、正直友達のお父さんを見ると、うらやましいと思う気持ちがありました。ところが、父は船の事故で足を失い、障がい者となりました。私がまだ小さかった時のことです。事故とはいえ、突然足を失い、今までの生活が当たり前でなくなる現実に、言葉では言い表すことのできない思いをしたと想像します。これまでに私自身も、つらいなぁと思う経験を何度もしてきました。父は走ることや動いて遊ぶということはできないので、友達がお父さんと一緒に遊んでいる姿を見ると、父と思いっきり遊べなくて残念だと思うことがありました。また、家族と出かけた時、人の視線を強く感じることがよくあります。買い物に行き、障がい者スペースに駐車する時です。強い視線を感じます。父は車椅子に乗っていたり、義足を付けて歩いていたりします。この時も強い視線を感じます。私はどうしてジロジロ見られるのだろうと思ってきました。何一つ悪いことはしていません。なぜ、という疑問しかありません。きっと父もこのような視線はつらいだろうと思います。けれども父はいつも堂々としています。だから私はこのような父の姿を見て、ジロジロ見られることに対して少しずつ恥ずかしさがなくなってきました。つらいなぁという気持ちも薄れてきました。エレベーターでは車椅子の父を待ってくれる人がいます。ドアを開けて待ってくれる人もいます。心優しい人がたくさんいることにも気づきました。このような時、私はとても嬉しい気持ちになります。冷たい視線、心ない視線は人の気持ちを悲しくさせます。しかし、ちょっとした思いやりや優しさで人を温かな気持ちにすることもできます。

このような経験から、私は困っている人がいれば声をかけ、さりげなく手助けができる人になりたいと思うようになりました。生まれつき障がいがある人も、父や星野さんのように事故や怪我で障がいをおった人も、誰もがその人の個性や能力に合わせた、その人らしい生活を送れることが大切だと思います。確かに健康な人よりもできないことや不便に感じていることは多いかもしれません。しかし、父は工夫しながら力強く日常生活を送っています。星野さんは周りの人の助けを借りながら自分が動かせる身体の最大限の部分を生かし、強く生きています。お互いの苦手なところを補い合い、支え合いながら、自分を生かして生きていく、このような社会を築いていくことが私の理想です。

父も星野さんも可能な限り、でこぼこ道を迂回せずにこれまでの人生を自分のペースで歩んできました。きっと星野さんが言う心の中に授かっている鈴を鳴らし続けてきたと思います。私はこの２人の生き方に学び、自分にできる最大限の努力で力強く自分の信じる道を歩んでいきたいです。そして、「チリン、チリン」と優しい鈴の音を心に響かせたいと思います。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

道徳の時間に星野富弘さんの詩画と出会い、星野さんが不慮の事故で障がい者となったことを知りました。私の父は船の事故で足を失い、障がい者となりました。父の生き方と星野さんの生き方が私の中で重なりました。これまでに父も私も、つらい経験をしてきました。それだけではなく、周りの人の優しさにも触れてきました。苦手なところを補い合いながら自分らしく生きていける社会になってほしい、自分自身も最大限の努力で力強く信じる道を歩んでいきたいと思ったのがこの作品を書いたきっかけです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 地域との繋がり

香川県　三豊市立三野津中学校　３年
**髙橋　華**

私は中学生になってから月に一度、地域のスポーツ教室に参加している。この教室では、さまざまな障害のある幅広い年齢層の人が集まってスポーツを楽しんでいる。

私がスポーツ教室に参加することを楽しみにしているのは、みんなが笑顔で楽しい時間を過ごしているからだ。さまざまな障害のある人みんなが一つの種目にチャレンジするのだが、そこには自分の力を発揮して楽しめるようにみんなのことを考えたアイデアやルールがある。このアイデアやルールは、リハビリセンターの指導員さんや障害者スポーツ指導員さん、そして地域のボランティアの人達が考えてくれている。個人の能力などに合わせてチーム分けされ、分かれてスポーツをしていても、みんなが声を出し応援して、一緒に喜んだり、悔しがったりして、とても一体感がある。そのあたたかさが私は大好きだ。

スポーツ教室に参加し始めて、

「体を動かすことが好きなら卓球教室においで。熱心に指導してくれるから楽しいよ。」

と声をかけてもらい、卓球教室に通い始めた。週に一、二回の練習だが、先生が私の体調を見ながらいつも丁寧に指導してくれる。

通い始めて半年後、市が主催している障害者卓球大会に出場した。運動制限のある私がまさかスポーツの大会に参加することができるなんて、考えたこともなかったし、夢みたいだった。リーグ戦は、どの試合も緊張して頭が真っ白になり、あっという間に負けてしまった。もちろん悔しい気持ちはあったが、部活動で毎日頑張っているみんなもこんなに緊張したり、悔しい気持ちになっていたりするのかなと思うと、みんなに少し近づけたようで嬉しくも思った。

それから、次の大会では一試合でも勝てるよう練習に通った。何度も同じミスをしたり、教えてもらったことが上手くできなかったりしたが、自分の体調に合わせたペースで練習を続けた。

昨年の大会ではリーグ戦を突破し、決勝トーナメントに進んだ。そこでは一回戦で負けてしまったが、スポーツ教室に参加している人や指導員さん、そして卓球教室の先生、たくさんの人が応援してくれて力をもらった。試合は負けてしまったが、とても充実していて笑顔でみんなにお礼を言うことができた。

こうして、私はスポーツを通して地域の人達と繋がり、活動することができるようになった。何かを通して地域と繋がることは、明るい社会づくりに繋がっているのではないかと思う。

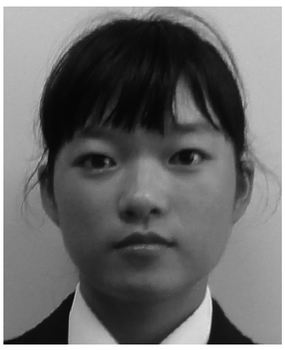
障害者に対する差別や虐待のニュースを目にすることがある。健常者にとってはできて当たり前のことが、障害があることでできなかったり、時間がかかってしまったりすることがある。誰にでもできないことや苦手なことはある。障害があるということは、できないことが人より少し多いだけだと私は思う。できないことが少し多い人を言葉や行動で支えることで力になり、人と人が繋がっていくんだと思う。

連絡帳に毎日たくさんのコメントを書いてくれる先生、体育の授業中に何度も声をかけ励ましてくれる先生、「大丈夫？」と声をかけてくれる友達。私は毎日たくさんの力をもらって色々なことにチャレンジすることができている。その力は、迷っている時や悩んでいる時にそっと背中を押してくれる強さ、辛い時に一緒に立ち止まってくれるあたたかさを持っている。

今は、力をもらって支えてもらってばかりだが、私もスポーツやボランティアを通して、小さなことでも自分にできることを見つけて地域との繋がりを大切にしていきたい。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

中学生になってスポーツ教室に参加し始め、地域の人たちとの繋がりができました。私は、周りにいる人たちの温かい気持ちから力をもらい、できないと思っていたことにも挑戦することができています。人と人が繋がって支え合うことで優しくなれたり、誰かの力になれたりすることを伝えたいと思いました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# コロナと向き合う

愛媛県　高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山中学校　2年

**山本　彩羽**

「何なん！」

行き場のない怒りと悲しみが私を襲いました。全国中学校総合体育大会の中止をはじめとするあらゆる大会の中止のニュース…。新型コロナウイルス感染症という未知の病気が世界中に流行し、予防の対策がとられました。

その一環である、大会中止のニュースを見るたび、やり場のない気持ちがこみ上げました。

私はソフトテニス部に在籍しています。実は、三月に全国大会出場が決まっており、一生懸命練習をしていました。ペアの人と息も合い、これならいけると思っていた矢先。全国の学校が臨時休業となりました。生徒は自宅待機。大会どころではなくなりました。しかし、次の「県総体出場」を目標にトレーニングを積み重ねました。

そこでの総体中止。私は二年生だから「来年こそ」という気持ちがありますが、中学二年生の総体は、一回しかありません。ましてや三年生の気持ちを考えると、「今までしたことは無駄じゃないから」という気休めの言葉など言えるはずもありません。何も浮かばない自分が歯がゆく、悔しい気持ちでいっぱいになります。

そんな中、学校が再開され、部活動をしてもいいという許可が出ました。が、部活動の取組は一変しました。まず、マスクをつけて準備しないといけません。そうすると、マスクの中がこもってしまい、息が苦しくなります。次に、キープディスタンスのため、近くでプレーを指摘できません。かわいい後輩に教えてあげたいことがたくさんあります。しかし、近づけないので体を使ってプレーを見せながら教えられません。遠くから大きな声で伝えるので、きつく聞こえていないか心配になります。キープディスタンスを守りながら部活動をする難しさを毎日感じています。

しかし、新型コロナウイルス感染症が教えてくれたこともあります。それは、人への感謝です。例えば、ペアを組んでくれている人。ペアの子とはしょっちゅうけんかもしていましたが、もうけんかをすることはありません。今はこの人と一試合でも多く試合をしたい。ペアのありがたみが分かってきました。そして、学校で決めたルール、マスクの着用、手を洗う、大声で叫ばない、キープディスタンスなどを意識して守ってくれる人。自分が感染症にかからないように意識しているのはもちろんですが、それよりも、自分たちの大切な人たちがかかるのが嫌だと思って行動しています。授業の話合いでも、飛沫が飛ばないように向きを考えたり、給食配膳中は極力無言で配ったりしています。こういうみんなの優しさに気付くとうれしくなります。私はみんなが大好きなことに気が付きました。照れずにみんなが大好きなことを伝えたいと思います。

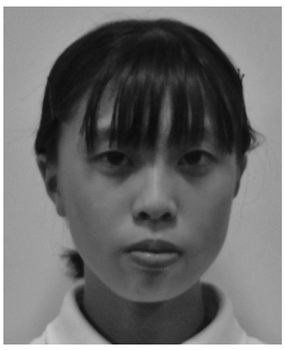
暗いニュース、気が滅入るニュースが毎日目につきますが、私たちは今こそ新型コロナウイルス感染症と向き合うことが必要ではないでしょうか。「コロナのせいで〇〇できない」と嘆くのではなく、「では、何ができるのか」と視点を変えていく必要があります。

先日、運動会が行われました。これも先生方、保護者の人、地域の人が安全対策を考えてくれ実施できました。競技の一つである中学生と小学生が合同で行う応援合戦。コロナ禍の中で、どこまでできるか徹底的にチームで話し合いました。少ない練習時間、安全にできる応援内容など厳しい条件はありましたが、むしろチームの気持ちはいっそう団結し、この挑戦を楽しむことができました。本番では、離れた距離でも運動会に響き渡るエールの声。終わった瞬間、見ていた地域の方の拍手や「すごい」の声、篠山の皆さんと一体になった瞬間を味わいました。最優秀賞もチームの力で取ることができました。

皆さん、コロナ禍でもできることはあります。中学校生活最後の三年生へ、私たちを見ていてくださる全ての人へ、精一杯の感謝を込めてエールを贈ります。フレー、フレー、みんな！

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

コロナウィルス感染症予防のために、活動が制限されていると感じている全ての人に届けたいです。「コロナウィルスのせいで」とやりたいことをあきらめるのではなく、「何ができるか」に視点を変えてお互いに取り組んでいくことで、新しい道が開けてくると思いますし、多くの方の協力も得られると思います。そして、この主張作文大会を通して、このコロナ禍の中で私たちが繋がり、助け合うことこそ、今、必要だと思います。私たち篠山中生も少しでも何かの役に立てたらいいと考えています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# すぐ傍にある人権問題

高知県　中土佐町立久礼中学校　２年
**中平　彩心**

みなさんは、「ティックトック」や「ユーチューブ」といったスマートフォンの動画アプリをご存じですか。私は、そのようなアプリで動画を見るとき、よくコメント欄を見ます。その動画に対して、共感の言葉や驚きの言葉、励ましの言葉などたくさんの楽しいコメントがあふれています。しかし、私はときどき心無いコメントを目にすることがあります。例えば、「ぶさいく」や「キモイ」、「チビ」「デブ」などといった投稿者の個性を侮辱するようなコメントであったり、「下手くそ」や「できてない」などといった投稿内容をバカにするようなコメントであったり様々です。最初にそんなコメントを目にしたとき、私は次のような思いを抱きました。

「なんでこんなこと書き込むがやろう。心の中で悪く思うのはその人の勝手やけど、わざわざそれをたくさんの人が目にするコメント欄に書き込む必要はないはずやのに・・・」

書かれた人が嫌な思いをするのは分かっているはずなのに、なぜこのような悪質なコメントは後を絶たないのでしょうか。みなさんも、このような思いを抱いたことはありませんか。

今、この世界は私達のような中学生が、また、私達よりも小さな子供達がスマートフォンという便利でもあり、恐ろしくもある機械を手にするようになっています。よくニュースなどで聞く、インターネット上での誹謗中傷などというのは今まさに、私達のすぐ目の前にあります。

私は、今までニュースなどでたくさん、
「近年ＳＮＳで誹謗中傷が激しさを増している」という報道を聞いてきました。でも、「ＳＮＳって言っても私は、インスタとかツイッターとかやってないし。」と「ＳＮＳ」という言葉にあまりピンと来ず、そこまで関心がありませんでした。その一方で、学校などでは関心があるふりをしてきました。特別授業で、「ＳＮＳの怖さ」について学習をした時も「ＳＮＳについて作文を書きなさい」と課題に出されたときも、ニュースで報道されていた内容を頭の中でかき集め、並び変えて、乗り切っていました。しかし、中学生になり、自分のスマートフォンを持ち、動画などをよく見るようになって、最近やっと本当の意味でのＳＮＳについて分かりはじめた気がします。

例えば、投稿内容の漢字を少し間違えただけで多くの人から批判されている状況を目にしました。また、不特定多数の人にＬＩＮＥのグループを作る勧誘文句を見たときは、自分だけで無く、自分の持っている家族の情報なども流してしまう危険性を肌で感じました。

「ＳＮＳ」は、そんなに遠く、難しい言葉ではないのです。今、みなさんの手にしているスマートフォン、タブレット、パソコンそのものが直接関わっています。これから、自分が悪質なコメントを書き込んでしまわないように、そして友達にさせてしまわないように、今までよりも、よりいっそうインターネットへの理解を深め、これをすると相手がどう思うのかを考えていけるように努力することが大切なのだと思います。

現代では、ＳＮＳなど様々なツールを使って、たくさんの人とつながれたり、すぐに友達と連絡を取れたりします。しかし、便利になる反面、相手がどんなことを考えているかを読み取る材料となる雰囲気や声の明るさ、表情などが一切伝わらず、誤解を招くこともあります。また、自分の顔が見えないことをいいことに、人の気持ちを考えない発言も増えるでしょう。

どんどん便利になっていく世の中ですが、その「便利」の裏側を読み取り、問題に向き合っていくことが大切なのだと今回改めてＳＮＳについて考えて、強く思いました。今こそ、今までよりもＳＮＳについて深く考え直していくべきなのです。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

今まで私はＳＮＳについて考えているふりをしてきました。しかし、中学生になり、インターネットの現状を自分の目で見て、肌で感じて、やっと「私も人事ではないのだ」と気づきました。私はこの主張を、今までの私のようにＳＮＳについて分かったふりをしている人や、インターネット上で人を傷つけてしまっている人に届けたいと思います。そして、その人たちが、ＳＮＳも使うことで身の周りで何が起きているのか考える「きっかけ」になればと思っています。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 差別について少し考えてみて下さい

福岡県　福岡県立宗像中学校　１年

**ミラー　綺芽**

みなさんはジョージ・フロイドさんの名前をご存じですか？アメリカ合衆国ミネソタ州で、警察官に８分46秒もの間、首を膝で押さえつけられ亡くなった方の名前です。彼は黒人でした。今、全米だけでなく、世界中でこの事件に抗議するデモと、「Black lives matter.」黒人の命は重要だ、というムーブメントが広がっています。

このニュースを聞いて、みなさんはどのように感じましたか？「ひどい」「かわいそう」「信じられない」「日本ではありえない」といった感想を持つ方が多いのではないでしょうか。

でも、本当に日本ではありえないのでしょうか。日本に差別は存在しないのでしょうか。口に出さなくても、目に見えなくても、やはり日本にも差別は存在するのです。

例を挙げましょう。私の父はバハマ人です。バハマといっても、どこか分からない方が多いと思いますが、パイレーツオブカリビアンの舞台になった場所、昨年ハリケーンで大きな被害を受けた場所といえば分かっていただけるでしょうか。父は黒人です。昨年までALTをしていました。福岡市、北九州市、そして宗像市の小中学校で英語を教えていました。そんな父が仕事の帰りがけ駅に向かって歩いていると、警察官による職務質問を受けました。パトカーで通り過ぎた後、引き返してまで職質をされたそうです。理由を尋ねると、「あやしいと感じた人には声をかける。」と言われたそうです。学校の先生です。まだ日も暮れない夕方にです。日本に来てから10年の間に３回もこのようなことが起きています。黒人だからか、と尋ねると否定されるばかりで、父のことを「あやしい」と感じた理由は教えてもらえなかったそうです。日本に住んでいる父の黒人の友達も何度も職質を受けています。私の母は日本人ですが、一度もそのような経験は無いそうです。また、父は電車に乗っていると、隣の席は避けられるとも言っていました。

この違いはなんでしょうか。外国人だからですか？黒人だからですか？だから先入観であやしく見えるのでしょうか。私も半分黒人の血が入っています。みなさんにとって私はあやしく見えますか？犯罪をおかしそうに見えますか？このように見た目だけで判断されることがとても悲しく、悔しい気持ちがします。

私は差別は無知から来るものだと思います。人は知らないことに対して警戒心を持ち、距離をとります。もし、周りに自分と違う人がいたら、その人について知ってみて下さい。それは、見た目だけでなく考え方もそうです。その人について知ることで、自分との違いがとても小さなものだと感じるはずです。自分と異なるもの、人について学習しましょう。友達になりましょう。そしてその人を見かけだけでなく、同じ「人間」として見ると、無知からくる恐怖心も無くなるはずです。この小さな努力を、まずは私から、そして私の周りの人達から始めていきたいと思います。

そして、父がいつも言っているように「Treat people with manners and respect.」相手が社長であろうと、ホームレスであろうと、黒人であろうと、ラティーノであろうと、敬意とマナーをもって、お互いに接することのできる社会ができればいいなと思います。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

アメリカで起こった、黒人男性が警察官に押さえつけられて死亡した事件を母が教えてくれました。私の誕生日である５月２５日に起こった事件です。映像を見て、ショックで涙が止まりませんでした。このような差別を私は今まで実感していませんでしたが、バハマ出身である父が体験した話を思い出したのです。日本でも差別はあるのだ、そして、なぜ差別は起きるのか、どのようにしたらなくすことができるのかを考えました。これが、この作品を書いたきっかけです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 私の誇りはタコス

佐賀県　学校法人東明館学園 東明館中学校　3 年

**佐藤　ひかる**

みなさんの「家庭の味」は何ですか。カレー、肉じゃが、みそ汁といろいろあると思います。我が家の場合はメキシコ料理の定番タコスです。私のひいおばあちゃんから伝えられたもので、我が家の食卓には当たり前のように上がります。

私のひいおばあちゃんは三歳の時にペルーに移民しました。当時の日本人は夢を追い求め、その数は国際協力事業団によるとピークの明治三十九年の時には三万六千百二十四人も外国に旅立ちました。私のひいおばあちゃんもその中の一人です。しかし現実はひどいものでした。山の開拓での重労働に加え、マラリア病などの伝染などで環境は非常に悪く多くの人は命を落としました。逃げ出す人は背後から容赦なく銃で撃たれました。それでもひいおばあちゃん一家は逃げる決意をしました。バンバンとなる銃声の中、何とか逃げ切りました。ペルーからメキシコまで何日も歩き続けたのです。運良く心優しい綿農家の方に出会い、綿摘みの仕事をしながら平穏に暮らしそして二十五歳で領事館勤めのひいおじいちゃんと結婚しました。しかし第二次世界大戦が始まりメキシコで生活することが厳しくなり、昭和十八年に日本に帰国することになりました。家も畑もない日本。支えは親族だけです。どれだけ苦しく、心細かったでしょうか。戦後も細々とヤミ市で物を売って生活していました。その時に知り合った若いアメリカ兵にメキシコ料理をふるまいました。若いアメリカ兵は「おいしい。ママの味だ。」と言って涙を流しながら食べたそうです。そのことがきっかけでメキシコ料理の店を出し生活も豊かになりました。

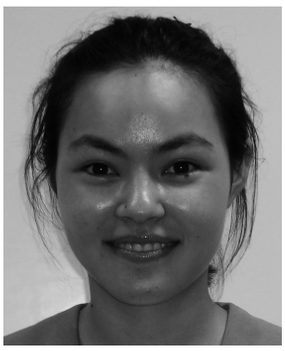
私はこの話を親戚の手紙で知りました。我が家の「タコス」にはそんな物語が詰めこまれていたなんて…。ショックで言葉が出ませんでした。ひいおばあちゃんが十五歳、今の私と同じ年の時、一家の大黒柱として大人相手に商売していたそうです。私に同じことができるかというと、自信はありません。ひいおばあちゃんはどんな困難な状況でもあきらめない強い人であり、私はそんな彼女を誇りに思い、同じ血が流れているのだとうれしく思います。

今、世界中で新型コロナウイルスの影響により、私たちの日常生活は大きく変わりました。ソーシャルディスタンスなど、新しい言葉が生み出され、人と対面で触れ合うことができなくなりました。学校生活では、体育祭や修学旅行なども開催未定のままです。コロナと共存していく生活が始まろうとしています。もちろん不安に思うこともあります。最近なぜだか私はひいおばあちゃんのことを思い出しています。もしかしたら、彼女もメキシコで必死に働いていた時、戦争中に日本に帰って来た時、私と同じように先の見えない不安と戦っていたのかもしれません。しかしひいおばあちゃんはどんな時もあきらめませんでした。その強さとたくましさは、戦後、日本人が焼け野原になった土地を「あきらめない」と高度経済成長になるまで立ち上がらせた姿と重なります。同じ日本人である私達にも今の状況に負けるはずがありません。失ってしまった「当たり前」の生活を嘆くのではなく今の状況でできることを考えることが私達に一番必要です。

私は今、生徒会に入っています。新型コロナウイルスの影響で中止になった行事がたくさんありますが今だからこそできることがあると思います。私は自分たちの手で新しい行事を作り出すことができるかもしれないとわくわくしています。そのことに気づかせてくれたひいおばあちゃんのタコス…。それは私の原点です。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

今年の春休みの途中に、祖父母あてに親戚から手紙が届きました。母から「あなたたちにも関係することだから必ず読みなさい」と言われたことがこの作文を書いたきっかけです。私は、これまでに少ししか曾祖母の話を聞いたことがなかったので、ショックで言葉が出ませんでした。私も曾祖母のような強い人になっていけるように努力をしていきたいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# グローバルな学校を目指して

長崎県　雲仙市立瑞穂中学校　３年

**本多　満世留**

みなさんにとって学校とは、どんな場所ですか？勉強をするところ、友だちと話をするところ。私にとって学校とは、いろいろなことが学べる場所です。一人では経験することのできない集団生活や、これから社会に出て行くために必要なことを学べます。では、学校が好きかと言われると…決して「好き」とは言えません。私が学校を「好き」と言えない理由。そのことについて、今日は皆さんにも一緒に考えてほしいと思います。

私の母はスウェーデン出身です。父が海外旅行好きということもあり、私もこれまでいろいろな国に連れて行ってもらいました。訪れた国で、学校を見せてもらうこともあります。そのときの印象は大体、「日本と違うなあ」というものでした。

最初に目につくのは、外見の違いです。多くの学校では、制服がありません。髪の色はもちろんさまざまだし、髪型も自由です。私は、日本の中学校も自由な服装がいいと思っています。それは、自分の環境を整えるのは、自分であるべきだと思うからです。

もちろん、中学生のみんなが、制服を自由にしたいと思っているわけではありません。私の学校では、多くの人が「制服の方が良い」と考えています。理由は、「毎日何を着るか悩まなくていい」「経済的に考えると三年間制服の方が安い」というものでした。私は、この考えにも賛成です。だから、学校では制服も私服も含めて、「自分で選べる」ようにしてほしいのです。その日一日の天気や気持ちに合わせて、着る物を選び、髪型を整える。小さな選択ではありますが、とても大事なことだと思います。私たちはいつか、自分の考えで進路を決める日が来ます。それは大きな判断です。その大きな判断を迎える前に、日々、小さな判断を自分の責任で行うことを大切にしたいのです。

次に違うと思ったのが、学校のテストや宿題です。海外の学校では、どちらも記述式のレポートが主流です。最近は日本でも、入社試験に作文を取り入れたり、大学受験に記述式問題を取り入れたりしています。私はこれに賛成です。将来、大人になって働くとき、プレゼンテーションをする能力が必要だと思うからです。どんなに良いアイデアを持っていても、それを言葉で他の人に伝えるスキルがなくては始まりません。言葉を使って説明し、自己表現する技術は、大学生になるまでに身につけて置いた方がいいと思います。

三つ目に驚いたのは、授業の受け方です。私が見せてもらったクラスでは、生徒が床の上に座り、その姿勢もさまざまでした。見た目はだらっとしていますし、まず日本の学校では見られない光景です。しかし、それで先生の話を聞いていない訳ではありません。みんなで意見を交わしながら授業を進めていくのです。しかも、その討論の内容は高度で、話を聞きながらすごいなと感心しました。私は、自由なスタイルで授業に集中するこの進め方もいいなと思いました。

日本では、見た目を重視することがあると思います。たとえば、集会の時の体育座りなど。短時間ならともかく、長い時間体育座りをするのは体によくないということを、皆さんはご存知でしょうか。確かに、全校生徒が一糸乱れぬ姿勢で話を聞く姿は美しいかもしれませんが、身体の健康よりも優先させるべきなのかと疑問に思います。また、「見た目」とは少し違いますが、時間についても同じ気持ちになります。日本人は時間にきちんとしている、電車の遅れも秒単位だ、などと良い評価をされる事が多いと思います。しかし、学校においては、この区切りが息苦しさを感じることもあるのです。十分しかない休み時間の間に、私たちは時に着替え、水分補給をし、教室を移動しなければいけません。また、二十分しかない給食時間の中で一口三十回かんで食事をしなければいけません。時間を守ることは大切ですが、もっと余裕のある時間設定はできないのだろうか、とも思います。

私は、誰かに学校を変えてほしいと思っているわけではありません。もし変えるとしたら、私も含めて、まずは中学生自身が意見を交わしながら変えようとすることが必要だと思います。ただ、中学生ではない皆さんにも一緒に考えてほしいのです。学校に限らず、今、私たちの身の回りにある「当たり前」のことが、本当に良い事なのかどうかを。「昔からそうだから」「これが普通でしょう」というのは、固定概念に過ぎません。何事においても、いろいろな立場の人が、意見を交わすことによって、より良いシステムが作れるはずです。私はこれからも、いろいろな人と意見を交わしながら、よりグローバルな学校をつくっていきたいと思います。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

私がこの作文を書いたきっかけは学校という場所が苦痛だったため少しでも変えてほしいと思ったからです。私が今まで見て、感じたたくさんの情報を少しでも学生のみなさんがよりよく過ごせるよう、そのために使いたいと思いました。もちろん、私が感じる苦痛と他者が感じる苦痛には差があると思いますが、この作文をきっかけに、たくさんの人たちが「学校」について考えていくことにつながればと思います。学校だけじゃなく身の周りのあたりまえについても。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 変える、変えられる

大分県　竹田市立直入中学校　３年
**小代　あこ**

私の学校には『挨拶運動』という伝統があります。週３回、生徒会役員が校門の前で登校してきた生徒、通りすぎる地域の人や車に挨拶をするというものです。２年生の１月、生徒会長になった私はその伝統をやめることにしました。

「おはようございます」と、校門前で言う挨拶に返事をしない人はいません。皆、はっきりと「おはよう」と返してくれます。でも、校舎内では私の「おはよう」に返ってくる言葉はありません。意味がない。そう思った私は、この挨拶運動を変えようと決心しました。

執行委員会で提案し、皆で考えました。そして考えついたのは、生徒会役員が各教室に挨拶をしてまわり、すれ違う人と挨拶を交わすというスタイルでした。私はすごくいいものだと感じ、皆もきっと賛成してくれると思っていました。

ところが、皆は形を変えることに簡単に賛成はしてくれませんでした。

「校門前での挨拶運動は、直入中の伝統やけん。」

「普通にすればよくね。変える必要なんかあるん。」

現状を伝えても、なかなか納得してくれません。私はそれが悔しくて、悔しくてたまりませんでした。『なぜ今まで通りが正義みたいに言うんだろう。伝統を壊すことはいけないことなのだろうか。』そんなことを思いながら皆に訴え続け、ようやく新しい挨拶運動をスタートさせることに成功したのです。

新しい挨拶運動は、やってみると思っていた以上に好評で、校内での挨拶の声も増えたように感じました。あんなに反対していた人たちも、

「いいね。頑張って。」

と応援してくれるようになったのです。私はこの経験から、『今まで通り』を変えることの難しさを知り、同時に、新しいことを始める面白さと楽しさ、そして自信を得ることができました。

生徒会長としての私の次の仕事は、卒業式の準備でした。これまでお世話になった先輩方を心を込めて送りたい。その思いを形にしたのが、卒業式の会場に飾るステージ画です。先輩たちの思い出を聞いて下絵を描き、模造紙を何枚もつなぎ合わせ、プロジェクタ―で拡大して下絵を写し、色を塗るのです。昼休みや放課後に毎日作業を続け、順調に仕上がっていきました。そして完成まであともう一息というところで、私たちは絵を仕上げることができなくなりました。それどころか、学校に行くことすらできなくなったのです。卒業式の１週間前、突然の全国一斉の休校要請でした。

卒業式で読むはずだったスピーチ。何度も書き直したのに。未完成のステージ画。ピアノの鍵盤に、あんなにこだわって色を塗ったのに。先輩に直接お礼も言えないままお別れになるのか・・・。そんなむなしい気持ちのまま、一日一日が過ぎていきました。

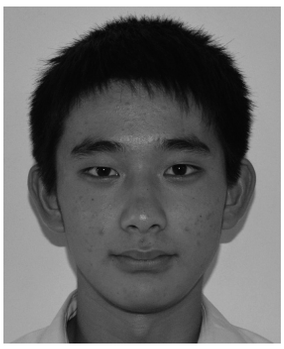
そんな時、友だちからこんな連絡が入りました。「動画でメッセージを作って、先輩たちに送らないか。」と。そうか、卒業式に出られない、ステージ画も飾られないとあきらめるのではなく、新しいアイディアを出せばいいんだと気づかされました。それから急いで全校に連絡網を回し、それぞれメッセージを書いたものを手に持ち、写真を撮ってもらうように頼みました。卒業式で読むはずだった文も動画に入れ、歌うはずだった合唱曲をＢＧＭにしました。もちろん、私一人でできるはずもありません。親同士が連絡を取り合い、ラインで写真を集めてくれたり、パソコンが得意な姉が編集を手伝ってくれたり、こんな風にしたらと友だちが次々アイディアをくれたり、集まることはできなくても、いろいろな方法を使って連絡を取り合い、いろんな人を巻き込みながら、私たちはつながることができたのです。

そして卒業式当日。動画を先輩たちの保護者のグループラインにあげ、私たちの思いを届けることができました。

２ヶ月後、学校が再開し、未完成のままのステージ画を片付けました。少し残念な気持ちはありましたが、むなしさは残っていません。今まで通りの、伝統として受け継いできた卒業式はできませんでした。でも、できないのなら一生懸命考えて、一から始めればいい。そして、私たちはそれができた。そんな達成感とすがすがしさを、今、私は感じています。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

この春、世の中が大きく変わり、イベントが中止になったり、行動を制限されたりということがたくさんありました。以前の私はやりたいことができないと、悔しくて嘆いてばかりでした。でも、友だちの声かけをきっかけに気持ちを切り替え、私は歩き出すことができました。こんな時だからこそ、前向きになれた私の姿で、悩んでいる人が元気になれたらと思い、作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# いまをどんな心で生きるか

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　３年

**石川　陽葵**

立志式を迎えたすぐ後のことです。新型コロナウイルス流行のため、学校が休校となり、家の中で何週間も過ごさなければならなくなりました。今まで「当たり前」に営んでいた生活ができなくなり、隔離された孤独の時間の中、経験した事のないような不安を感じる日々でした。

しかし、この動けない状態は自らを見つめ直す機会だと前向きにとらえ、これから自分がどのような使命を持って生きて行くべきなのかを考えるように心がけました。自分探しは大変難しく、答えを出せないまま悩む日が続きました。

そんな私の自分探しの旅に大きな変化が訪れたのは、ある日、母が書いてくれた手紙を読み返した時でした。それは、修学旅行に出発する日に母から受け取ったものです。

「修学旅行へ行けることが、当たり前のことだと思ってはいけない。14 歳の私の分までたくさん学んでくること。」

私の母は、14 歳のとき白血病にかかり、長い期間、入院生活を強いられました。

「もう一日命を頂いてありがとう」

毎朝目が覚めた時に感謝するようになってから、その感謝の気持ちが苦しみを乗り越える勇気に変わっていったそうです。

私がこうして元気に成長していること、何の苦労もなく毎日過ごしている今がどれだけありがたいことなのか、本当に「当たり前」のことは、当たり前でないのだと身にしみて感じました。食事が満足にできること、必要な教科書を持って登校できること、体調を崩せばすぐに病院で治療を受けられること、そして、夢や希望を自由に持つことができること。今までの自分を振り返ると、どれだけの人に支えられてきたのだろうと、全ての思い出に対して感謝の気持ちでいっぱいになりました。

自分がどれだけ恵まれている中で生きてこられたかを実感した私は、感謝とともに「恩返しをしたい」、そう強く思うようになりました。世の中には自分や家族のことで悩んでいる人、世界に目を向ければ、戦火の過酷な状況の中で必死に生きている人がいます。私はいろいろな苦しみや悩みを抱えている人達に寄り添い、笑顔を取り戻す為の力添えを行える人間になろうと決心しました。そして、自分の信念を貫き続けるために「一意専心」という言葉を胸に刻んで生きていきたいと思いました。この言葉には､自らの考えに基づいて､一つのことに力を注いでいくという意味があります。

社会に目を向けると乗り越えていけるか不安なことがたくさんあります。コロナウイルスに我々はどう対峙していけばいいのか、近い将来、ＡＩの普及によって、これまでとは全く違う世界でどうやって生きていくかなどです。

「未来の不安の中に生きてはいけない。今頑張ることに集中すれば、新たな道が開けてくるよ。」

これは、５年間にわたる闘病生活を乗り越えて、白血病を克服した母が、ずっと私に言い聞かせてきた言葉です。

どんな境遇にあるとしても、それにめげることなく、未来に不安を感じず、自分の信じる道を歩み続けていこうと思います。

私はこれまで、家族･先生･地域の方々、たくさんの人に守られながら、安心感を持って歩いてくることができました。それが当たり前ではないことを決して忘れず、志を胸に自分の人生を切り拓いていきます。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

母からもらった手紙に、母が私と同じ歳の頃、白血病にかかり、生死をさまよっていたことが書いてありました。今日、生きていることや、生きるためにたくさんの人に支えられていることが「当たり前」のことではなく、どれだけありがたいことなのか、感謝いっぱいの 気持ちになりました。そして、一度きりの人生、どんな境遇にあろうとも、私たちが命を与えられた大切な意味を考えることができ、明るい未来に向けて一人でも多くの人に伝えたいと思い、この作品を書きました。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 今を生きるために

沖縄県　糸満市立西崎中学校　3年
**嘉数　璃久**

「命を粗末にしてはいけない」

幼い頃から幾度となく聞かされているはずなのに、僕の周りでは「死ね」だの「死にたい」だのと耳を塞ぎたくなる言葉が飛びかっている。取りたて問題になるようなこともなく、むしろ口癖のように吐き捨てられる言葉に誰もが麻痺してしまっている。

数年前の僕なら、こんな言葉に傷つくこともなく平気でいられた。でも生きることの尊さを知った今の僕には到底聞きながすことはできない。

3年前、クリスマス間近の寒い夜に父がこの世からいなくなった。優しく穏やかで、子供相手に真剣にゲームをするような明るい父だった。休日には僕と弟を楽しませようといろいろな所へ連れて行ってくれる自慢の父だった。そんな父がいなくなることなんて、まだ小学3年生だった僕には想像することすらできなかった。

「検査入院だから」と笑顔で話していた父だったが、治療を受け日毎に変わっていく姿に、幼いながら何か重い病気なんだと感じたのを覚えています。

父のいない寂しさを堪えながら、数少ない一時帰宅の日を指折り数える毎日でした。

帰宅した父は、何か特別なことをするわけではなく、家族とご飯を食べ、風呂に入り、みんなで眠り、また病院へ…たったそれだけのことでしたが、家族と過ごすそのわずかな時間がどれ程かけがえのない時間だったか、みんな知っていた。

病状には波があり、その度に治療を変えたり入退院を繰り返したりしながら、父は最後のその瞬間まで一生懸命「生きて」いた。どんなに苦しい治療を受けながらでも家族との時間を大切にし、笑顔で接してくれた父を心の底から尊敬しています。

生前、父がこんな話をしてくれたことがある。

「病気になってしまったけれど、悪いことばかりじゃなく、今まで気づけなかったことに気づくことができたんだ。人の温かさも命や自然の尊さも今はよく分かる。そして、大切な人と何気なく過ごす幸せも十分感じてる。生きることは感謝なんだよ。」と。そう語って優しく微笑む父の姿を僕は一生忘れないだろう。

大切な人を亡くして3年が経つが、未だに心は癒えず、ふとした時にまた哀しみが押し寄せてくる。愛する人を失うということは何事にも代え難い喪失感と絶望感を味わうのだ。

「人が生きる」ということがどれだけ尊く素晴らしいものなのか、僕は父から教わった。生きることには限りがあることも、生きたくてもそうできなかった苦しみも見てきた。だからこそ僕は、「今を精いっぱい生きなければ」と思うのだ。

いじめを苦に自らの命を絶つ若者や夢や希望を持てずに引きこもりの人生を送る人が増加の一途を辿っている。報道されても「またか」と驚くことも無い。確かに命の危険を感じた経験もなければ、明日があると何となく生きていれば、他人の生き方は所詮人事なのかもしれない。でも、どこかでだれかのこととして捉えることより、隣の人が悩んでいそうだなとか、自分の発する言葉で誰かを傷つけてしまうかもしれないと考えたりすることが大事なんだと思う。朝起きて今日一日頑張ろうと思うことだったり、他愛のないことで友達とふざけ合う時間に感謝したりする、そんな些細なことで誰かを救えたり、自分も助けられたりするのかも知れない。生きるとはそういう小さな積み重ねでできていると思っている。この自分の経験から、僕は人の命も救いたいと思い、将来医療関係の職につきたいと考えている。僕はもう生きることから逃げないためにも「今」を大切にして過ごしたいと思う。

**この主張をどんな人に届けたいですか？**

人は限りある人生を自分らしく大切に生きられたら、どんなに素晴らしいだろうと思います。今、悩みを抱えて日々生きるのが辛い人や、明日に夢や希望を見出せない人にこの声を届けたいです。そして、共に支え合いながら生きていきたい。と思う人々の優しさが溢れるような世の中になることを僕は願っています。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# 見えない誰かの為に・・・

群馬県　伊勢崎市立第二中学校　3年

**西澤　乃彩**

ガラス越しに見る妹は、私の知っている妹とは全然違う人のように見えた。たくさんの副作用。強い吐き気、脱毛、出血。大声で泣いている妹。かわいい私の妹。まだ四才の幼い妹。何かしてあげたいのに、私にしてあげられることは、何もなかった。そばに居ることも、触れることも何も出来ない。それでも私は、「大丈夫。絶対助かる。」そう自分に言い聞かせて、平常心を保っていた。たぶんこの不安だった日々の事は一生忘れない。小学校三年生のことだ。

私の妹は、「白血病」になってしまった。ある日、私が学校から帰ると、妹が鼻血を出していた。今思っても、始まりは些細な変化であったと思う。それが、日に日に鼻血を出す回数が増え、加えて足などに出来るあざも多くなっていった。異変に気づいた母が病院へ連れて行くと、妹はすぐ入院することになってしまった。母から妹の病気の事を聞かされても、私は白血病がどんな病気なのか、全く分からなかった。だからパソコンで調べた。しかし、小学校三学年の私には分からない言葉が多すぎて理解出来なかった。ただ、「がん」という言葉は、私の人生で初めて間近にやってきたものなので、得体の知れない大きなもやのように、考えれば考えるほど私を不安で飲みこんでいった。このまま妹が死んでしまったらどうしよう、そう思うと、妹の変化に気付けなかった過去の自分も、何も出来ない今の自分も、もっと遊んであげればよかったという後悔も、いろんなものが私を責めているようで、家族に隠れて泣いていた。

しかし、泣いていても状況は変わらない。ある日そう気づいた。その日から妹に会いに行ったときには、妹の不安を少しでも除けるように、手紙を書いて行ったり、おもちゃを持って行ったりした。妹が笑ってくれると、とても嬉しかった。私に出来ることを見つけたとも思った。しかし、病気はとても恐ろしいもので、それを実感したのは、妹が一時退院したときのことだった。久しぶりに妹と手を繋いで歩いたとき、妹は小さな段差も躓いてしまったのだ。筋力が低下していた。このまま妹は助からないのではないか、そんな思いをしていたまさにそんなとき。妹は救われた。妹を救ったのは見知らぬ誰かからの「血液」提供だった。このおかげで、妹は約二年で病気を治すことができたのだ。今はもう、皆と同じように運動したり、遊んだりすることができている。私は、顔も名前も知らない誰かに、言葉にならないくらい感謝をしている。妹だけでなく、私たち家族のことも救ってくれた。

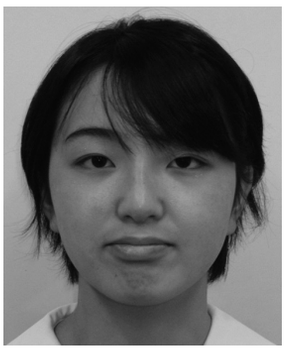
この経験を通して、私も誰かを救いたい、と強く思うようになった。大切なのは、直接感謝されるとか、誰かに褒められることではない。行動すれば、どこかで誰かが元気に過ごすことができる。そう感じてからの私は、自分にできることを積極的に行動するようになった。母が勧めてくれた「ヘアドネーション」もその一つ。私の髪の毛ですら誰かの役に立つ。また、学校では、寄付や募金を中心に行う JRC 委員会に所属している。小さな事かも知れないが、私に出来ることを一生懸命行動している。「誰かの役に立ちたい」と思うだけでは誰も救えない。

私は妹の病気を通して積極的に行動することの大切さを知った。また、その行動が必ず誰かの役に立つことも知った。例え自分が助けたのが誰だか分からなくても。

皆さんは、自分に出来ることを、行動に起こしていますか。今の私たちにできることは、僅かなことかもしれない。しかし行動していけば、必ず救われる誰かが居る。助けられる誰かを助けるため、少しでも役に立つため、私はこれからも行動していく。妹を救ってくれた名前も知らない誰かのように。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

私は、今年の八月にヘアドネーションをするため、腰まであった髪の毛を切りました。その後寄付団体を通じ、約三年間伸ばしていた髪をついに寄付することができました。母と妹も一緒に髪を寄付しました。妹が病気の時、ウィッグをもらって、外に出ることに抵抗がなくなったので、誰かの笑顔につながったのかなと思いました。大変だったけれど、達成感がありました。世の中にはまだ私の知らない寄付はたくさんあると思います。どんな病気があるのかを知ることも含めて、誰かのために、生きていきたいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# "バリアフリー"に親近感を！

滋賀県　滋賀大学教育学部附属中学校　３年
**中村　燎**

「今日はいい天気だね。」
学校へ向かう電車の中で、ある会話を耳にした。声のほうへ振り向くと、男性が目の前の女性に話しかけていた。その女性はすぐに答える。
「そうですね。」
それからも会話は続いた。私はしばらく二人の方を向いていると、目に入ったのは男性のリュックに付いている赤いタグ。外見から分からなくても援助や配慮を必要としている方々が周囲にそのことを知らせるために利用する、ヘルプマークだった。答えた女性はそのことを知っているように見えた。あたたかい場面を私は目にし、私はその日を明るく過ごすことができた。

それから月日が経ち、下校中、その男性が私と同じ車両に乗っていることに気づいた。男性が近づいてきて、声をかけてくる。
「暑いね。」
私は、「暑いですよね。」と言葉を返すことができ、少しの達成感が湧いた。しかし男性が電車を降りると、私の友達が言う。
「あの人に声をかけられても、無視した方がいいよ。だってあの人、障害者だよ。」
私はその言葉を聞いたとき、衝撃を受けるとともに「障害者」という言葉に違和感を覚えた。体に障害を持っているのではなく、社会の中で生きていく上での障害を乗り越えていかなければならない方たちのことを、私たちは「障害者」と呼んでいるのだと、私は考える。その障害を私たちは少しでも取り除く努力をしないといけないのに、友達の彼女の態度は社会の「障害」を自らつくりだしている。

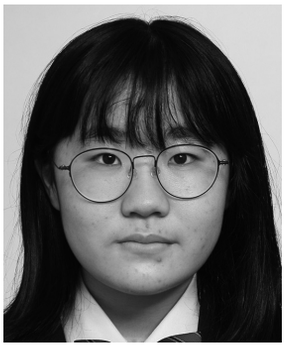
ヘルプマークを付けた方を見かけても、何か手伝おうとはせず、見て見ぬふりをする人は少なくはないだろう。障害は、触れてはいけないものなのだと感じてしまい、障害に触れることによって気まずくなりたくない、相手に嫌に思われたくないという不安で、自分を守ろうとしてしまう。また、「差別をしてはいけないのだから、同じ人として対等な立場で接した方が『障害者』の方たちのためになる。」このような偏った考えも出てきてしまうのではないだろうか。これらは間違った配慮であり、障害者が優先されるような気づかいがなくなる原因になってしまう。社会への障害を持つ方たちに対してまた一つ、バリアをつくっているということを、理解してほしい。

私は初めてヘルプマークを付けた人を見た時、「かわいそうだな」と思ってしまった。しかし、その感情は自然に自分の立場が上になり、相手を見下してしまっているのだと後になって気づき、私は今でも反省している。だからといって、「同情」すればいいというわけではない。相手と同じように物事を受け止め、相手に寄り添うことが同情だが、最近は「かわいそう」と同じ解釈になってきている。誰の心にも潜んでいる無意識で差別的な感情をなくすにはどうすればよいのか。社会のバリアをなくす、つまり「バリアフリー」のためには私たちに何ができるのか。

私は以前に、ハンセン病についての作文を書いたことがある。ハンセン病は治る病気であるのに、誤った知識が広まって、人権侵害が長く続いてしまった。事実の風化を防ぎ、正しい知識を活用して生きていく、それが今の私にできることだと当時の私は考えた。しかし、これはハンセン病だけに当てはまるものではない。ヘルプマークは、援助や配慮を必要としている方々が、周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくするためにつくられた。だが、その知らせを無視している人々が大半であれば、ヘルプマークの効果がなくなってしまう。私たちと障害者の方たちとの間の厚い壁を少しでも取り除いていくために、現状を知り、その方たちにとっての社会への障害を知り、よりよい援助と配慮を心掛けていくべきだ。「バリアフリー」と聞くと、スロープなどの設備や施設が連想されるが「心のバリアフリー」ならば、誰でも実践していける。施設の充実ばかりが重要なのではない。バリアフリーを他人事のように受けとめないことこそが、どんな小さな差別もなくしていくための第一歩となる。自分自身の無意識の差別をなくし、新たな行動に変えることで、明るい社会に変えていきたい。もっと身近にバリアフリーを。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

学校から帰る電車の中に、ヘルプマークを付けた障害者の方がいらっしゃった。しかし、私の友達はその方が電車を降りると「声をかけられても、障害者だから無視した方がいい」と言ったのだ。私はその考え方に納得がいかなかった。それがこの作文を書いたきっかけだ。実際に友達がそう言った時、私は「おかしい」と指摘できなかった。友達だからこそ、自分の思いを伝えられたのではないか。今回の作文で確かめた自分の思いを、これからはしっかりと伝えていきたい。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# フォトスタンドの笑顔

徳島県　徳島文理中学校　１年

**蓑輪　凛花**

「勉強の目的というのは、いい大学や良い職に就くことではなく、私たちがよりよい人間になるということです。」

これは、私の大好きなマザー・テレサの言葉です。さらに、彼女はこう続けています。

「勉強することで、知性と心を磨き、与えられた才能を伸ばし発揮することができます。そうすることでよりよい人間になり、社会や人々に役立つ人間になれます。あなた自身も周りの人々も幸せになることができるのです。」

では、「よりよい人間」とはどんな人なのでしょうか。私には、マザー・テレサその人自身が「よりよい人間」を体現している人だと考えています。マザー・テレサの小柄な体いっぱいに無私の愛があふれています。つまり、自己犠牲を厭わず、無私の愛で考え、行動できる人のことだと思います。

私は彼女の生き方を詳しく知るにつれて、私自身も将来、海外の途上国で働きたいと考えるようになりました。今の私はちっぽけで、よりよい人間とはほど遠い存在ですが、マザー・テレサの「あなたにもできます！」という言葉に勇気をもらい、毎日を過ごしています。

途上国で無私の愛を体現した人物で、私が心から尊敬している人が、もう一人います。

ネパールの秘境ムスタンで活躍した近藤亨さんです。彼は、果樹栽培と世界最高地での稲作を現地の人に指導することに成功し、「ネパールを救った現代の二宮尊徳」とも紹介される人物です。JICA の果樹栽培専門家としてネパール・ガミ村で四年間暮らした際、ムスタンの極貧生活を目の当たりにした日々だったそうです。そんな中で、「貧しいムスタンの子供達に腹一杯白米を食べさせてやりたい。」と、日本に帰国し私財を売り払って活動資金を作り、覚悟を決めてムスタンへの移住を決行したそうです。三千六百mの高地での水稲栽培に成功するまでには、何度も壁が立ちはだかり、打ちのめされそうになったこともあるはずですし、言うに言われない苦労もあったことでしょう。さらに、現地の人々が高地での生活で不足しがちなビタミンを手軽に摂取できるようにするために、高冷地では不可能だとされていた野菜の栽培にも取り組みました。そして、彼はこれらの農業技術の指導だけでなく、村に小中学校十校を建設し、さらに病院建設にも尽力しているのです。ムスタンの地に骨を埋める覚悟だという彼の夢は、ここに緑豊かな桃源郷を作ることだそうです。私には、白く長いヒゲをたたえた彼の瞳はそれまでのすべての苦難を飲み込み、慈しみにあふれていると感じました。

私は二人に後押しされて、シリア難民への支援活動を始めました。きっかけは、学校の先生と雑談していた折りに知った先生の活動のお手伝いをしたいと考えたことです。先生はシリア出身の方と友達で、シリアの子供達の学習支援をしたいと、日本で不要になったランドセルや文房具を贈る活動をしています。

そこで、私も同じ学年の友達に声をかけて、不要なランドセルを十個集めることができました。この夏休みには、支援活動のポスターを作成し、お世話になった小学校に支援協力を依頼しに行く予定にしています。そして、少しずつ仲間を増やし、今年中に百個のランドセルを集めて、シリアに送ることを目標にしています。

今の私には、大きな夢ができました。コロナ騒動が収束し、自由に海外に渡航できるようになったら、シリア難民の子供達に逢うために渡航するという夢です。そして、彼らと生活を共にし、難民生活を自分の目で見、話を伺い、これからどのような支援を現地の方々が願っているのかをしっかりと聞いてきたいと考えています。そのために、今私にできることは、しっかりと勉学に励むことと、視野を広げて等身大の自分にできることを探し実践していくことだと考えています。

今日も私の机のフォトスタンドで、マザー・テレサと近藤亨さんが温かい笑みを浮かべて私を見守ってくれています。

**この作品を書いたきっかけはなんですか？**

予想もしなかったコロナウィルスの蔓延により、私たちの日常は一変しました。憧れの中学校に入学した喜びもつかの間、新しい学問を学ぶ喜びも、友達とのたわいないおしゃべりの時間も取り上げられてしまいました。自宅で過ごしていた自粛期間、いつも私に勇気をくれた二人の笑顔に後押しされて、長く続く難民生活とコロナウィルスに私達以上に苦しんでいる人々のために支援したいと考え、ランドセルを集め始めました。この発表を通して私の活動に賛同し協力してくれる仲間の輪が全国に広がればと、願っています。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

# お陰様

滋賀県　長浜市立北中学校　３年
**伊藤　帆奈美**

三月二十八日、私は「お蔭様」の本当の意味を初めて知ったような気がしました。三月二十八日は私のおじいちゃんの三回忌で私は実家に帰省しました。お寺の住職さんも来て下さり、お勤めをして下さいました。そして、その住職さんがこうお話して下さいました。「ある右ききの男の子の右手はいつも左手にこう怒るそうです。『字を書くときも、食べるときも、はさみを使うときも働いているのはいつも俺じゃないか！』でも左手は何も言いません。そしてある日、その男の子は左手を骨折してしまいます。でも男の子は右手が動くから大丈夫だと思っていました。しかし、字を書けばゆがみ、ご飯を食べれば犬食い状態になり、はさみを使うのもひと苦労。この時初めて男の子は気づきました。『字が書けるのも、左手が紙をおさえてくれているから、ご飯を食べられるのも、左手がおわんを持ってくれるからだ』と。右手はすごく活躍しているけれど、それを陰で支えているのは左手なのです。その陰での支えがないと活躍もできません。だから昔の人は陰に敬意を表し、言葉の前に『お』をつけ、さらに『様』をつけ『お陰様』と言葉を作ったそうです。活躍している人よりも、陰で支えている人に敬意を表すことが昔の人の教えではないでしょうか。」

私はこのお話を聞いてとてもいいお話だと思いました。普段何げなく使ったり聞いたりしていた言葉が、本当は、とても深い意味を持つ言葉だと気づきました。そこで私は「お陰様」を自分と重ねて考えてみました。

私は、中学校からバレーボールを始めました。今はキャプテンを務め、ポジションはスパイカーです。スパイカーとは、主にスパイクを打ち得点を決めるプレイヤーのことです。

バレーボールの試合を見ているとスパイカーが活躍しているように見えますが、スパイクにつなげるためにはレシーブやトスをしてくれる仲間が欠かせません。仲間のレシーブやトスがないとスパイクは打てないのです。また、体育館にワックスをぬってプレーしやすくして下さる方々、指導して下さる先生、練習着を洗ってくれる家族、置かれた役割は違えど一緒にやってきたチームメイト、支えてくれる後輩・・・私を陰で支えてくれている人が本当にたくさんいることに気づき、改めて感謝の気持ちでいっぱいになりました。

ある男の子が左手が使えなくなって初めて大切さに気づいたように、よく「人は失ってからその大切さに気づく」と言います。最近、私はそれを身を持って感じています。今、新型コロナウィルスの影響で学校が休校になり、部活動も停止しています。いつも当たり前だった事がそうではなくなってきているのです。

そんな中でも医療関係者の方々は、私達の目の届かない所でも精一杯頑張って下さっています。また、学校では、先生方が陰で私達のために仕事をして下さっています。

だから私は、これからも「お陰様」の本当の意味や、私を陰で支えて下さっている人への感謝の気持ちを忘れず、生きていきたいです。また、部活動が再開したら、キャプテンとして陰ながらにもチームを引っ張り支えていきたいです。そして将来は、私の夢である養護教諭として生徒を「陰」から支えられる人になりたいです。養護教諭とは、学校で保健管理と指導を専門の仕事とする先生のことで、いわゆる保健室の先生のことです。私は小学生の時から学校が大好きで、中学生になってから医療にも興味を持ち始めました。そして、中学二年生の終わり頃、何度か体調を崩し保健室に行きました。保健室の先生は、「いつでもおいで」と親身になって相談にも乗って下さいました。そんな先生のように、将来は、自分が「陰」として生徒の心と体の健康を支えていきたいです。

**この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？**

私のおじいちゃんの三回忌で、実家に帰省した時に住職さんから「お陰様」のお話を聞きました。この住職さんに出会っていなかったら今の私はありません。表に見えているものや活躍している人だけに目を向けるのではなく、陰で自分を支えてもらっている人に感謝の気持ちを忘れず生きていきたいです。また、将来は私の夢である養護教諭になって、自分が「陰」として生徒の心と体の健康を支えていきたいです。

# 実施概要

# 第 42 回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2020 ～ について

## 全国大会開催要綱（web 開催）

1. 趣旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

今大会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、開催方法を web 開催に変更して実施します。

2. 開催期間

令和 2 年 10 月 29 日（木）～ 11 月 30 日（月）

※審査結果は 11 月 8 日（日）に掲載します。

3. 開催方法

上記の期間、少年の主張全国大会 web ページに全国大会出場者（12 名）の主張発表動画を掲載し、11 月 8 日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載します。

なお、全国大会に選出されなかった作品については作文を掲載します。

【少年の主張全国大会 web ページ】https://www.niye.go.jp/services/plan/syutyou/

4. 対象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

5. 主催

国立青少年教育振興機構

6. 協力

都道府県、青少年育成道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会

7. 後援

内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

8. 主張発表者（出場者）・発表内容

（1）主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名及び主催者より推薦された優秀者※の中から代表者として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

※主催者による推薦

新型コロナウイルス感染症の影響により、都道府県大会やその予選大会にあたる地区大会・学校大会を中止せざるを得ない地域があり、大会にエントリーする方法がなくなってしまった中学生に主張ができる機会を設ける必要があると考え、今大会に限り全国大会への「直接エントリー制度」を設けて募集を行います。詳しくは 58 ページ「直接エントリー制度概要」をご確認ください。

（2）ブロック代表定数

全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

※今大会に限り、応募状況に応じて審査委員会が全国大会出場者 12 名を選出するため、各ブロックの代表定数が異なる場合があります。

○北海道・東北ブロック・・・・・2 名
○関東・甲信越静ブロック・・・・3 名
○中部・近畿ブロック・・・・・・3 名
○中国・四国ブロック・・・・・・2 名
○九州ブロック・・・・・・・・・2 名

（３）発表内容

ア . 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ . 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ . テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：○○県にある○○旅館　良い例：○○県にある旅館　など。）

（４）発表時間

５分程度（400 字詰原稿用紙 ４枚程度）

9. 表彰

（１）全国大会出場者全員（12 名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者及び主催者推薦代表者全員に同理事長より努力賞を贈ります。

（２）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞･文部科学大臣賞･国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（３）全国大会出場者全員（12 名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

10. その他

（１）応募は、各青少年育成都道府県民会議等及び全国大会事務局を通して行います。

（２）全国大会に応募した作品の出版権は、国立青少年教育振興機構に帰属します。

（３）全国大会には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載いたします。

（４）全国大会実施後に作成する報告書（作品集）について、全国大会に応募（推薦）された作品全てを掲載し、本人の氏名及び学校名等を公開するとともに、関係機関に配布します。

（５）全国大会出場者で希望する方は、受賞した翌年に当機構が実施する「ミクロネシア諸島自然体験交流事業」（７月～８月の 10 日程度）の参加者（中学生の場合）またはサブリーダー（高校生の場合）として参加することができます。（経費は当機構負担）

## 少年の主張都道府県代表者の推薦（作品の募集）について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成都道府県民会議等主催により開催し、青少年育成市町村民会議、市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び市町村大会、地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要　71 ページ参照

## 全国大会出場者選考及び大会審査について

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

| | | |
|---|---|---|
| 審査委員長 | 松本　零士 | 日本宇宙少年団 理事長 |
| 審査委員長代理 | 宮崎　　緑 | 千葉商科大学 国際教養学部教授・学部長 |
| 審 査 委 員 | 内海　房子 | 国立女性教育会館 理事長 |
| | 河野　水穂 | 第 37 回少年の主張全国大会 審査委員会委員長賞受賞者 |
| | 田中壮一郎 | 国立青少年教育振興機構 顧問 |
| | 土田　　修 | 日本 PTA 全国協議会 副会長 |
| | 笛木　啓介 | 全日本中学校長会 生徒指導部長 |
| | 藤野　優子 | 日本放送協会 解説委員 |
| | 古沢由紀子 | 読売新聞東京本社 編集委員 |
| | 御厩　祐司 | 内閣府政策統括官（政策調整担当）付 参事官（青少年企画担当） |
| | 横井　理夫 | 文部科学省総合教育政策局 地域学習推進課長 |

2. 審査方法及び審査基準

**①事前審査（全国大会出場者選考の為の審査）**

事前審査（作文審査・出場者選考審査）は、全国５ブロック及び主催者推薦枠ごとに協議を行い、全国大会出場候補者を選出。

全国大会出場候補者の中から合計 12 名を全国大会発表者として選考。

＜作文審査＞（在宅審査）
[ 日　　時 ]　令和 2 年 10 月 5 日（月）～ 10 月 16 日（金）
[ 内　　容 ]　都道府県代表及び主催者推薦代表作文を読み、主に論旨について審査を行う
[ 基　　準 ]　以下の基準について、相対的評価を行う
①鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
②新しい情報や視点があるか
③個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
④提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
⑤論旨が一貫し、構成がしっかりしているか
[ 方　　法 ]　①ブロック及び主催者推薦枠ごとに審査を行う
②評価
全国大会出場者としてふさわしいと思われる作文をブロック及び主催者推薦枠ごとに 5 つ選考し、上位から順番に 5 点、4 点、3 点、2 点、1 点を付与する

＜全国大会出場者選考最終審査＞
[ 時　　期 ]　令和 2 年 10 月 22 日（木）
[ 場　　所 ]　国立オリンピック記念青少年総合センター　大会議室
[ 内　　容 ]　審査委員会での審議により、全国大会出場者 12 名を決定する
[ 基　　準 ]　以下の基準について、相対的評価を行う
①作文内容が優れており、共感と感銘を与えているか
②説得力のある話し方であるか
③話しぶりに熱意と迫力があるか
[ 方　　法 ]　①ブロック及び主催者推薦枠ごとに協議を行う
②作文審査集計をもとにした協議により、全国大会出場候補者を絞り込む
③必要に応じ、全国大会出場候補者の動画を視聴し、論調の審査を行う

**②全国大会審査**
[ 日　　時 ]　令和 2 年 11 月 5 日（木）
[ 場　　所 ]　国立オリンピック記念青少年総合センター　大会議室
[ 内　　容 ]　全国大会出場者 12 名の動画を視聴し、総合的な審査を行い、協議により、内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する
[ 基　　準 ]　①共感と感銘を与えていたか
②説得力のある話だったか
③熱意と迫力があったか
④落ち着いて話していたか
⑤聴衆に感動を与えていたか

**③設置された賞**

<table>
<tr><td rowspan="3">全国大会出場者</td><td>（三賞）</td><td>内閣総理大臣賞<br>文部科学大臣賞<br>国立青少年教育振興機構理事長賞</td><td>全国大会出場者のうち、優秀な 3 作品に授与した。</td></tr>
<tr><td colspan="2">審査委員会委員長賞</td><td>全国大会出場者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い 3 作品に授与した。</td></tr>
<tr><td colspan="2">国立青少年教育振興機構奨励賞</td><td>都道府県代表及び主催者推薦代表として、全国大会出場者選考審査において選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全 12 名に授与した。</td></tr>
<tr><td colspan="3">国立青少年教育振興機構努力賞</td><td>都道府県代表及び主催者推薦代表として、全国大会出場者選考審査に推薦されたことを賞し、都道府県代表及び主催者推薦代表者に授与した。</td></tr>
</table>

## 少年の主張大会応募者総数等

| | |
|---|---|
| 応募者数 | 252,732 名 |
| 参加学校教 | 2,660 校 |
| 都道府県大会視聴者数 | 3,598 名 |
| 全国大会（WEB 開催）視聴者数 | 3,663 名 |

都道府県代表及び主催者推薦代表者学年性別人数

| 学年／性別 | 男子 | 女子 | 計 |
|---|---|---|---|
| 中 3 | 5 | 29 | 34 |
| 中 2 | 1 | 8 | 9 |
| 中 1 | 1 | 3 | 4 |
| 計 | 7 | 40 | 47 |

## 直接エントリー制度　概要

1. 制度概要

　例年、全国大会における発表は、各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者、計 47 名の中から代表として選ばれた 12 名による行われていましたが、新型コロナウイルスの影響により、都道府県大会やその予選大会にあたる地区大会・学校大会を中止せざるを得ない地域があることから、今大会に限り全国大会への「直接エントリー制度」を設けて募集を行います。

2. 対象

下記 2 点の条件を満たすもの

①日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

②都道府県大会やその予選大会に応募できなかったもの。

※都道府県大会やその予選大会が実施される、もしくは都道府県事務局へ直接提出できる地域の中学生の皆様は、そちらへのエントリーをお願いします。

※各都道府県大会の実施状況等に関するお問い合わせ先については、少年の主張全国大会 web ページの「各都道府県大会事務局一覧」からご確認ください。
少年の主張全国大会 web ページ https://www.niye.go.jp/services/plan/syutyou/

3. エントリー期日

令和 2 年 7 月 31 日（金）消印有効

4. エントリー方法

エントリー期日までに提出書類を郵送

5. 提出書類

①エントリー用紙

②手書きの原稿（400 字詰原稿用紙 4 枚程度）

・400 字詰原稿用紙（A4 版縦書き）に清書したもの。
・コピーではなく、本人自筆による原本
（ワープロ不可・ただし障害等による場合は可）。
・原稿用紙には HB より濃い鉛筆ではっきりと記入。

6. 主催者推薦代表者の選考方法

直接エントリー制度に応募された作品に対し、全国大会事務局において 1 次審査を行い、さらに外部有識者を含めた「直接エントリー制度選考委員会」において 2 次審査を行う。

7. 直接エントリー制度選考委員会

座長　伊野　　亘　国立青少年教育振興機構 理事
　　西條　英吾　国立青少年教育振興機構 教育事業部長
　　増田　共子　国立立山青少年自然の家 所長
　　青山　鉄兵　文教大学 人間科学部准教授
　　片岡　麻里　公益社団法人ガールスカウト日本連盟 事業統括部長
　　遠藤　哲也　全日本中学校長会 生徒指導部副部長
　　内部　　学　株式会社時事通信社 解説委員兼内外教育編集長

8. 直接エントリー制度の応募者数

応募者数：9,423 名
参加学校数：130 校

# 審査委員の感想

# 言葉を紡ぎ相手に伝える勇気

国立女性教育会館　理事長
**内海　房子**

新型コロナウイルス感染の拡大は、『少年の主張』の作文審査にも大きな影を落とした。都道府県大会が開催できなかった県があったり、全国大会もオンラインになったりと異例づくめだった。しかし、中学生の研ぎ澄まされた感覚にはさらに磨きがかかり、コロナ禍で右往左往する大人たちをしり目に、痛快で心に響く『少年の主張』が繰り広げられた。

文部科学大臣賞を受賞した栃木県の荒井千恵理さんの『静から動へ』は、その痛快な主張の一つである。まず、荒井さんが日々研鑽を積んでいる書道と剣道という日本古来の伝統文化には、「静から動」という共通点があると述べる。そして、今のコロナ禍は「静」のとき、己を見つめ、相手を見つめ、「そこから自分にできる最善の手を考え、動き出す準備」をしようと呼びかける。さらに、「国や政治家の提案がうまくいかないことをただ責めるのではなく、失敗や間違いから学んでいかなければなりません」と、大人たちの行動をチクリと戒めている。

内閣総理大臣賞に輝いたのは、鹿児島県の池島音羽さんの『言葉を紡ぐ』である。いじめにあった経験をつづっている。いじめの問題は、中学生にとって、いつ自分の身にふりかかってくるかわからない、極めて身近な問題である。池島さんへのいじめも、ある日突然起こった。誰にも言えず苦しむ心のうちを、泣きながら母に打ち明ける。「その気持ちを相手の子に伝えてごらん」と母。でも、どうやって伝えたらいいのか。池島さんが手に取ったのはスマホだった。LINE に今の自分の思いのたけをつづった。そして、翌朝、その子から「ごめん」と言葉をかけられる。伝わった、思いが通じた喜びがあふれ、その時の気持ちを「私の世界に色が戻ってきた」と表している。

毎年『少年の主張』の作文を読んで願わずにはいられないのが、この根の深い「いじめ問題」の根絶である。池島さんは作文で、自分の思いを言葉にして相手に伝えることの重要さを訴えている。一人でも多くの中学生が、いじめのない平和な毎日を送ることができるために、言葉を紡ぎ相手に伝える勇気をもってほしい。

# 繋がっていく思い

第 37 回少年の主張全国大会　審査委員会委員長賞受賞者
**河野　水穂**

第 42 回「少年の主張全国大会」の審査委員を務めさせていただき、沢山の素晴らしい主張の数々と出会えたことを嬉しく感じています。

今回は、一人一人の状況も場所も、何もかも今までとは違う特別な大会でした。しかしどんな状況であったとしても、決して目を逸らさず、真剣に問題と向き合いながら、解決策を模索する皆さんの姿にとても勇気づけられました。また、弁論は実際に顔を合わせて聞くことが出来ませんでしたが、動画に映る熱い眼差しと、力強い主張はどれも私達に感動を与え、何度も胸を熱くしてくれた事を覚えています。だからこそ、審査は思っていた以上に大変で、気づいたらメモ用紙が真っ黒でした。

困難を乗り越え、その先にあった素敵なものを勇気を持って共有してくれた皆さんに、心から感謝しています。違う考えを持った者同士が集い、気持ちを伝え合う弁論。提出された作文を読み、多くの思いに触れることは何よりも特別な体験でした。

声をあげて、誰かに自分の意見を伝えることは本当に難しいことだと思います。ですが、ほんの少しの勇気を出して、声を震わせた時、其処にはきっと自分の言葉を必要としている多くの人が待っています。遠く離れた場所で紡がれた声が、東京の地に集まり、名前も知らない誰かの元へと届けられる、誰かを思いやり、考え、伝えることは、多様化するこの現代社会にこそ、必要な力なのではないかと改めて考えさせられました。

少年の主張は私に「自分らしい生き方」や「考えること」など沢山の事を教えてくれました。今、20 歳という新しいステージの前に立ち、この先の社会を担う一人の若者として、これからも思いを繋げていけるように、生きやすい社会を築いていける様に善処していきたいと思います。

今回、大会に参加してくださった多くの中学生の皆さんに心から感謝しています。いつかまた、忙しい日々の途中で見つけた、貴方だけの素敵な思いを聞かせてください。

## 考えること、そして行動することの大切さ

国立青少年教育振興機構　顧問
**田中　壮一郎**

第４２回少年の主張全国大会は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大防止の観点から、Web 開催となりました。

私たち審査委員も、例年なら４７都道府県の代表から１２名の全国大会出場者を選出することからスタートする訳ですが、本年度は都道府県大会等が中止されたところもあり、これらの地域の中学生を対象に直接エントリー制度が設けられました。このため、４２名の都府県代表と、エントリー制度に応募された中から国立青少年教育振興機構において選ばれた５名、計４７名の中から全国大会出場者を選ぶこととなりました。しかし、この４７名のなかから１２名を選ぶ困難さは例年通りで、本年度も大変苦労しました。

そして１２名の全国大会出場者から寄せられた動画を拝見しながら、最終審査を行いました。

内閣総理大臣賞に選ばれた鹿児島県の池島さんは「言葉を紡ぐ」と題して、突然いじめの標的とされる中、母親のアドバイスに基づき自分の気持ちを伝えることで解決できたことを発表してくれました。思いを伝えることの大切さを改めて認識するとともに、私にとってその伝達方法がスマホの LINE だったことは驚きでした。

また文部科学大臣賞に選ばれた栃木県の荒井さんは「静から動へ」と題して、3 歳の時から書道に取り組み、中学校に入り剣道を始めたことにより、「静」の時間に己を見つめ、そこから自分にできる最善の手を考え、動き出す準備をする。そして迷いや恐れを断ち切り、今と決めて踏み出すことの大切さを学んだと発表してくれました。まさに誰もがしっかりと考え、選び、行動することが大切なのですね。

国立青少年教育振興機構理事長賞には、愛知県の戸塚さんが選ばれました。「吃音症」という障害に立ち向かい、多くの人々の支えもあって、これを「個性」と考えられるようになったことを発表してくれました。

そして私に最も静かな感動を与えてくれたのが、審査委員会委員長賞の一人となった熊本県の太田君の発表でした。１４歳の少年が自分で決意し、北京から日本へとやってきました。日本での新しい生活と中国での生活との違いに驚きつつ、これをともに肯定し、将来、大好きな日本と中国、二つの国に役立てる人になりたいと決意を語ってくれました。心から応援したくなりました。

## 想いを伝えることを大切に

日本 PTA 全国協議会　副会長
**土田　修**

少年少女の真っ直ぐで曇りのない主張に審査を忘れ、只々聞き入ってしまった。

中学生の子を持つ親としても、少年少女の深く鋭く考え抜かれた主張に驚きと感心の連続であった。今回の全国大会は新型コロナウイルス感染症対応のためビデオ動画による審査となった。そのことで発表者から会場へ発せられる“空気”を捉えることができなかったことは非常に残念であった。しかし、そんなことには負けない発表者からの熱い想いは画面を通しても十分に受け取ることができた。社会が新型コロナウイルス感染症の対応に揺れる中、揺るがない少年少女の想いに明るい未来を確信した。

鹿児島県の池島さんは、いじめられた経験を基に言葉で想いを伝えていくことの大切さを知る。これからの時代がどんなに変わっても、これからの情報社会において情報伝達の方法が変化しても、人と人がつながり合える心豊かな社会を築いていくために、想いを言葉に紡ぎ相手に伝えることの大切さを主張した。母の少しだけそっと背中を押す姿が印象的であった。同時に母の描写から母への強い信頼が感じられた。

栃木県の荒井さんは書道と剣道の経験から静と動について気づく。コロナ禍で崩れいく日常の中で、コロナ禍における静と動についてそれぞれの場面でやらなければならないことについて主張した。静と動は反する存在であるが両方の存在が必然であり、単独では存在しない。そして、その連続性は必然であることに気づかされた主張であった。

愛知県の戸塚さんは吃音症の悩みの中、様々な人たちの支えで吃音症が悩みではないことに気づかされる。目には見えない、支えられている大切さに気づき、自分も目には見えない支えをしていくことを決意する。「吃音も個性」と言われるように、作文での主張よりも動画での主張の方が強く伝わってくるものがあった。

たくさんの想いを受け、幸せな時であった。これからも想いを伝えることを大切に、と願う。

## 不安な時代をブッ飛ばせ！

全日本中学校長会　生徒指導部長
**笛木　啓介**

世界を覆うコロナ禍によって、私たちは今「先行き不透明な不安な時代」の真っただ中にいる。その影響で、通常の学校生活を送ることのできない子供たちが、多くの不安やストレスを抱えているのではないか。いつも通りの元気な姿で話すことができるのだろうか。そんな心配や疑問を抱えながら、例年とは全く違った形式で実施された「第 42 回少年の主張全国大会～わたしの主張２０２０～」の審査に臨むことになった。

しかし、画面から流れてくる代表生徒のスピーチを聞き、話をしている表情を見進めるうちに、そんな心配は杞憂に過ぎないことがすぐに理解できた。どのスピーチの内容も、実に前向きであり、どの生徒の目にも「この不安な時代を必ず乗り切って見せる。」との決意がみなぎっているように見えたからだ。

栃木県の荒井さんは、この時代を乗り切るために、「静と動」の「静」の時間として過ごすべきだと言う。「静」と言ってもただ静かに禍をやり過ごすのではない。「静」の時間に己を見つめ、相手を見つめ、自分にできる最善の手を考え、動き出す準備をするのだと言う。誰かがどうにかしてくれるのを静かに待つだけでなく、持続可能な新しい暮らし方を自ら考え、実際に行動していかなければならないのだと力強く主張した。また、鹿児島県の池島さんは、これからの情報化社会において、情報の渦の中で生き抜いていかなければならない自分たちには、多くの情報を活用する力を身に付けなければならないと言う。近年、ともするとトラブルの元にばかりなっている「情報」に振り回されることなく、冷静に判断して、それを使いこなし自分たちのものにするためには、人間関係が大切であり、言葉に紡いだ思いを相手に伝え、お互いを理解することこそ大切だと力説した。

今回の全国大会への出場者に限らず、今大会に応募した 25 万人を超える中学生一人一人に敬意を表したい。その力を礎に、今後の弛まぬ努力によって、この不安な時代をブッ飛ばし、誰もが幸せを感じることのできる世界を実現してくれることを心から願う。

## 自分の「言葉の力」を信じて

日本放送協会　解説委員
**藤野　優子**

初めて少年の主張全国大会の審査員を務めさせて頂きました。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて最終審査は動画審査となりましたが、映像から伝わるメッセージはどれも胸を打たれるものでした。

全体を通じて、今回私が感じたのは、言葉が持つ力とは無限大だということです。皆さんの作文には、新しい「気づき」につながる周囲の人等からの言葉があり、その意味を深く考え、自分自身の心の動きを「自らの言葉」で表現する、その作業がしっかりとできていたことが主張の力強さ、説得力につながったのだと思います。

「吃音も個性」という言語聴覚士の先生の言葉や友人の言葉から、ありのままの自分が認められていることに気づき、目に見えない悩みを抱える人の支えになろうという主張や、友達からの心ない言葉に対して、ラインで自分の思いを表現することでいじめを解決し、自分の思いを周りに伝える事の大切さを説いた主張には、自ら道を切り拓こうとする思いが溢れていました。

また、コロナで日常生活が大きく変化した今を「『静』の時間ととらえ、己を、相手を見つめ、動き出す準備をする」時と、新たな暮らし方を自分たちで考えていこうというメッセージは、大人をも奮起させる力強いものでした。連日の感染者数を伝える報道に対し一人一人の命の尊さを問う指摘は、メディアに身を置く者として常に心に留めておかねばならないと思います。

コロナの影響で人と直接触れ合う機会が減っている今、「言葉の力」がこれまで以上に必要な時代なのかもしれません。また、コロナ後も日本や世界は様々な社会課題に直面します。若い人たちの瑞々しい感性、柔軟な発想力、繋がる力こそが間違いなく次代を拓く鍵になるでしょう。皆さんが身近な生活の中で感じた「気づき」を「自分の言葉」で表現することが社会を動かす原動力になると信じて、これからもぜひ発信を続けてほしいと強く願っています。

## 中学生に学んだ「多様な視点」

読売新聞東京本社　編集委員
**古沢　由紀子**

各地で収録された動画を見ながらの審査となった「第４２回少年の主張全国大会」。例年とは異なる方式で開かれた大会は、参加した中学生たちの発表の内容にも、新型コロナウイルス感染拡大の影響がみられた。部活動の大会が中止になった衝撃、友や先生の励ましで気持ちを切り替え、限られた環境で頑張ることの充実感ーー。異例の状況の中で奮闘する生徒たちの姿が目に浮かび、心強く感じた。

文部科学大臣賞を受けた栃木県代表、荒井千恵理さんもその一人だ。剣道部の大会が中止になり、学校再開後の行事も大幅に縮小された。そのなかで荒井さんは、剣道とともに打ち込んできた書道の世界に、希望を見いだしたという。こういう時だからこそ、「動」から「静」に転換し、自己をみつめる時間を大切にしたいという提案だ。在宅勤務や外出自粛を余儀なくされた大人にも共感を呼ぶ内容だったのではないか。

コロナの影響に直接触れた発表以外でも、「時間」について改めて考えさせられる内容が目に付いた。長野県代表の向彩音さんは、昨年の台風１９号で大きな被害を受けた近隣の地域で復興ボランティアの活動に携わった体験をつづった。何度も被災地を訪れて泥のかき出し作業などを続ける母の姿に影響されたのが参加のきっかけだった。初めて作業に出かけた日、帰宅後に母からかけられた「時間の大切さがわかった？」という言葉が印象的だ。自分の時間を人のために役立てられるというかけがえのない体験をしたーー。彩音さんは心から実感したという。

審査委員会委員長賞を受けた静岡県代表、村松グルン良智美さんの発表も興味深かった。父の祖国、ネパールを訪れた時のことを振り返る内容だ。ヒマラヤ山脈の標高二千メートルの村に父の実家はある。スマートフォンもゲームもない環境に当初は戸惑ったが、村人たちの心温まるもてなしを受け、印象は変わっていった。何をするにも「ビスタリ、ビスタリ（ゆっくり､ゆっくり）」と笑顔で声をかけられ､「幸せな生活とは何か」ということを考えたという良智美さん。日本では、「早くしなさい」と言われるのが日常だったからだ。「広い視野を持って世界をながめること。きっとそこにはいろいろな人生の生き方があるはずです。ネパールの山々が教えてくれました」と発表は締めくくられた。

私たち大人も、今の時代を懸命に生きる中学生の発表から、前向きな姿勢と多様な視点を教えてもらっている。

## あなたが大賞！

内閣府政策統括官（政策調整担当）付　参事官（青少年企画担当）
**御厩　祐司**

もし、この文章を読んでいるあなたが、何か強く心をゆり動かされることがあって、そのことを他の人にも是非わかってもらいたくて、「少年の主張」に応募された方だとしたら、私はあなたに「大賞」を差し上げたいと思います。

「大賞」などという賞は、実際にはありません。ですが、どうしても人に伝えずにはおられなくなるような体験をし、その体験をもとに自分の頭で考えたことを、「どうすれば多くの人に伝わるだろうか」と試行錯誤しながら、自分の言葉で表現された方は、それだけで賞に値すると思うのです。

とはいえ、残念ながら現実には差し上げられる賞の数は限られており、審査をしなければなりません。どう審査したらよいか、かなり悩みました。私は、青少年のみなさんが、様々な困難を乗り越え、すこやかに成長できるよう、環境を整えることを仕事にしています。ですから、それを読んだ多くの青少年が共感でき、生きる勇気を得られるような作品を「大賞」の中から選びたい。そう思いながら、原稿を読ませていただきました。

内閣総理大臣賞に選ばれた池島音羽さんの作品はまさに、そんな「共感ポイント」が満載で、生きる勇気がわいてくるような作品でした。誰もがあう可能性があるいじめ、突然始まるいじめの恐ろしさ。お母さん、味噌汁の温かさ。困難な状況に固まってしまう弱さと、自分から一歩踏み出してみる強さ。対比（コントラスト）が効いていて、とても説得力がありました。

「いじめは、そんな簡単にやまないよ」。そう思った人もいるかもしれません。確かに、私たちが直面する問題には、すぐには解決しないものも多いです。ですが、そんな悩ましい問題こそ、ひとりで抱え込まず、誰かに助けを求めてください。苦しいときに、それを言葉にして SOS を出せる。そんな勇気あるあなたも、「大賞」モノだと思います。

# 今後も挑戦し続ける皆様、御活躍を！

文部科学省　総合教育政策局　地域学習推進課長
**横井　理夫**

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、今年の「少年の主張全国大会」は開催方法が web 開催となりました。皆様の発表を直接お聞きすることができなかったことは、大変残念ではありましたが、中止ではなく web 開催となり、皆様のお話をお聞きできたことは良かったです。１２名の方々の発表は、考えや思いを自分なりに表現され、それぞれ大変素晴らしい内容で、審査員として点数を付ける際に大変悩みました。事前に録画されたものであることを忘れるくらい、臨場感あふれるものもありました。一方、撮影方法によって少し伝わりにくくなる可能性があることが課題と感じました。

さて、今回、文部科学大臣賞を受賞された、栃木県代表の荒井千恵理さんの発表は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、今この時を「静」の時間として過ごすべきと考える、というものでした。誰かがどうにかしてくれるのを待つだけでなく、持続可能な新しい暮らし方を自分たちも考えなくてはならない、という能動的な態度で、自分らしく考えて実践していきますと、主張されました。これを聞いて、心が少し明るくなったのは、私だけではないと思います。内閣総理大臣賞を受賞された、鹿児島県代表の池島音羽さんの発表は、情報化社会の中で人と人とのつながりの大切さを主張されていたのが印象的でした。国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞された愛知県代表の戸塚優羽さんの発表は、自己理解が他者理解につながるといった共生社会の実現に向けた可能性を強く感じました。

全国大会に残られた１２名の方、さらには、惜しくも全国大会の１２名に入らなかった応募者の皆様の「少年の主張全国大会」への挑戦は、大変素晴らしいものだったと思います。皆様は、自らの体験、実践を踏まえて主張を発表する、という挑戦をされました。今回の挑戦によって得られたものは、将来、かけがえのない宝物になると思います。今後も挑戦し続ける皆様の御活躍を期待しております。

# 少年の主張全国大会を振り返って

## ＜参考資料＞

# 「少年の主張全国大会」応募者数の推移

| 開催年度 | 開催回数 | 参加学校数 | 応募者総数（人） | 中学校在学者数（人） | 在学者数に対する応募者の割合 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1979（昭和 54）年 | 第 1 回 | – | – | 約 496 万 7 千 | – |
| 1980（昭和 55）年 | 第 2 回 | – | – | 約 509 万 4 千 | – |
| 1981（昭和 56）年 | 第 3 回 | – | 約 50,000 | 約 529 万 9 千 | 0.9% |
| 1982（昭和 57）年 | 第 4 回 | – | 約 62,000 | 約 562 万 4 千 | 1.1% |
| 1983（昭和 58）年 | 第 5 回 | – | 約 120,000 | 約 570 万 7 千 | 2.1% |
| 1984（昭和 59）年 | 第 6 回 | – | 約 250,000 | 約 582 万 9 千 | 4.3% |
| 1985（昭和 60）年 | 第 7 回 | 3,524 | 387,272 | 約 599 万 0 千 | 6.5% |
| 1986（昭和 61）年 | 第 8 回 | 3,649 | 269,518 | 約 610 万 6 千 | 4.4% |
| 1987（昭和 62）年 | 第 9 回 | 4,162 | 536,526 | 約 608 万 1 千 | 8.8% |
| 1988（昭和 63）年 | 第 10 回 | 4,011 | 661,234 | 約 589 万 6 千 | 11.2% |
| 1989（平成 元）年 | 第 11 回 | 4,359 | 774,035 | 約 561 万 9 千 | 13.8% |
| 1990（平成 2）年 | 第 12 回 | 4,103 | 701,183 | 約 536 万 9 千 | 13.1% |
| 1991（平成 3）年 | 第 13 回 | 4,176 | 735,862 | 約 518 万 8 千 | 14.1% |
| 1992（平成 4）年 | 第 14 回 | 4,185 | 846,735 | 約 503 万 7 千 | 16.8% |
| 1993（平成 5）年 | 第 15 回 | 4,166 | 812,370 | 約 485 万 0 千 | 16.7% |
| 1994（平成 6）年 | 第 16 回 | 4,165 | 826,575 | 約 468 万 1 千 | 17.7% |
| 1995（平成 7）年 | 第 17 回 | 4,021 | 757,791 | 約 457 万 0 千 | 16.6% |
| 1996（平成 8）年 | 第 18 回 | 4,333 | 765,071 | 約 452 万 7 千 | 16.9% |
| 1997（平成 9）年 | 第 19 回 | 4,245 | 836,467 | 約 448 万 1 千 | 18.7% |
| 1998（平成 10）年 | 第 20 回 | 4,170 | 858,146 | 約 438 万 1 千 | 19.6% |
| 1999（平成 11）年 | 第 21 回 | 4,213 | 868,574 | 約 424 万 4 千 | 20.5% |
| 2000（平成 12）年 | 第 22 回 | 4,187 | 802,185 | 約 410 万 4 千 | 19.5% |
| 2001（平成 13）年 | 第 23 回 | 4,185 | 790,383 | 約 399 万 2 千 | 19.8% |
| 2002（平成 14）年 | 第 24 回 | 4,059 | 693,114 | 約 392 万 9 千 | 17.6% |
| 2003（平成 15）年 | 第 25 回 | 3,841 | 534,730 | 約 374 万 8 千 | 14.3% |
| 2004（平成 16）年 | 第 26 回 | 3,822 | 551,723 | 約 366 万 4 千 | 15.1% |
| 2005（平成 17）年 | 第 27 回 | 3,944 | 542,032 | 約 362 万 6 千 | 14.9% |
| 2006（平成 18）年 | 第 28 回 | 4,015 | 544,120 | 約 360 万 2 千 | 15.1% |
| 2007（平成 19）年 | 第 29 回 | 4,044 | 510,763 | 約 361 万 5 千 | 14.1% |
| 2008（平成 20）年 | 第 30 回 | 4,018 | 498,029 | 約 359 万 2 千 | 13.9% |
| 2009（平成 21）年 | 第 31 回 | 4,126 | 511,519 | 約 360 万 0 千 | 14.2% |
| 2010（平成 22）年 | 第 32 回 | 4,204 | 515,232 | 約 355 万 8 千 | 14.4% |
| 2011（平成 23）年 | 第 33 回 | 4,142 | 524,061 | 約 357 万 3 千 | 14.6% |
| 2012（平成 24）年 | 第 34 回 | 4,127 | 550,112 | 約 356 万 7 千 | 15.4% |
| 2013（平成 25）年 | 第 35 回 | 4,257 | 565,500 | 約 353 万 6 千 | 16.0% |
| 2014（平成 26）年 | 第 36 回 | 4,172 | 563,777 | 約 350 万 4 千 | 16.1% |
| 2015（平成 27）年 | 第 37 回 | 4,253 | 547,977 | 約 346 万 5 千 | 15.8% |
| 2016（平成 28）年 | 第 38 回 | 4,278 | 555,559 | 約 340 万 6 千 | 16.3% |
| 2017（平成 29）年 | 第 39 回 | 4,188 | 542,236 | 約 333 万 3 千 | 16.3% |
| 2018（平成 30）年 | 第 40 回 | 4,298 | 522,229 | 約 325 万 1 千 | 16.1% |
| 2019（令和 元）年 | 第 41 回 | 4,171 | 496,492 | 約 321 万 8 千 | 15.4% |
| 2020（令和 2）年 | 第 42 回 | 2,660 | 252,732 | 約 321 万 1 千 | 7.9% |

※中学校在学者数は、文部科学省令和 2 年度学校基本調査（確定値）区分「中学校」を参考にしています。

# 「少年の主張全国大会」への都道府県出場状況

平成 21 年度から：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣賞　◆国立青少年教育振興機構理事長賞　★審査委員会委員長賞
平成 19 ～ 20 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長賞
平成 13 ～ 18 年度：■内閣総理大臣賞　●文部科学大臣奨励賞　▼青少年育成国民会議会長特別賞　★審査委員会特別賞
平成 12 年度まで：■内閣総理大臣賞　◎総務庁長官賞　●文部大臣賞　★審査委員会特別賞　＊審査委員長激励賞　※○は、上記受賞者以外の出場都道府県

| ブロック | | 県名 | S54 | S55 | S56 | S57 | S58 | S59 | S60 | S61 | S62 | S63 | H1 | H2 | H3 | H4 | H5 | H6 | H7 | H8 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 | H16 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 | R1 | R2 | 出場回数 | 県名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 北海道・東北 | 1 | 北海道 | ◎ | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | | | ● | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | 10 | 北海道 |
| | 2 | 青森県 | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | ■ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 青森県 |
| | 3 | 岩手県 | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | ○ | | ● | ● | | | ○ | ○ | | ★ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | 17 | 岩手県 |
| | 4 | 宮城県 | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | | ○ | ● | ○ | | | ■ | | ○ | | ○ | | ★ | ○ | 19 | 宮城県 |
| | 5 | 秋田県 | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | ● | | ○ | | ○ | | | | ● | | ○ | | | ○ | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | | | 11 | 秋田県 |
| | 6 | 山形県 | | | | | | | | ★ | | ★ | ● | | ★ | ★ | | | | | | ■ | | | | | ■ | | ★ | | | | | | | | | ● | | ○ | | ■ | | | 11 | 山形県 |
| | 7 | 福島県 | ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | ◎ | | | ★ | | | | | | ○ | ○ | | | ★ | | | ○ | ○ | | | | ■ | ★ | | | | ○ | | | ○ | ○ | 14 | 福島県 |
| 2 関東・甲信越静 | 8 | 茨城県 | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | ● | | | | ★ | ◎ | | | ● | | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | 12 | 茨城県 |
| | 9 | 栃木県 | ◎ | | | ■ | ◎ | | | | | | | | | | | ◎ | ○ | | | | ■ | | | | | ★ | | ○ | | | | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | ● | 12 | 栃木県 |
| | 10 | 群馬県 | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | ＊ | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | ★ | | ◆ | | | | 7 | 群馬県 |
| | 11 | 埼玉県 | | | | ○ | | | ★ | | | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | ● | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | 9 | 埼玉県 |
| | 12 | 千葉県 | | | | | | | | ○ | | ○ | ★ | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | | ■ | ○ | | | | ○ | | | | 10 | 千葉県 |
| | 13 | 東京都 | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | ★ | | | ★ | | ○ | ○ | ★ | ■ | | | ◎ | | ■ | | ○ | ○ | ▼ | | | | | ○ | ◆ | | | ○ | ● | | | | ■ | | 21 | 東京都 |
| | 14 | 神奈川県 | ○ | | | | | | | | | | | | ★ | ★ | ○ | | | | ★ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | 7 | 神奈川県 |
| | 15 | 新潟県 | | ■ | ○ | | ● | ● | ◎ | | ★ | | ★ | ★ | ◎ | | | | | | | ○ | | ◎ | | | | | | | | ○ | ★ | ○ | ● | | | | | ★ | ■ | | | | 17 | 新潟県 |
| | 16 | 山梨県 | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | ■ | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | ◆ | | 11 | 山梨県 |
| | 17 | 長野県 | | | | | | ○ | | | | | | | | | ● | | | | | | | ○ | | ★ | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | 10 | 長野県 |
| | 18 | 静岡県 | | | | | | ○ | | | | ◎ | | | | | | | | ★ | ○ | ○ | ○ | | ★ | | | | ○ | | | | ◆ | ■ | | ○ | | | | | | | ★ | ★ | ★ | 14 | 静岡県 |
| 3 中部・近畿 | 19 | 富山県 | | ○ | | ○ | | ◎ | | | | ○ | | | | ◎ | | ○ | | ○ | | ○ | | ★ | | | ★ | ▼ | | ○ | | ▼ | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | | 16 | 富山県 |
| | 20 | 石川県 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | 8 | 石川県 |
| | 21 | 福井県 | | | | | | | | ○ | ● | | ◎ | | ○ | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | ● | | ○ | | | | | | | 8 | 福井県 |
| | 22 | 愛知県 | | | | | | | ■ | | | | | | | | ○ | | ● | | | | | | | | | ○ | ○ | ▼ | ■ | | | ● | | ○ | ★ | | ○ | | ★ | ★ | | ◆ | 14 | 愛知県 |
| | 23 | 三重県 | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | ★ | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | ◆ | | | ○ | | 9 | 三重県 |
| | 24 | 岐阜県 | ◎ | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | | | ▼ | | | | | | | | ○ | | | | | ■ | | | | ○ | 9 | 岐阜県 |
| | 25 | 滋賀県 | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ★ | ○ | | | | ○ | | | | ● | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | 11 | 滋賀県 |
| | 26 | 京都府 | | | | | | | | ○ | ○ | ★ | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | | 9 | 京都府 |
| | 27 | 大阪府 | ◎ | | ● | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | ● | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | ◆ | | | | | ○ | 11 | 大阪府 |
| | 28 | 兵庫県 | | | ○ | ◎ | | | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ◆ | | | | | | | | 13 | 兵庫県 |
| | 29 | 奈良県 | ○ | | | | ○ | | | | | | ○ | ★ | | | ○ | | | | ★ | | | ● | | ○ | | | | ○ | | | ★ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | | | 13 | 奈良県 |
| | 30 | 和歌山県 | | | | | ○ | | | | ○ | | ★ | | | | ★ | | | | | | | | ★ | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | 8 | 和歌山県 |
| 4 中国・四国 | 31 | 鳥取県 | | | | | | | ○ | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | ○ | 5 | 鳥取県 |
| | 32 | 島根県 | | | | | ○ | ○ | | ◎ | | | | | ■ | | | ○ | | ● | ◎ | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ★ | | ○ | | | ★ | | ○ | ● | ● | ○ | ★ | 21 | 島根県 |
| | 33 | 岡山県 | ◎ | | | | | | | | ◎ | | ○ | ○ | | | ★ | | ■ | | | | ★ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | | | 10 | 岡山県 |
| | 34 | 広島県 | | ◎ | | ● | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | ■ | ● | | | | | 8 | 広島県 |
| | 35 | 山口県 | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | ◎ | | | | | | ■ | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | 7 | 山口県 |
| | 36 | 徳島県 | | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | ○ | | | ★ | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | 8 | 徳島県 |
| | 37 | 香川県 | ○ | ● | | | | | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 7 | 香川県 |
| | 38 | 愛媛県 | ○ | | ■ | | | | | | ★ | ■ | | ■ | | ■ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ★ | | | | | | | | | ▼ | | | ◆ | | | | | | | | | ○ | | 14 | 愛媛県 |
| | 39 | 高知県 | | | | | ■ | | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | ○ | ◆ | | | | | | | 7 | 高知県 |
| 5 九州 | 40 | 福岡県 | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | ★ | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | ■ | ○ | | ○ | | | | 9 | 福岡県 |
| | 41 | 佐賀県 | ◎ | | ○ | | | ○ | | | | | ■ | | ● | | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | 8 | 佐賀県 |
| | 42 | 長崎県 | | | | | | ■ | ● | | ■ | | | | | ★ | | | | | | ○ | | | | ■ | ○ | | | | | | | ★ | | | ○ | | | ○ | | | | | 10 | 長崎県 |
| | 43 | 熊本県 | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | ◎ | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | | ● | | ■ | ○ | | | ◆ | | | | ○ | | ◆ | ● | ★ | 16 | 熊本県 |
| | 44 | 大分県 | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | ■ | | | | ● | | | | | ○ | ○ | | 9 | 大分県 |
| | 45 | 宮崎県 | | | | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | ★ | | | ○ | | | | ○ | | | | ● | | ■ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | 10 | 宮崎県 |
| | 46 | 鹿児島県 | | | ◎ | ○ | | | | ● | | | | ○ | ○ | | | | | | ● | | ○ | ■ | ▼ | ○ | | | ○ | ■ | ○ | | | | | | | | | | ★ | | | ■ | 15 | 鹿児島県 |
| | 47 | 沖縄県 | | ○ | | | | | | ★ | ○ | | | | | | ◎ | ■ | | | ○ | | | | | ▼ | ○ | | | | | ● | | | ○ | ○ | | ★ | ★ | | | | | | 13 | 沖縄県 |
| | | 合計 | 16 | 11 | 12 | 12 | 13 | 12 | 12 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 13 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 13 | 13 | 13 | 12 | 12 | 13 | 13 | 13 | 13 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 12 | 524 | |

# 「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

| 回数 | 年度 | 受賞名 | 都道府県名 | 学校名 | 学年 | 氏名 | 発表テーマ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 昭和 | 総理府総務長官賞 | 北海道 | 利尻町立沓形中学校 | 3 年 | 池原広文 | 校門に思う |
| | 54 年度 | 総理府総務長官賞 | 栃木 | 塩谷町立大宮中学校 | 3 年 | 小堀芳広 | 私の希望 |
| | | 総理府総務長官賞 | 岐阜 | 美山町立美山北中学校 | 1 年 | 尾関良子 | 私の家庭 |
| | | 総理府総務長官賞 | 大阪 | 豊中市立第 5 中学校 | 1 年 | 長岡信男 | はばたけ未来に |
| | | 総理府総務長官賞 | 岡山 | 倉敷市立黒崎中学校 | 1 年 | 中野恵美 | 私の訴えたいこと |
| | | 総理府総務長官賞 | 佐賀 | 武雄市立川登中学校 | 3 年 | 松尾直子 | 少年として訴えたいこと |
| 第 2 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 新潟 | 村上市立村上第 1 中学校 | 3 年 | 江見寛子 | 今、私達にできること |
| | 55 年度 | 総理府総務長官賞 | 広島 | 福山市立城東中学校 | 3 年 | 森雅子 | 生きる |
| | | 文部大臣賞 | 香川 | 三野町立三野津中学校 | 3 年 | 佐川圭三 | 「やべち」に学ぶ |
| 第 3 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 愛媛 | 松山市立雄新中学校 | 3 年 | 早川明美 | 心の糧 |
| | 56 年度 | 総理府総務長官賞 | 鹿児島 | 鹿児島市立西紫原中学校 | 2 年 | 寺田美重 | 身障者として訴えたいこと |
| | | 文部大臣賞 | 大阪 | 堺市立庭代台中学校 | 3 年 | 寺西洋子 | 受験・仲間・心 |
| 第 4 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 栃木 | 佐野市立城東中学校 | 3 年 | 松本由紀子 | 私は教師になりたい |
| | 57 年度 | 総理府総務長官賞 | 兵庫 | 神戸市立御影中学校 | 1 年 | 和田浩介 | 少年として訴えたいこと ~ エチオピアで見たことから ~ |
| | | 文部大臣賞 | 広島 | 呉市立両城中学校 | 2 年 | 竹下愛 | 私の決心 |
| 第 5 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 高知 | 伊野町立伊野中学校 | 1 年 | 山勢憲一郎 | 心をこめて「ありがとう」 |
| | 58 年度 | 総理府総務長官賞 | 栃木 | 宇都宮市立星が丘中学校 | 3 年 | 福田寿美江 | 両親に学ぶ |
| | | 文部大臣賞 | 新潟 | 六日市町立六日町中学校 | 3 年 | 関　昭典 | 今、学校で考えていること |
| 第 6 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 長崎 | 有家町立有家中学校 | 2 年 | 松島吉宏 | 鳴らないチャイム |
| | 59 年度 | 総務庁長官賞 | 富山 | 小杉町立小杉中学校 | 1 年 | 定司美恵子 | 私の希望 |
| | | 文部大臣賞 | 新潟 | 巻町立巻西中学校 | 3 年 | 小林三枝 | 乗り越えて今 |
| 第 7 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 愛知 | 名古屋市立宮中学校 | 3 年 | 大島幸子 | 今だから言える |
| | 60 年度 | 総務庁長官賞 | 新潟 | 黒川村立黒川中学校 | 3 年 | 中野克英 | 寺に生まれて |
| | | 文部大臣賞 特別賞 | 長崎 | 西有家町立西有家中学校 | 3 年 | 安達かよ | その時私は |
| | | 文部大臣賞 特別賞 | 埼玉 | 秩父市立大田中学校 | 2 年 | 中田昌伸 | 僕の家「酪農家の跡継ぎとして」 |
| 第 8 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 香川 | 丸亀市立南中学校 | 1 年 | 垂水希実枝 | ありのままの姿で |
| | 61 年度 | 総務庁長官賞 | 島根 | 出雲市立出雲第二中学校 | 3 年 | 米原のぞみ | 「のぞみって・・・」母の言葉に生きる |
| | | 文部大臣賞 | 鹿児島 | 末吉町立末吉中学校 | 2 年 | 白鳥哲也 | 手話から学んだこと |
| | | 特別賞 | 山形 | 長井市立北中学校 | 3 年 | 佐藤真理 | 一通の手紙から |
| | | 特別賞 | 沖縄 | 名護市立東江中学校 | 1 年 | 大城洋子 | 目標に向かって |
| 第 9 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 長崎 | 県立野崎養護学校中学部 | 2 年 | 野田綾子 | 心で握手 |
| | 62 年度 | 総務庁長官賞 | 岡山 | 倉敷市立新田中学校 | 1 年 | 岡田良平 | 僕の弟 |
| | | 文部大臣賞 | 福井 | 武生市立武生第一中学校 | 2 年 | 谷口敏和 | いじめられっ子を教え！ |
| | | 特別賞 | 新潟 | 津南町立津南中学校 | 3 年 | 小野寺優子 | 恵福園のおばあちゃん |
| | | 特別賞 | 愛媛 | 伊予市立港南中学校 | 3 年 | 一色寿恵 | 創り出す喜びを胸に |
| 第 10 回 | 昭和 | 内閣総理大臣賞 | 愛媛 | 松山市立勝山中学校 | 3 年 | 瀧本則隆 | 心をみがく ~ ロシア人墓地の清掃活動を通して ~ |
| | 63 年度 | 総務庁長官賞 | 静岡 | 島田市立島田第一中学校 | 3 年 | 大石寿宏 | 国際化を考える |
| | | 文部大臣賞 | 鳥取 | 東郷町立東郷中学校 | 3 年 | 石賀正元 | 生きる幸せ |
| | | 特別奨励賞 | 山形 | 平田町立飛鳥中学校 | 3 年 | 冨樫美起 | 国際社会への目覚め |
| | | 特別奨励賞 | 東京 | 私立桐朋女子中学校 | 3 年 | 正木綾 | 勉強より大事な勉強 |
| | | 特別奨励賞 | 京都 | 京北町立周山中学校 | 3 年 | 山田義治 | 人間の生き方について思うこと |
| 第 11 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 佐賀 | 私立佐賀清和中学校 | 3 年 | 久冨薫 | 地球にやさしく |
| | 元年度 | 総務庁長官賞 | 福井 | 鯖江市立中央中学校 | 2 年 | 吉田正樹 | 努力のすばらしさ |
| | | 文部大臣賞 | 山形 | 鶴岡市立鶴岡第四中学校 | 3 年 | 阿部幸 | 生きているということ |
| | | 特別奨励賞 | 千葉 | 大多喜町立大多喜中学校 | 2 年 | 張本敏美 | 私の名前は張本敏美 |
| | | 特別奨励賞 | 新潟 | 枕崎市立松浜中学校 | 3 年 | 石黒葉子 | 我が家の躾 |
| | | 特別奨励賞 | 和歌山 | 美里町立美里中学校 | 3 年 | 今岡万純 | 祖父の看病を通して |
| 第 12 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 愛媛 | 今治市立南中学校 | 2 年 | 馬越裕美 | 兄貴に乾杯 |
| | 2 年度 | 総務庁長官賞 | 福島 | 福島市立福島第一中学校 | 3 年 | 市原亮 | 部活動から学んだもの |
| | | 文部大臣賞 | 茨城 | 水戸市立国田中学校 | 3 年 | 宮田敦子 | 自然を大切に |
| | | 特別奨励賞 | 新潟 | 新井市立新井中学校 | 3 年 | 伊藤よし子 | この手にかける私の願い |
| | | 特別奨励賞 | 滋賀 | 栗東町立栗東西中学校 | 3 年 | 勝西紀之 | 人のためになること・・・ |
| | | 特別奨励賞 | 奈良 | 明日香村立聖徳中学校 | 3 年 | 飛鳥朝子 | 母の言葉を聞いて |
| 第 13 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 島根 | 三隅町立三隅中学校 | 3 年 | 吉村幸雄 | ぼくの夢 |
| | 3 年度 | 総務庁長官賞 | 新潟 | 弥彦村立弥彦中学校 | 3 年 | 皆川辰男 | 長男の宿命から |
| | | 文部大臣賞 | 佐賀 | 私立佐賀清和中学校 | 2 年 | 城島澄子 | 地球のなみだ |
| | | 審査委員会特別賞 | 山形 | 山形大学教育学部附属中学校 | 3 年 | 佐藤郁子 | 今、私達が街をつくる |
| | | 審査委員会特別賞 | 東京 | 多摩市立貝取中学校 | 3 年 | 末吉優子 | ボランティア活動と本当の目 |
| | | 審査委員会特別賞 | 神奈川 | 私立函嶺白百合学園中学校 | 1 年 | 早川幸恵 | 帰りを待つ人々 |
| 第 14 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 愛媛 | 松山市立西中学校 | 2 年 | 泉正徳 | 苦しみも悲しみも肥料に |
| | 4 年度 | 総務庁長官賞 | 富山 | 魚津市立西部中学校 | 2 年 | 高谷朋花 | 七十点の両親が最高 |
| | | 文部大臣賞 | 北海道 | 弟子屈町立弟子屈中学校 | 3 年 | 横川心 | 命、育んで |
| | | 審査委員会特別賞 | 山形 | 山形大学教育学部附属中学校 | 3 年 | 伊豆田あかり | 心と外見 |
| | | 審査委員会特別賞 | 神奈川 | 横浜市立洋光台第二中学校 | 3 年 | 山谷明子 | 私の夢 |
| | | 審査委員会特別賞 | 長崎 | 福江市立福江中学校 | 1 年 | 平山長富 | 心の鐘 |
| | | 審査委員会特別賞 | 宮崎 | 宮崎市立宮崎東中学校 | 3 年 | 泉裕一郎 | 待っていた学校週五日制 |
| 第 15 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 青森 | 十和田市立犬深内中学校 | 2 年 | 大久保礼子 | 今を大切に |
| | 5 年度 | 総務庁長官賞 | 沖縄 | 石垣市立石垣中学校 | 3 年 | 金城紫穂 | ぬくもり |
| | | 文部大臣賞 | 長野 | 更埴市立屋代中学校 | 3 年 | 松沢かおる | プルタブと私 |
| | | 審査委員会特別賞 | 福島 | 本宮町立本宮第一中学校 | 3 年 | 国分かおり | 「生きる」ということ |
| | | 審査委員会特別賞 | 和歌山 | 下津町立下津第二中学校 | 1 年 | 浜英樹 | 僕の育った塩津で |
| | | 審査委員会特別賞 | 岡山 | 倉敷市立福田南中学校 | 1 年 | 阪本真一 | レイ = アイクマンそれは本当の友達 |
| | | 審査委員長激励賞 | 群馬 | 県立盲学校中学部 | 3 年 | 長峰美枝 | 私の夢 |

| 回数 | 年度 | 受賞名 | 都道府県名 | 学校名 | 学年 | 氏名 | 発表テーマ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第 16 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 沖縄 | 沖縄市立山内中学校 | 3 年 | 稲嶺彩子 | 夢を持って |
| | 6 年度 | 総務庁長官賞 | 栃木 | 私立作新学院中等部 | 3 年 | 高内めぐみ | 父が教えてくれたこと |
| | | 文部大臣賞 | 秋田 | 平鹿町立醍醐中学校 | 3 年 | 菅原嘉治 | りんご農家に生まれて |
| | | 審査委員会特別賞 | 茨城 | 協和町立協和中学校 | 3 年 | 河田友里 | 力強く、わたしは生きたい |
| 第 17 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 岡山 | 倉敷市立西中学校 | 1 年 | 小野めぐみ | 私の戦い |
| | 7 年度 | 総務庁長官賞 | 茨城 | 協和町立協和中学校 | 2 年 | 中里成喜 | 自分自身に克つために |
| | | 文部大臣賞 | 愛知 | 旭町立旭中学校 | 3 年 | 安藤佳代子 | 旭の町に生きる |
| | | 審査委員会特別賞 | 東京 | 荒川区立日暮里中学校 | 1 年 | 高宗哲 | 僕たちにできること |
| | | 審査委員会特別賞 | 福岡 | 勝山町立勝山中学校 | 2 年 | 義経千晶 | 勇気を |
| 第 18 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 東京 | 台東区立下谷中学校 | 3 年 | 岡村朋子 | 蜘蛛の巣 |
| | 8 年度 | 総務庁長官賞 | 熊本 | 山鹿市立鶴城中学校 | 3 年 | 神崎真由 | 私の試験 |
| | | 文部大臣賞 | 島根 | 西郷町立西郷南中学校 | 1 年 | 常角和代 | 広い目で |
| | | 審査委員会特別賞 | 静岡 | 沼津市立第五中学校 | 3 年 | 露木義章 | A 先輩から学んだこと |
| | | 審査委員会特別賞 | 三重 | 私立皇學館中学校 | 2 年 | 宮本真衣 | 海の命を守ろう ~ おばあさんに教えられたこと ~ |
| 第 19 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 山梨 | 韮崎市立韮崎東中学校 | 3 年 | 高保かおり | 在宅介護から考えたこと |
| | 9 年度 | 総務庁長官賞 | 島根 | 西郷町立西郷南中学校 | 3 年 | 吉田修 | きゅうり |
| | | 文部大臣賞 | 鹿児島 | 有明町立宇都中学校 | 3 年 | 坂口潤成 | 僕の町 - 僕の夢 |
| | | 審査委員会特別賞 | 神奈川 | 山北町立清水中学校 | 1 年 | 武尾一興 | 中学生になって |
| | | 審査委員会特別賞 | 奈良 | 生駒市立緑ヶ丘中学校 | 1 年 | 中地まりあ | 自然の魂 |
| 第 20 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 山形 | 長井市立長井南中学校 | 3 年 | 鈴木智恵 | ビナアダム、私の道しるべとして |
| | 10 年度 | 総務庁長官賞 | 山口 | 徳山市立岐陽中学校 | 3 年 | 川崎祐樹 | 同じ人間だから |
| | | 文部大臣賞 | 茨城 | 阿見町立阿見中学校 | 3 年 | 湯原瑞紀 | みんなで学校を創ろう |
| | | 審査委員会特別賞 | 愛媛 | 肱川町立肱川中学校 | 3 年 | 竹本咲子 | うちは五人家族 |
| 第 21 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 栃木 | 西那須野町立西那須野中学校 | 3 年 | 松林朝子 | 家族と支えあう中で |
| | 11 年度 | 総務庁長官賞 | 東京 | 港区立青山中学校 | 3 年 | 秋田絵麻 | 本当の幸せとは・・・ |
| | | 文部大臣賞 | 滋賀 | 石部町立石部中学校 | 3 年 | 中川智香子 | さわやかな学校をめざして ~ トイレからの発信 ~ |
| | | 審査委員会特別賞 | 岡山 | 倉敷市立西中学校 | 3 年 | 花田春香 | あなたは、我らが日本愛してますか？ |
| 第 22 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 鹿児島 | 喜界町立第二中学校 | 3 年 | 前泊佑香 | 島うたの心を伝えたい |
| | 12 年度 | 総務庁長官賞 | 新潟 | 六日町立六日町中学校 | 1 年 | 天海琢磨 | ぼくは僕 |
| | | 文部大臣奨励賞 | 奈良 | 私立智辯学園中学校 | 1 年 | 北側真由佳 | 私のバリアフリーの第一歩 |
| | | 審査委員会特別賞 | 富山 | 高岡市立南星中学校 | 3 年 | 炭谷英信 | 言葉の思い出から学んだもの |
| 第 23 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 東京 | 足立区立第十四中学校 | 1 年 | 荒谷真理子 | 努力が教えてくれた事 |
| | 13 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 大阪 | 大阪明星学園明星中学校 | 3 年 | 植田倫啓 | 「ケータイ」と「僕」 |
| | | 国民会議会長特別賞 | 鹿児島 | 志布志町立志布志中学校 | 2 年 | 西国領君嘉 | 日本の心を舞う |
| | | 審査委員会特別賞 | 静岡 | 下田市立稲生沢中学校 | 3 年 | 河井千佳 | 私の個性 |
| | | 審査委員会特別賞 | 和歌山 | 和歌山市立東和中学校 | 3 年 | 岩橋聖恵 | 妹の笑顔 |
| 第 24 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 長崎 | 島原市立第三中学校 | 3 年 | 西誠 | これから頑張るんだ |
| | 14 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 秋田 | 神岡町立平和中学校 | 3 年 | 杉澤綾香 | ホームスティとホストファミリー体験記 |
| | | 国民会議会長特別賞 | 沖縄 | 浦添市立港川中学校 | 2 年 | 渡慶次オースティン誠 | ダブルの人生を過ごしたい |
| | | 審査委員会特別賞 | 長野 | 大町市立第一中学校 | 3 年 | 柴原理志 | 揺るがない想い |
| 第 25 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 山形 | 山形市立蔵王第一中学校 | 2 年 | 澤田充史 | 僕の見たヒロシマ |
| | 15 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 宮崎 | 山之口町立山之口中学校 | 1 年 | 徳留彩乃 | 私になりたい |
| | | 国民会議会長特別賞 | 岐阜 | 七宗町立神渕中学校 | 2 年 | 上野由貴 | 世界が一つになるために |
| | | 審査委員会特別賞 | 福島 | 霊山町立霊山中学校 | 3 年 | 佐藤寛和 | ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 - |
| | | 審査委員会特別賞 | 富山 | 高岡市立伏木中学校 | 3 年 | 飯田優里香 | かっちゃが支える伏木の絆 |
| 第 26 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 山口 | 長門市立深川中学校 | 2 年 | 中嶋詩織 | ともに生きる |
| | 16 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 岩手 | 北上市立南中学校 | 3 年 | 菅原周平 | 噺の言葉と言葉の話 |
| | | 国民会議会長特別賞 | 富山 | 氷見市立南部中学校 | 2 年 | 沈道　静 | 茶道の香りが教えてくれたこと |
| | | 審査委員会特別賞 | 栃木 | 真岡市立真岡中学校 | 3 年 | 菱沼優希 | 受け継がれる命 - その重さを ・・・・・・ |
| | | 審査委員会特別賞 | 徳島 | 那賀川町立那賀川中学校 | 3 年 | 坪井克裕 | 今、訴えたいこと |
| 第 27 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 宮崎 | 三股町立三股中学校 | 3 年 | 福田聖伍 | 命をつなぐアサガオ |
| | 17 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 岩手 | 盛岡市立上田中学校 | 3 年 | 坂本潤奈 | 私は地球人 |
| | | 国民会議会長特別賞 | 東京 | 墨田区立立花中学校 | 3 年 | 渡辺隆介 | 今に生かそう「江戸仕草」を |
| | | 審査委員会特別賞 | 山形 | 南陽市立宮内中学校 | 3 年 | 平　暁祐 | 「とんと音」を未来へ |
| 第 28 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 鹿児島 | 姶良町立山田中学校 | 1 年 | 新薗祐花 | 今を生きる私 |
| | 18 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 熊本 | 南阿蘇村立白水中学校 | 3 年 | 後藤奈々 | 私と沖縄 |
| | | 国民会議会長特別賞 | 愛知 | 豊田市立崇化館中学校 | 3 年 | 蒋ぶんてい | 為什公、そして謝々 |
| 第 29 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 愛知 | 豊田市立美里中学校 | 3 年 | 武田聡美 | 「命」を生きる人との出会い |
| | 19 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 埼玉 | 加須市立昭和中学校 | 2 年 | 町田卓哉 | 何だっていいんだぁ |
| | | 国民会議会長特別賞 | 愛媛 | 内子町立大瀬中学校 | 1 年 | 東影喜子 | 猪の涙 |
| 第 30 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 熊本 | 産山村立産山中学校 | 3 年 | 中村那津三 | なぜ母牛「あやか」は死んだのか |
| | 20 年度 | 文部科学大臣奨励賞 | 沖縄 | 石垣市立大濱中学校 | 3 年 | 新城利絵 | 島の心をメロディにのせて |
| | | 国民会議会長特別賞 | 富山 | 高岡市立志貴野中学校 | 3 年 | 小久保緑 | 田んぼと私 |
| 第 31 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 大分 | 竹田市立竹田中学校 | 3 年 | 廣瀬岳 | メッセージ ~ 特攻基地・知覧 ~ |
| | 21 年度 | 文部科学大臣賞 | 宮城 | 気仙沼市立気仙沼中学校 | 3 年 | 志田晶 | 私も「小さな波」となって |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 静岡 | 牧之原市立相良中学校 | 3 年 | 瀧谷美紀 | 支えられた私 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 新潟 | 村上市立平林中学校 | 3 年 | 小池尚輝 | 音のない世界、声のない会話 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 奈良 | 智辯学園奈良カレッジ中学部 | 3 年 | 小川歌穂 | スマイルと真心はタダ |
| | | 審査委員会委員長賞 | 島根 | 安来市立広瀬中学校 | 3 年 | 田邊光 | 故郷を思って |
| 第 32 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 静岡 | 沼津市立第三中学校 | 3 年 | 内村綸笑 | 命 |
| | 22 年度 | 文部科学大臣賞 | 愛知 | 豊田市立足助中学校 | 3 年 | 藤井成一 | 父の言葉の意味を知って |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 愛媛 | 新居浜市立西中学校 | 3 年 | 飯尾まい | 命のチキンカレー |
| | | 審査委員会委員長賞 | 長崎 | 佐世保市立黒島中学校 | 3 年 | 松本朋之 | 黒島だからこそ |
| 第 33 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 福島 | いわき市立勿来第二中学校 | 3 年 | 瓜生健悟 | 震災を乗り越えて |
| | 23 年度 | 文部科学大臣賞 | 新潟 | 柏崎市立第一中学校 | 3 年 | 西澤望美 | 過去と今と未来を生きる |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 東京 | 葛飾区立常盤中学校 | 2 年 | 齊藤麗香 | 家族の本当の意味 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 岩手 | 陸前高田市立気仙中学校 | 3 年 | 小笠原和恵 | 高らかに　響け |

| 回数 | 年度 | 受賞名 | 都道府県名 | 学校名 | 学年 | 氏名 | 発表テーマ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第 34 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 千葉 | 千葉県立千葉中学校 | 3 年 | 山本恭輔 | リアルに人とつながるということ |
| | 24 年度 | 文部科学大臣賞 | 福井 | 福井県立盲学校 | 3 年 | 山本穣梨 | 私の夢　私の生き方 |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 熊本 | 宇土市立網田中学校 | 3 年 | 加來萌 | 父と私がふるさと網田を愛する理由 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 福島 | いわき市立中央台北中学校 | 3 年 | 山野邉のどか | 助け合いのバトン |
| 第 35 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 宮城 | 気仙沼市立小原木中学校 | 3 年 | 梶川裕登 | 忘れないために |
| | 25 年度 | 文部科学大臣賞 | 大分 | 杵築市立杵築中学校 | 3 年 | 大柳涼子 | マイファミリー |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 兵庫 | 赤穂市立有年中学校 | 3 年 | 松本優香 | 十五歳の決意 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 愛知 | 豊田市立石野中学校 | 3 年 | 安藤明日香 | 伝統を受け継ぐ |
| 第 36 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 福岡 | 飯塚市立飯塚第一中学校 | 3 年 | 山本由菜 | 子は宝～自分の命より大切なもの |
| | 26 年度 | 文部科学大臣賞 | 山形 | 酒田市立第六中学校 | 3 年 | 菅原すみれ | 唄い継ぐ想い |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 高知 | 中土佐町立久礼中学校 | 2 年 | 林萌桃 | いのちの花・咲いて |
| | | 審査委員会委員長賞 | 島根 | 吉賀町立柿木中学校 | 3 年 | 河野鉄太 | 鬼退治 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 沖縄 | 那覇市立那覇中学校 | 2 年 | 高橋天洋 | 「中国人」という名の偏見 |
| 第 37 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 広島 | 広島市立国泰寺中学校 | 2 年 | 藤井志穂 | 語る思いと聞く思い |
| | 27 年度 | 文部科学大臣賞 | 東京 | 板橋区立中台中学校 | 3 年 | 張哲語 | 中国と日本の狭間にて |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 大阪 | 堺市立登美丘中学校 | 3 年 | 伊勢川翠 | 素晴らしい奇跡の集合体 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 群馬 | 明照学園樹徳中学校 | 3 年 | 蓼沼花音 | 10 万分の 1.5 の奇跡 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 沖縄 | 八重瀬町立東風平中学校 | 3 年 | 河野水穂 | 乗り越えたからこそ見えたもの |
| 第 38 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 岐阜 | 関市立旭ヶ丘中学校 | 3 年 | 大見夏鈴 | 障がいは個性 |
| | 28 年度 | 文部科学大臣賞 | 広島 | 広島市立二葉中学校 | 2 年 | 牟田悠一郎 | 戦争を知ること |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 三重 | 四日市市立羽津中学校 | 3 年 | 中前純奈 | 伝えたいこと |
| | | 審査委員会委員長賞 | 新潟 | 五泉市立五泉北中学校 | 1 年 | 髙橋心太郎 | みんなが幸福な社会を |
| 第 39 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 新潟 | 新潟県立燕中等教育学校 | 2 年 | 平澤幸芽 | 仲間を守る一言 |
| | 29 年度 | 文部科学大臣賞 | 島根 | 海士町立海士中学校 | 3 年 | 井手上漠 | カラフル |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 群馬 | 太田市立南中学校 | 3 年 | 森田愛美 | 私は、私の足で生きていく。 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 愛知 | 蒲郡市立蒲郡中学校 | 3 年 | 荒島彩乃 | たった一言が言えなくて |
| | | 審査委員会委員長賞 | 鹿児島 | 鹿児島市立坂元中学校 | 2 年 | 松元一真 | 本当の平和へ |
| 第 40 回 | 平成 | 内閣総理大臣賞 | 山形 | 天童市立第三中学校 | 3 年 | 岩淵礼姫 | 人生を駆け抜ける |
| | 30 年度 | 文部科学大臣賞 | 島根 | 隠岐の島町立西郷中学校 | 1 年 | 高梨はな | ダブル |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 熊本 | 御船町立御船中学校 | 3 年 | 坂本優 | 響け！幸せのメロディー |
| | | 審査委員会委員長賞 | 静岡 | 浜松市立佐久間中学校 | 3 年 | 内山ほの栞 | 自分を好きになる |
| | | 審査委員会委員長賞 | 愛知 | 豊田市立井郷中学校 | 3 年 | 富田真亜玖 | 思いやりは言葉を超える |
| 第 41 回 | 令和 | 内閣総理大臣賞 | 東京 | 筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部） | 1 年 | 藤田大悟 | 心の扉 |
| | 元年度 | 文部科学大臣賞 | 熊本 | 熊本大学教育学部附属中学校 | 3 年 | 廣岡里奈 | 私が望む優しい未来は |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 山梨 | 北杜市立甲陵中学校 | 2 年 | 小松日菜 | 繋ぐ糸が切れないように |
| | | 審査委員会委員長賞 | 宮城 | 登米市立佐沼中学校 | 3 年 | 加藤海音 | 十人十色 |
| | | 審査委員会委員長賞 | 静岡 | 静岡市立清水両河内中学校 | 3 年 | 望月香琳 | 地域と共にある生徒会−今、私たちにできること、すべきこと |
| 第 42 回 | 令和 | 内閣総理大臣賞 | 鹿児島 | 霧島市立横川中学校 | 3 年 | 池島音羽 | 言葉を紡ぐ |
| | 2 年度 | 文部科学大臣賞 | 栃木 | 大田原市立金田北中学校 | 3 年 | 荒井千恵理 | 静から動へ |
| | | 国立青少年教育振興機構理事長賞 | 愛知 | 豊田市立末野原中学校 | 3 年 | 戸塚優羽 | 目には見えないもの |
| | | 審査委員会委員長賞 | 静岡 | 浜松市立北浜中学校 | 3 年 | 村松グルン良智美 | 人生のかけがえのない財産について |
| | | 審査委員会委員長賞 | 島根 | 松江市立宍道中学校 | 3 年 | 武田はぐみ | 「らしさ」を輝かせる |
| | | 審査委員会委員長賞 | 熊本 | 熊本市立出水南中学校 | 3 年 | 大田直人 | 你好ニッポン |

# 令和２年度都道府県大会実施概要

| 都道府県名 | 主催者 | | 大会名 | |
|---|---|---|---|---|
| | 開催期日 | | 会場 | |
| | 発表者数 | 応募者数 | 参加学校数 | 視聴者数 |
| | 実施内容 | | | |

**北海道・東北ブロック（1 道 6 県　応募者数　21,384 名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 北海道 | － | | － | |
| | － | | － | |
| | － | － | － | － |
| | 新型コロナウィルス感染症の影響により北海道大会を中止。 | | | |
| 2 青森県 | 青少年育成青森県民会議 | | 第 42 回青森県少年の主張大会 | |
| | 令和２年９月 18 日（金） | | むつ市立田名部中学校　体育館 | |
| | ８名 | 73 名 | 12 校 | 700 名 |
| | 県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された８名による青森県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考。審査員５名 | | | |
| 3 岩手県 | わたしの主張岩手県大会実行委員会 | | 第 22 回わたしの主張岩手県大会 | |
| | 令和２年９月 16 日（水） | | ビッグルーフ滝沢 | |
| | 16 名 | 3,647 名 | 152 校 | 99 名 |
| | 地区大会より推薦された 17 名による岩手県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞３名を選考。審査委員７名 | | | |
| 4 宮城県 | － | | － | |
| | － | | － | |
| | － | － | － | － |
| | 新型コロナウィルス感染症の影響により宮城県大会を中止。 | | | |
| 5 秋田県 | 公益社団法人青少年育成秋田県民会議、秋田県 | | わたしの主張 2020（第 42 回少年の主張秋田県大会） | |
| | 令和２年９月 16 日（水） | | 秋田市立城東中学校 | |
| | 13 名 | 6,567 名 | 40 校 | 350 名 |
| | 県北・県中央・県南地区で予選大会を開催。各地区大会優秀者 12 名及び、県大会開催学校推薦者１名の計 13 名による秋田県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞４名、優良賞８名を選考。審査委員６名 | | | |
| 6 山形県 | － | | － | |
| | － | | － | |
| | － | － | － | － |
| | 新型コロナウィルス感染症の影響により山形県大会を中止。 | | | |
| 7 福島県 | 福島県青少年育成県民会議 | | 第 42 回少年の主張福島県大会 | |
| | 令和２年９月 25 日（金） | | じげんホール | |
| | 16 名 | 11,097 名 | 115 校 | 98 名 |
| | 各青少年育成市町村民会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた 15 名及び開催地の中学生１名による福島県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞５名、優良賞 10 名を選考。審査員７名 | | | |

**関東・甲信越静ブロック（1 都 10 県　応募者数　76,442 名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8 茨城県 | 公益社団法人 茨城県青少年育成協会 | | 少年の主張茨城県大会 | |
| | 令和２年９月 26 日（土） | | 茨城県立青少年会館　大研修室 | |
| | 10 名 | 7,807 名 | 98 校 | 約 100 名 |
| | 各中学校２作品以内の推薦された作品について、審査委員会で選出された 10 名による茨城県大会を開催。<br>優秀賞（県大会出場者 10 名）、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞、水戸西ライオンズクラブ会長賞（茨城県知事賞受賞者）、鹿島アントラーズ賞（茨城県知事賞受賞者、茨城県議会議長賞受賞者、茨城県教育委員会教育長賞受賞者）を選考。審査委員６名 | | | |
| 9 栃木県 | 栃木県青少年育成県民会議、栃木県、栃木県教育委員会 | | 第 43 回栃木県少年の主張発表県大会 | |
| | 令和２年９月 19 日（土） | | 栃木県総合文化センターサブホール | |
| | 16 名 | 12,072 名 | 157 校 | 50 名 |
| | 県内８地区で各中学校の代表１名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された 16 名による栃木県大会を開催。<br>最優秀賞（栃木県知事賞）１名、優秀賞（栃木県教育委員会教育長賞）３名、奨励賞（栃木県青少年育成県民会議理事長賞）12 名を選考。審査委員９名 | | | |
| 10 群馬県 | － | | － | |
| | － | | － | |
| | － | － | － | － |
| | 新型コロナウィルス感染症の影響により群馬県大会を中止。 | | | |
| 11 埼玉県 | 埼玉県、埼玉県教育委員会、青少年育成埼玉県民会議 | | 令和２年度少年の主張埼玉県大会 | |
| | 令和２年９月６日（日） | | 埼玉県知事公館大会議室 | |
| | 15 名 | 18,412 名 | 252 校 | 80 名 |
| | 作文審査により選出された５名（中学生の部）による埼玉県大会を開催。<br>最優秀賞（知事賞）１名、優秀賞（教育長賞）１名、優良賞（県民会議会長賞）３名を選考。審査委員 11 名 | | | |
| 12 千葉県 | 千葉県青少年総合対策本部（千葉県、千葉県教育委員会、千葉県警察本部） | | 第 42 回「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会 | |
| | 令和２年９月 19 日（土） | | 千葉県教育会館 大ホール | |
| | 12 名 | 1,081 名 | 19 校 | 70 名 |
| | 応募作文の中から学校長及び団体長推薦作文について、一次、二次の作文審査を行い、選出された 12 名による千葉県大会を開催。<br>最優秀賞（県知事賞）１名、優秀賞２名、審査員特別賞１名、奨励賞８名を選考。審査員８名 | | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 13 東京都 | 東京都 | | 令和２年度中学生の主張東京都大会 | |
| | 令和２年９月 13 日（日） | | 東京都庁第一本庁舎大会議場 | |
| | 10 名 | 6,482 名 | 65 校 | 50 名 |
| | 東京都による作文審査を行い、東京都代表選考発表者 10 名及び奨励賞 10 名を選出。東京都代表選考者 10 名よる東京都大会を開催。知事賞１名、東京都教育委員会賞２名、優良賞７名を選考。審査員５名 | | | |
| 14 神奈川県 | 神奈川県 | | 中学生の主張 in かながわ | |
| | 令和２年９月 27 日（日） | | 神奈川県立青少年センター スタジオ HIKARI | |
| | ７名 | 2,478 名 | 58 校 | ０名（無観客で実施） |
| | 原稿審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者７名、奨励賞受賞者 10 名を選出。発表大会出場者７名による神奈川県大会を開催。<br>最優秀賞（神奈川県知事賞）１名、優秀賞６名（神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK 横浜放送局長賞・テレビ神奈川賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各１名）を選考。審査委員５名 | | | |
| 15 新潟県 | 新潟県、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県青少年健全育成県民会議 | | 令和２年度新潟県少年の主張大会―わたしの主張― | |
| | 令和２年９月 19 日（土） | | 越後妻有文化ホール「段十ろう」 | |
| | 14 名 | 16,649 名 | 143 校 | 100 名 |
| | 県内を 13 地区に分け、地区ごとに発表者を選出。各地区大会において選出された 14 名による新潟県大会を開催。<br>最優秀賞（県知事賞）１名、優秀賞（県教育長賞）２名、奨励賞（県民会議会長賞）11 名、奨励賞の中から審査員特考別賞１名を選考。審査委員９名 | | | |
| 16 山梨県 | 公益財団法人山梨県青少年協会、青少年育成山梨県民会議事業実行委員会 | | 第 42 回少年の主張山梨県大会～わたしの主張 2020 ～ | |
| | 令和２年８月 22 日（土） | | 山梨県立青少年センター別館　多目的ホール | |
| | ８名 | 400 名 | 16 校 | 34 名 |
| | 中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された８名による山梨県大会を開催。<br>最優秀賞（山梨県教育長賞）１名、優秀賞（山梨日日新聞社賞・山梨放送賞・NHK 甲府放送局長賞・テレビ山梨社長賞各１名）（青少年育成山梨県民会議会長賞３名程度）を選考。審査委員８名 | | | |
| 17 長野県 | 長野県、長野県教育委員会、長野県警察本部、長野県将来世代応援県民会議 | | 令和２年度少年の主張長野県大会 | |
| | 令和２年９月 11 日（金） | | 長野市芸術館　リサイタルホール | |
| | 10 名 | 969 名 | 25 校 | 43 名 |
| | 各地域事務局長から推薦された 10 名（各事務局から１名）による長野県大会を開催。<br>県知事賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員６名 | | | |
| 18 静岡県 | 静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議 | | わたしの主張 2020 静岡県大会 | |
| | 令和２年９月 19 日（土） | | 静岡県庁 | |
| | 12 名 | 10,092 名 | 135 校 | 約 40 名 |
| | 作文審査会により静東・静西教育事務所管内から８名、静岡市、浜松市から各２名の選出された 12 名による静岡県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞３名、優良賞８名。審査委員７名 | | | |

**中部・近畿ブロック（2 府 10 県　応募者数　94,003 名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 19 富山県 | 富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議 | | 第 42 回少年の主張富山県大会 | |
| | 令和２年８月 18 日（火） | | パレブラン高志会館 | |
| | 10 名 | 1,727 名 | 17 校 | 50 名 |
| | 各中学校から３点程度の推薦された作品を市町村教育委員会が 10 点程度選考・推薦し、審査委員会において作文審査により選出された 10 名による富山県大会を開催。最優秀賞１名、審査委員特別賞１名、優秀賞８名を選考。審査委員８名 | | | |
| 20 石川県 | 石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会 | | 令和２年度少年の主張石川県大会 | |
| | 令和２年８月 30 日（日） | | 石川県青少年総合研修センター | |
| | 12 名 | 19,409 名 | 43 校 | 50 名 |
| | 各地区大会から選出された 12 名（各地区４名ずつ）による石川県大会を開催。最優秀賞（石川県知事賞）１名、優秀賞（石川県教育委員会賞）２名、奨励賞（石川県健民運動推進本部長賞）９名を選考。審査委員６名 | | | |
| 21 福井県 | 公益財団法人青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部 | | 令和２年度「少年の主張」コンクール福井県大会 | |
| | 令和２年８月 20 日（木） | | 福井県職員会館ビル | |
| | ８名 | 5,091 名 | 25 校 | ０名（音声及び書面審査のみ） |
| | ブロック審査で選出された、８名による福井県大会を開催。<br>福井県知事賞１名、（公財）青少年育成福井県民会議会長賞１名、国際ソロプチミスト福井会長賞１名、福井ライオンズクラブ賞１名、福井新聞社賞１名、NHK 福井放送局賞１名、FBC 賞１名、福井テレビ賞１名を選考。審査委員 10 名 | | | |
| 22 愛知県 | 愛知県、愛知県青少年育成県民会議 | | 少年の主張愛知県大会 | |
| | 令和２年８月 27 日（木） | | 愛知県三の丸庁舎 | |
| | １４名 | 31,940 名 | 219 校 | ０名（映像審査のみ） |
| | 各中学校から１点の推薦された作品を、各教育事務所等は学校数に応じて選定し、ブロックへ推薦。各ブロックから選出された計 14 名による愛知県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞４名、奨励賞 14 名を選考。審査委員７名 | | | |
| 23 三重県 | 公益財団法人三重こどもわかもの育成財団、伊賀地区中学生のメッセージ実行委員会 | | 中学生のメッセージ 2020（第 42 回少年の主張三重県大会） | |
| | 令和２年８月 29 日（土） | | 伊賀市文化会館　さまざまホール | |
| | １３名 | 9,774 名 | 71 校 | 123 名 |
| | １次選考は提出された作品の中から 40 名程度を、２次選考で「中学校のメッセージ」で発表する 14 名と地域優秀者 26 名程度を選考。選出された 13 名による三重県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞３名、優良賞９名を選考。審査委員 10 名 | | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 24 岐阜県 | 岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議 | | 第 42 回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張 2020 ～ | |
| | 令和２年８月３日（月） | | 美濃市文化会館 | |
| | 17 名 | 6,145 名 | 99 校 | 104 名 |
| | 市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計 17 名による岐阜県大会を開催。<br>県知事賞１名、青少年育成県民会議会長賞１名、県教育委員会賞１名、岐阜新聞・岐阜放送賞１名、優秀賞 13 名を選考。審査委員７名 | | | |
| 25 滋賀県 | － | | － | |
| | － | | － | |
| | － | － | － | － |
| | 新型コロナウィルス感染症の影響により滋賀県大会を中止。 | | | |
| 26 京都府 | 公益社団法人京都府青少年育成協会、京都府 PTA 協議会、京都市 PTA 連絡協議会 | | 第 42 回「少年の主張京都府大会」 | |
| | 令和２年９月 27 日（日） | | 本願寺聞法会館　多目的ホール | |
| | 17 名 | 1,586 名 | 23 校 | 90 名 |
| | 応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者 17 名による京都府大会を開催。<br>京都府知事賞１名、京都府青少年育成協会会長賞１名、京都府教育委員会教育長賞１名、京都市教育長賞１名、京都府市町村教育委員会連合会会長賞１名、京都府公立中学校長会会長賞１名、京都府 PTA 協議会会長賞１名、京都市 PTA 連絡協議会会長賞１名、京都新聞賞１名、KBS 京都賞１名、京都府青少年育成協会会長奨励賞７名を選考。審査委員９名 | | | |
| 27 大阪府 | 青少年育成大阪府民会議、大阪府 | | 第 42 回「中学生の主張」～伝えよう！君のメッセージ～ | |
| | 令和２年９月５日（土） | | クレオ大阪南 | |
| | 10 名 | 558 名 | 17 校 | 77 名 |
| | 応募作品の中から、作文審査により大会発表者 10 名、努力賞 10 名以内を選出し、大阪府大会を開催。最優秀賞（大阪府知事賞）1 名、優秀賞（大阪府教育委員会賞・ＮＨＫ大阪放送局長賞・国際ソロプチミスト大阪賞）３名、優良賞（審査員特別賞）１名、優良賞５名、努力賞 10 名以内を選考。審査委員６名 | | | |
| 28 兵庫県 | 公益財団法人兵庫県青少年本部 | | 令和２年度少年の主張兵庫県大会～中学生のメッセージ 2020 ～ | |
| | 令和２年９月 26 日（土） | | 兵庫県民会館　けんみんホール | |
| | 10 名 | 4,331 名 | 79 校 | 160 名 |
| | 県内 10 地区において原稿審査及び地方大会で選出された 10 名による兵庫県大会を開催。<br>知事賞１名、青少年本部理事長優秀賞２名、青少年本部理事長奨励賞７名、審査員７名 | | | |
| 29 奈良県 | 奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会 | | 第 42 回「少年の主張」奈良県大会～わたしの主張 2020 ～ | |
| | 令和２年９月６日（日） | | 五條市市民会館 | |
| | 10 名 | 3,592 名 | 18 校 | 80 名 |
| | 原稿審査により選出された 10 名による奈良県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査員８名 | | | |
| 30 和歌山県 | 公益社団法人和歌山県青少年育成協会 | | 「少年メッセージ 2020」作文審査会（和歌山県大会） | |
| | 令和２年９月８日（火） | | 県民交流プラザ　和歌山ビッグ愛 | |
| | 18 名 | 9,850 名 | 98 校 | ０名（作文審査のみ） |
| | 応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された優秀作品各２名（県大会開催地方は４名）合計 18 作品による作文審査会（和歌山県大会）を開催。<br>金賞１名、銀賞２名、銅賞３名、特別賞２名を選考。審査委員８名 | | | |

**中国・四国ブロック（9 県　応募者数　25,446 名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 31 鳥取県 | 青少年育成鳥取県民会議 | | 令和２年度「第 42 回少年の主張鳥取県大会」 | |
| | 令和２年９月 15 日（火） | | 鳥取県立倉吉未来中心 | |
| | 12 名 | 85 名 | 8 校 | ０名（映像審査のみ） |
| | 応募作品の中から書類審査を行い、選出された 12 名による鳥取県大会を開催。<br>最優秀賞（鳥取県知事杯）１名、優秀賞（県教育長杯、県議会議長杯、県市長会長杯、県町村会長杯、新日本海新聞社長杯）５名、優良賞６名を選考。審査委員６名 | | | |
| 32 島根県 | 青少年育成島根県民会議・島根県中学校長会（主管：松江市中学校長会） | | 令和２年度　少年の主張島根県大会（動画審査会） | |
| | 令和２年９月 29 日（火） | | テクノアークしまね　中会議室 | |
| | 17 名 | 17,104 名 | 95 校 | ０名（動画審査のみ） |
| | 各学校による１次選考後、県内を 13 ブロックに分けた地区大会にて選考され、市郡中学校校長より推薦された 17 名による島根県大会を開催。<br>島根県知事賞１名、島根県教育委員会教育長賞１名、島根県警察本部長賞１名、青少年育成島根県民会議会長賞１名、審査員特別賞２名、優秀賞 11 名を選考。審査委員７名 | | | |
| 33 岡山県 | 公益社団法人岡山県青少年育成県民会議 | | 第 42 回少年の主張岡山県大会 | |
| | 令和２年８月 21 日（金） | | 岡山県総合福祉・ボランティア・NPO 会館（きらめきプラザ） | |
| | ０名 | 2,504 名 | 10 校 | ０名（作文審査のみ） |
| | 新型コロナウィルス感染症等の影響により、主張発表会を実施せず、作文審査のみ。<br>最優秀賞１名、優秀賞４名、優良賞を選考。審査員５名 | | | |
| 34 広島県 | 公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟 | | 「少年の主張」・中学生話し方大会 2020 | |
| | 令和２年９月５日（土） | | 広島県社会福祉会館 | |
| | 16 名 | 1,086 名 | 24 校 | 20 名 |
| | 提出された原稿を主催者において審査し、選考された 16 名による広島県大会を開催。<br>広島県知事賞１名、青少年育成広島県民会議会長賞１名、広島県中学校話し方連盟会長賞１名、国際ソロプチミスト広島会長賞１名、広島清流ライオンズクラブ会長賞１名、優秀賞３名、優良賞１名を選考。審査員 11 名 | | | |
| 35 山口県 | 山口県青少年育成県民会議 | | 少年の主張コンクール山口県大会（映像審査会） | |
| | 令和２年８月 22 日（土） | | 山口県教育会館（第４研修室） | |
| | ８名 | 477 名 | 11 校 | 132 名（WEB 開催） |
| | 一次審査（各市町教育委員会等）及び二次審査（青少年育成県民会議）において作文審査により選出された８名による山口県大会を開催。最優秀賞（知事賞）１名、優秀賞（教育長賞、県民会議会長賞）２名、優良賞５名を選考。審査員４名 | | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 36 徳島県 | 青少年育成徳島県民会議、徳島県保護司会連合会、徳島県中学校長会 | | 第 66 回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会並びに令和 2 年度少年の主張徳島県大会 | |
| | 令和２年９月９日（水） | | 徳島県立２１世紀館イベントホール | |
| | ９名 | 413 名 | 31 校 | ０名 |
| | 中学校生徒弁論大会及び県の直接エントリー制度による作文審査にて選出された代表 9 名による徳島県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞第一席１名、優秀賞７名を選考。審査委員 10 名 | | | |
| 37 香川県 | 青少年育成香川県民会議、香川県中学校長会 | | 第 71 回香川県中学校生徒弁論大会・第 42 回少年の主張香川県大会 | |
| | 令和２年９月 11 日（金） | | 作文審査のため会場を設けての開催は行っていない | |
| | １３名 | 2,292 名 | 12 校 | ０名（作文審査のみ） |
| | 各地区推進委員会から " 社会を明るくする運動 " 作文コンテストに応募があった生徒（高松地区は５名）13 名による香川県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞３名、優良賞９名を選考。審査委員７名 | | | |
| 38 愛媛県 | 愛媛県、愛媛県教育委員会、愛媛県青少年育成協議会 | | 愛媛の未来をひらく少年の主張大会 | |
| | 令和２年９月５日（土） | | 愛媛県生涯学習センター | |
| | 10 名 | 1,314 名 | 12 校 | 約 220 名 |
| | 主催者において、原稿審査により大会発表者 10 名による愛媛県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員５名 | | | |
| 39 高知県 | 青少年育成高知県民会議 | | 令和 2 年度 第 42 回「少年の主張」高知県大会 | |
| | 令和２年９月６日（日）＊台風の影響で中止 | | 台風の影響で中止の為、会場使用なし | |
| | ９名 | 171 名 | 6 校 | ０名（台風の影響で中止） |
| | 作文審査により選出された９名による高知県大会を開催。<br>最優秀賞１名、会長賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考。審査委員５名 | | | |

**九州ブロック（８県　応募者数　26,034 名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 40 福岡県 | 公益社団法人福岡県青少年育成県民会議 | | 令和２年度少年の主張福岡県大会 | |
| | 令和２年８月 29 日（土） | | サザンクス筑後 | |
| | 14 名 | 11,749 名 | 35 校 | 145 名 |
| | 「少年の主張」関連行事において選出された作品及び地区大会推薦 3 作品について審査のうえ上位 14 名程度による福岡県大会を開催。<br>福岡県知事賞１名、福岡県教育委員会賞１名、開催地首長賞１名、優秀賞第一席１名、審査委員会特別賞１名、優秀賞９名を選考。審査委員 10 名。 | | | |
| 41 佐賀県 | 佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀県青少年育成県民会議 | | 第 42 回少年の主張佐賀県大会 | |
| | 令和２年８月 23 日（日） | | アバンセホール | |
| | ８名 | 632 名 | 14 校 | 73 名 |
| | 各学校において応募者を募集し、推薦されたものを予選審査会により選出、選出者８名による佐賀県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考。審査委員６名 | | | |
| 42 長崎県 | 長崎県青少年育成県民会議 | | 第 42 回（令和 2 年度）少年の主張長崎県大会 | |
| | 令和２年８月 19 日（水） | | 長崎ブリックホール会議室 | |
| | 12 名 | 6,924 名 | 97 校 | 21 名 |
| | 第１次選考は、各市町の主管課、県立・国立・私立の学校について本県民会議が委託した機関で行い、第２次選考は県民会議が設置する選考委員会で行い、選出された 12 名による長崎県大会を開催。最優秀賞（青少年育成県民会議賞）１名、優秀賞（長崎新聞社賞、NHK 賞、長崎県校長会賞、長崎県 PTA 連合会賞、ココロねっこ賞）５名、優良賞６名を選考。審査委員６名 | | | |
| 43 熊本県 | 熊本県、熊本県教育委員会、熊本県青少年育成県民会議 | | 第 42 回「少年の主張」熊本県大会 | |
| | 令和２年９月５日（土） | | 御船町カルチャーセンター | |
| | ７名 | 961 名 | 26 校 | 30 名 |
| | 事前審査会での作文審査により選出された各地区等代表の６名、開催地推薦１名の計７名による熊本県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、奨励賞４名を選考。審査委員６名 | | | |
| 44 大分県 | 大分県青少年育成県民会議 | | 第 42 回少年の主張大分県大会 | |
| | 令和２年８月 28 日（金） | | 津久見市民会館 | |
| | 10 名 | 1,291 名 | 24 校 | 50 名 |
| | 各学校等による第１次審査、審査員による２次審査を行い、県大会出場者 10 名及び佳作を決定。県大会出場者 10 名による大分県大会を開催。最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名、大分県教育長賞１名を選考。審査委員５名 | | | |
| 45 宮崎県 | 公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議 | | 「青少年の主張」宮崎県大会作文審査 | |
| | 令和２年９月 10 日（木） | | 宮崎県婦人会館　大会議室「さくら」 | |
| | ５４名 | 689 名 | 20 校 | ４名 |
| | 新型コロナウィルス感染症拡大防止のため大会は中止し、応募のあった作文による審査を行い選定。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員４名 | | | |
| 46 鹿児島県 | 鹿児島県青少年育成県民会議 | | 令和 2 年度「第 42 回少年の主張鹿児島県大会」 | |
| | 令和２年８月２日（日） | | 鹿児島県青少年会館　大ホール | |
| | 10 名 | 3,574 名 | 43 校 | 80 名 |
| | 各学校から提出された作文を審査、審査委員会により選出された 10 名による鹿児島県大会を開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞７名を選考。審査委員７名 | | | |
| 47 沖縄県 | 公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議 | | 第 42 回沖縄県少年の主張大会 | |
| | 令和２年９月３０日（水） | | WEB（Zoom）にて開催 | |
| | 12 名 | 214 名 | 66 校 | 275 名（WEB 開催） |
| | 原稿審査により選出された各地区代表 12 名による沖縄県大会を WEB にて開催。<br>最優秀賞１名、優秀賞２名、審査員特別賞２名、優良賞７名を選考。審査委員５名。 | | | |

# 第 43 回少年の主張全国大会　開催のお知らせ

○開催日時：令和 3 年 11 月 14 日（日）

○開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟大ホール
（住所：〒 151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号）

○対　　象：日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

○主　　催：国立青少年教育振興機構

○協　　力：都道府県、青少年育成道府県民会議、全日本中学校長会、
（予　定）日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会、
全国青少年育成県民会議連合会

○後　　援：内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、
（予　定）一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会

○主張発表者（出場者）・発表内容：

(1) 主張発表者
各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

(2) ブロック代表定数
全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

○ 北海道・東北ブロック・・・・・2 名
○ 関東・甲信越静ブロック・・・・3 名
○ 中部・近畿ブロック・・・・・・3 名
○ 中国・四国ブロック・・・・・・2 名
○ 九州ブロック・・・・・・・・・2 名

※ 新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて、開催方法を変更させていただく場合があります。
※ 都道府県大会の詳細につきましては、各主催者にお問い合わせ願います。

第 42 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2020 ～

令和 3 年 1 月発行

編集　国立青少年教育振興機構
〒 151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
https://www.niye.go.jp
担当　教育事業部事業課
電話：03-6407-7683　FAX：03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。

# 輝く未来 育て支えて 見守って

## 令和2年11月

# 子供・若者 育成支援強調月間

内閣府

実施主体

内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、復興庁、総務省、法務省、最高検察庁、外務省、財務省、国税庁、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、防衛省、最高裁判所、都道府県、市区町村、全国青少年育成県民会議連合会、青少年育成道府県民会議、青少年育成市町村民会議、青少年関係諸団体

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

体験の風をおこそう